









ICOM - ICMS 東京大会 2023 ［報告書］






ICMS

2023 Tokyo JAPAN







ICOM - ICMS 東京大会 2023 ［報告書］

地域に根差した防災セキュリティネットワークの構築 〜連携が生む相乗効果の事例研究〜

2023年10月11日•12日　東京国立博物館　　2023年10月13日　日光東照宮

主催：ICOM - ICMS / ICOM 日本委員会 / 日本博物館協会 / 東京国立博物館 / 東京富士美術館
後援：全国美術館会議
協力：日本政府観光局（JNTO） / ヴィクトリア&アルバート博物館 / ハッソ・プラットナー財団 / テート / ロサンゼルス・カウンティ美術館 / 河南博物院

ICMS ICOM international committee for museum security
ICOM international council of museums Japan
公益財団法人 日本博物館協会 Japanese Association of Museums
TNM TOKYO NATIONAL MUSEUM
FAM TOKYO FUJI ART MUSEUM 東京富士美術館

ICOM - ICMS Conference 2023 in Tokyo

文化庁 Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

令和5年度 文化庁 Innovate MUSEUM 事業
Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2023

ICOM - ICMS 東京大会 2023

地域に根差した防災セキュリティネットワークの構築
～連携が生む相乗効果の事例研究～

2023年10月11日・12日　東京国立博物館
10月13日　日光東照宮

ICMS
2023 Tokyo JAPAN

主催：ICOM-ICMS／ICOM 日本委員会／日本博物館協会／東京国立博物館／東京富士美術館

後援：全国美術館会議

協力：日本政府観光局（JNTO）／ヴィクトリア&アルバート博物館／ハッソ・プラットナー財団／
テート／ロサンゼルス・カウンティ美術館／河南博物院

目次

ICOM-ICMS東京大会2023の概要 —— 3

東京大会プログラム —— 4

開会挨拶／五木田 聡 —— 6
ICOM - ICMS 東京大会2023実行委員長・東京富士美術館館長

ICMS委員長挨拶／Vernon RAPLEY —— 7
ICOM -ICMS 委員長・ヴィクトリア&アルバート博物館 文化遺産保護・セキュリティ部長

歓迎挨拶／藤原 誠 —— 9
東京国立博物館長

祝辞／合田 哲雄 —— 10
文化庁 次長

全体写真・基調講演者写真 —— 11

東京大会実行委員写真 —— 12

場内記録 —— 13

歓迎の舞・八王子芸妓衆 —— 17

ICOM-ICMSについて —— 18

基調講演 —— 19

特別発表 —— 32

研究発表 —— 39

ICMS年次総会 —— 92

交流会 —— 93

浮世絵・摺師実演 —— 94

世界遺産 日光の社寺「防災セキュリティ視察」 —— 95

東京大会実行委員会の準備風景 —— 105

ICOM - ICMS 東京大会2023運営サポート一覧 —— 106

ICOM - ICMS東京大会2023の概要

ICOM-ICMS（国際博物館会議・博物館セキュリティ国際委員会）の東京大会が、「地域に根差した防災セキュリティネットワークの構築」と題し、事故なく開催することができました。つきましては、本大会の概要を以下の通りにまとめ報告いたします。

昨今、国内外における博物館・美術館の作品の盗難、紛失、棄損事件や自然災害による被害が後をたたず、グローバル化を背景とした社会状況に鑑み、日本の博物館・美術館の防災セキュリティの意識向上とその体制を構築することが急務となっております。

国内外の博物館・美術館とのグローバルなネットワークを構築し、防災セキュリティ意識の向上を図るとともに、日本の実情に合わせた効果的・実践的な防災セキュリティ体制の構築をするべく、ICOM(国際博物館会議)の委員会の一つであるICMS(博物館セキュリティ国際委員会)の年次大会を東京で開催いたしました。

ICOM-ICMS東京大会では、「地域に根差した防災セキュリティネットワークの構築」をテーマに掲げ、国内外の博物館・美術館における様々な防災セキュリティの実践が紹介されました。

この大会は、ICOM-ICMS、同東京大会実行委員会などが共同で開催し、創造性、仲間意識を育む熱意のこもるプログラムとなりました。

ICOM-ICMSとしては、博物館セキュリティの国際的な会議を通じて、危機に直面する博物館・美術館の結束が強調され、各国の経験を共有し、情報を交換することが重要視されています。

とりわけ、遠方からの参加は文化遺産への貢献と文化財保護に対する決意の証でもありました。この機会は、協力と意見交換は変化をもたらすチャンスであることが強調されるものとなりました。

2023年は関東大震災から100年の節目であり、博物館・美術館の防災・防犯に改めて注目が集まる中、ICOM-ICMSの活動が未来に向けて有益な討議の場となりましたことをご報告申し上げます。

【プログラム】1日目〈ハイブリッド開催〉
2023年10月11日(水)10:00 – 17:30(日本時間)
会場:東京国立博物館 大講堂

10:00 **オープニングセレモニー**

日本舞踊・歓迎の舞

八王子芸妓(7名)

開会挨拶

五木田 聡 (日本)
ICOM-ICMS東京大会2023実行委員長
東京富士美術館館長

ICMS委員長挨拶

Vernon RAPLEY (英国)
ICOM-ICMS 委員長
ヴィクトリア&アルバート博物館
文化遺産保護・セキュリティ部長

歓迎挨拶

藤原 誠 (日本)
東京国立博物館長

祝辞

合田 哲雄(日本)
文化庁次長

10:30 **基調講演 1**

Anette HANSEN (デンマーク)
ルイジアナ近代美術館 施設セキュリティ担当部長

11:15 **記念写真撮影**

11:30 **昼食**(各自)

上野エリア見学

13:30 **基調講演 2**

L.J. HARTMAN (米国)
ロサンゼルス・カウンティ美術館
施設セキュリティ運営副部長

14:15 **基調講演 3**

栗原 祐司 (日本)
国立科学博物館副館長

休憩

15:20 **特別発表**

Robert COMBS (米国)
J・ポール・ゲティ・トラスト 警備・来館者サービス部長

15:50 **研究発表:セッション 1**

Paulina FLORJANOWICZ (ポーランド)

Pavel JIRÁSEK (チェコ共和国)

研究発表:セッション 2

Ana Maria Theresa LABRADOR
(フィリピン/オーストラリア)

黄川田 翔 (日本)

17:30 **今後のスケジュール等の説明**

【プログラム】2日目〈ハイブリッド開催〉
2023年10月12日(木)9:30 – 12:40(日本時間)
会場:東京国立博物館 大講堂

9:30 **研究発表:セッション 3**
李政育 (中国)
蝦名 裕一 / 目時 和哉 (日本)

10:30 **研究発表:セッション 4**
Joyce KINYANJUI (ケニア)
浜田 拓志 (日本)
Valentina SABUCCO (イタリア／英国)

休憩

11:30 **研究発表:セッション 5**
Nikolaos DOKALIS (ドイツ)
Kim COVENT (ベルギー)
Stefan SIMON (ドイツ/米国)

12:30 **次年度年次大会のお知らせ**
閉会挨拶
L.J. HARTMAN (米国)
ロサンゼルス・カウンティ美術館
施設セキュリティ運営副部長
Robert COMBS (米国)
J・ポール・ゲティ・トラスト
警備・来館者サービス部長

［登壇欠席者］
Sikder Md ZULKERNINE (バングラデシュ)
Md. Hasibul, HUSSAN (バングラデシュ)

【プログラム】3日目
2023年10月13日(金)8:00 – 18:30(日本時間)
メイン視察地:日光東照宮 ※事前予約した方のみ参加

8:00 – 9:00 各ホテル前集合

9:00 西新宿エリア出発

9:00 – 11:45 移動(バス車内にて昼食)

11:45 – 13:45 いろは坂・華厳滝

13:45 – 16:00 セキュリティ視察・
世界遺産 日光の社寺

16:05 – 16:20 サービスエリア休憩

16:20 – 18:00 移動

18:00 – 18:30 各ホテル解散

(京王プラザホテル、ヒルトン東京、新宿ワシントンホテル)



開会挨拶

五木田　聡

ICOM - ICMS 東京大会2023実行委員長
東京富士美術館館長

ヴァーノン・ラプリーICMS委員長をはじめICMSの会員の皆様、そして一般参加者の皆様、本日はICMS東京大会にご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。実行委員会を代表して、心より歓迎申し上げます。

この大会では、「地域に根差した防災セキュリティネットワークの構築～連携が生む相乗効果の事例研究～」をテーマに掲げ、博物館・美術館の現場における様々な防災セキュリティの実践を紹介していただき、皆で学んでいきたいと思っています。

博物館が、自然災害、新型コロナウイルス、犯罪行為、紛争といった人類の危機に直面する時代にあって、私たち人類共通の遺産である文化財を守り、後世に引き継いでいくために、国境を越えた防災コミュニティの結束が不可欠であると思います。

そのためには、世界各国の博物館関係者が、各々の経験にもとづき、情報を共有し、見識を深め、一致協力して、防災セキュリティ分野の発展に貢献していくことが重要だと考えます。

さて、世界各国からこの東京にお集まりいただいている皆様に、東京の過去の地震災害の歴史と、未来に起こる地震の予測について、簡単にお話ししたいと思います。

今から100年前の1923年9月1日、マグニチュード7.9と推定される関東大地震が発生しました。発生の時刻が昼食の時間と重なったことから、多くの火災が発生し、大規模な延焼火災に拡大しました。火災は3日間続き、4割の住宅が焼失し、死者・行方不明者は、10万人を超え、甚大な被害をもたらしました。この東京国立博物館も主要な建物が被害に遭いました。火災は東京の中心部全域に広がりましたが、ここ東京国立博物館のある上野公園のエリアは、幸いにも火災を免れました。

大地震は、1995年の阪神・淡路大震災、2011年の東日本大震災と続きましたが、東京ではこれから30年以内にマグニチュード7以上の大地震が起きる可能性が70パーセントあると予測されています。

こうした自然災害については、主にICOMのDRMCの委員会が取り扱う事案だと思いますが、東京の防災という観点から一例をご紹介させていただきました。

私たち博物館で働く者は、お互いの経験と知見を生かして、それらを共有しあい、連携を深めて、その次にあるべき目標を設定し、真剣に取り組んでいかなければならないと考えます。

この東京大会が、皆様にとって有益な機会となりますことを願っております。

どうもありがとうございました。



ICMS委員長挨拶

Vernon RAPLEY
ICOM -ICMS 委員長
ヴィクトリア&アルバート博物館 文化遺産保護・セキュリティ部長

はじめに、ICMS委員長として、このICOM-ICMS東京大会を開催することができ非常に光栄であります。また、皆様、世界中の方々と一緒に協働できますことを大変嬉しく思います。そして、大変素晴らしい都市である東京に招聘していただきましたことにも大変喜んでおります。今日、私たちは様々な知識共有と協力を図っております。そして、地域に根差した防災セキュリティネットワークの構築と更なる連携が生む相乗効果の事例研究を行っていきます。

ICMSの歴史は、ICOMの国際委員会の一つとして1974年に創設されたことから始まります。その中心にあるのは、防災とリスク管理であり、セキュリティというのは単に物理的・人工的なものでなく、計画・準備を行うことが必要不可欠な業務の中心です。私は、それを検証するため本大会の数日前に来日し、日本国内で素晴らしい実践の事例を観て参りました。それは、とても有意義な視察であったことは言うまでもありません。

まず地域主体の防災計画の事例として幸いにも岐阜県の白川郷を視察させていただきました。この地域はユネスコ世界遺産に登録されており、松や杉などの木材で古くは400年前から100年前に建てられた建築家屋で構成されています。ここにある59軒の伝統的家屋は非常に火災に対して脆弱であることが一見してわかります。

ここには約1,500人の住民が地域コミュニティを形成しており、地域貢献を重要視し、この遺産を遺し未来へ繋げていきたいとも考えています。そして、この地域は、もちろん様々な商業的収益もある素晴らしい観光地でもあります。住民は、この地域のみにある価値を守っています。そして、多くの人たちがその価値を理解し、非常時に対応できる素晴らしい防災計画を立てています。

そして、その中には非常に優れた技術が導入されています。例えば伝統的家屋の間には60基の放水銃設備が備え付けられており、高台に設置された600tの貯水槽から高低差の水圧により自然流下式で水が給水される仕組みで、貯水槽の水源はその上流の谷川から直接引水しています。そのため全放水銃の半分の30基程度の放水であれば長時間の放水に耐えることができます。この地域コミュニティの皆さまの取組みによりこの素晴らしい設備の運用が可能となっています。

ヴィクトリア&アルバート博物館では文化遺産保護の世界各地でのプロジェクトを実際に視察していますが、このような地域主導の画期的な防災計画は見たことがありません。つまり、ここではコミュニティ全員、老若男女、例外なく、消火の仕方を知っています。ボランティアは拍子木を





鳴らし防火安全活動を行い、火災に関するパンフレットを配布し注意喚起を行っています。

また、他のコミュニティの人たちには、例えば防災計画・準備などの指導を行っています。景観を損ねることなく消火器が設置され、注意書きがありました。地域の文化遺産を守るために村全体の人たち、村長から、そして新しく入ってきた人たちまで、皆に周知徹底されています。地域そして世界遺産を守るという住民全体の貢献があります。

大会では、この二日間に渡り、コミュニティの取り組みの国内外の事例を聞くことができると期待しています。改めまして、ハイブリッド開催により世界中からここに集まった方々に、心からの感謝を申し上げます。経験を共有することが非常に重要であります。

そして、関係者の皆さま、昨夜は本当に深夜におよび働いて下さりありがとうございました。また、若いボランティアそして全ての準備作業に携わって下さいました皆さまに心より感謝申し上げます。どうかこの機会に、大会参加者の皆さまの知見を専門家同士で共有し、学んでいただきたいと思います。

最後に、私から今大会をサポートして下さいました全ての方々、日本語英語間の翻訳及び通訳を可能していただいたことを含めまして、関係者全ての皆さまに感謝申し上げます。東京に来訪できたことを幸運に思います。

そして、今日から二日間、参加者一同、胸襟を開き、お互いに学び合いましょう。私たちは互いに連携、改革、そして友情を深める機運を高めると思います。そして、この大会終了後もこれらは継続し、私たちの文化遺産を守る最良の術になると思います。以上になります。ご静聴ありがとうございました。



歓迎挨拶

藤原　誠
東京国立博物館長

本日より、ICOM - ICMS東京大会2023が、ここ東京国立博物館を会場に、開催されるにあたり、一言、歓迎のご挨拶をさせていただきます。

この度、2021年のICOM - DRMC（International Committee on Disaster Resilient Museums: 博物館防災国際委員会）岩手−陸前高田大会以来となるICOMの国際会議「ICOM - ICMS（International Committee for Museum Security: 博物館セキュリティ国際委員会）」の年次大会を日本で開催できることを大変嬉しく思います。

東京国立博物館は、1872年に設立された日本で最も長い歴史を持つ博物館です。本日も、開館と同時に、多くの外国人観光客が訪れておりますが、海外に訪問した際に、その国の文化を知ることが出来る場所として、博物館が選択されていることは、重要なことであり、安全安心な場所として、存在しなければならないと考えます。

近年では、博物館・美術館における作品の盗難、紛失、破損、そして自然災害による被害が世界各地から報告されています。とりわけ、日本は地震、津波、台風や豪雨等の自然災害が多発する国であり、これらの自然災害により数多くの文化財が被害を受けてきました。

これまでの知見を活かすため、東京国立博物館が属する独立行政法人国立文化財機構においては、2020年に文化財防災センターを設置し、文化財が災害に遭わないようにするための活動などをしているところです。

文化財を災害から守る体制作りや日々の博物館運営におけるセキュリティに対する意識向上とその体制を構築することが急務である中、今回の大会は、世界中から先駆的なセキュリティ活動の事例をご紹介いただく貴重な機会となっており、多くの関係者にとって、意義深いものになると思います。

博物館・美術館を取り巻く環境がますます変化していく中、ICOM - ICMSの活動を通じて、国内外の博物館・美術館とのネットワークを構築することは大変重要です。本大会が、博物館セキュリティへの意識向上と、その堅牢な体制構築の機会として、未来に向けた有意義な議論を行う場となることを期待しております。

最後に、ICOM - ICMS東京大会へご支援を賜りました皆様方に、厚く御礼申し上げますと共に、大会の運営にご尽力いただいております関係者の皆さまに重ねて御礼申し上げ、私からの歓迎の挨拶とさせていただきます。



祝辞

合田　哲雄
文化庁 次長

おはようございます。ただいまご紹介をいただきました文化庁次長の合田でございます。このたびのICOM-ICMS東京大会の開催にあたり一言ご挨拶を申し上げます。

本日は15を超える国や地域から会場へのご参加をいただくとともに、配信を通じて更に多くの皆さまにご視聴いただいておりまして、誠にありがとうございます。

ICOMにおける国際委員会の1つであるICMSは、先ほどラプリー委員長がおっしゃった通り、1974年の設置以来、あらゆる盗難、野蛮行為、火事、破壊から人間や文化的資源を保護する目的で、国内外の博物館、美術館における防災セキュリティー意識の向上と体制の構築、各種プログラムの実施や地域組織との連携を支援してこられました。

本日の年次大会は、2022年のプラハ大会を継ぐもので、地域に根差した防災セキュリティネットワークの構築をテーマにされていると承知をいたしております。世界を覆った感染症、長引く国際紛争、沸騰する地球と異常気候、巨大地震のリスクなど、近年、私たちの想定をはるかに超えた脅威が、文化的資源や博物館、美術館の安全を脅かしており、本年のテーマになっております「ネットワークや連携の構築」がこうした脅威を克服するカギになると強く感じております。

わが国は自然災害の多い国です。例えば、2011年の東日本大震災は、被災地を中心に地域でのネットワーク連携を強化しながら、被災した文化財の復旧作業を根気強く行い、博物館、美術館の復興を迅速かつ、強力に進めてきました。こうした実践の積み重ねは、今後、世界の皆さまへの貢献として生かしていくことが可能であると考えております。

同様に各国におかれましても様々の積み重ねがあると思いますが、この度の大会で、こうしたノウハウや情報が共有されることで、地域に根差した防災セキュリティの意識が構築され、世界全体のセキュリティレベルの向上に寄与することを祈念し、ご挨拶といたします。実りある対話を心からご祈念申し上げております。ありがとうございました。



第1日目会場参加者記念全体写真



基調講演者とヴァーノン・ラプリー ICMS 委員長

東京大会実行委員



本大会実行委員と基調講演者

【実行委員長】

五木田 聡（東京富士美術館・館長）

【副実行委員長】

青柳 正規（ICOM日本委員会・委員長）
山梨 絵美子（日本博物館協会・会長）
藤原 誠（東京国立博物館長）

【委員】

栗原 祐司（ICOM 日本委員会・副委員長）
半田 昌之（日本博物館協会・専務理事）
金子 朗（東京富士美術館・常務理事兼事務局長）
前田 裕美（浦賀ドック野外船舶技術博物館設立推進会議・推進支援委員）

【アドバイザー】

佐々木 丞平（京都国立博物館・名誉館長）
島谷 弘幸（皇居三の丸尚蔵館長）
建畠 哲（全国美術館会議・会長）

【事務局】

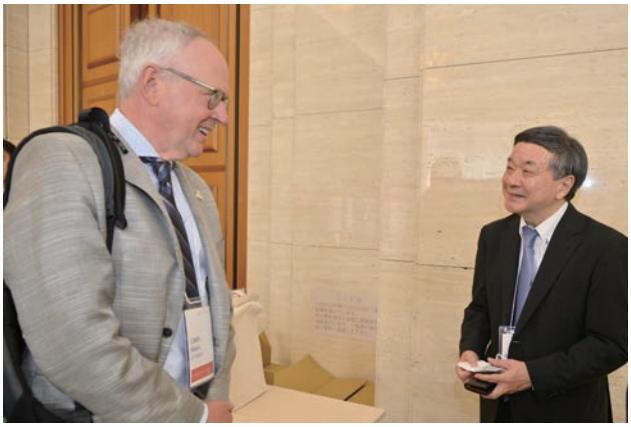
杉浦 智（東京富士美術館・総務部長）
荻田 伸司（東京富士美術館・職員）
島田 勉（実行委員会・経理担当）
丸山 康之（日本博物館協会・事務局次長）
工藤 智恵子（ICOM 日本委員会・事務局員）














HACHIOJI TOKYO
Japan
Meetings & Events
JNTO
ICMS
ICOM-ICMS Conference 2023 in Tokyo


ICOM-ICMS








GLISH
本 語

























八王子は甲州街道筋の宿場として、また、生糸、織物の産地として古くから栄え、花柳界が生まれました。最盛期には280名の芸妓が在籍していました。

現在は若手を中心に12名の芸妓が、八王子花柳界の灯りを消さないよう、お座敷以外にも舞台や地域の催しなど積極的に参加しています。

2020年には、高尾山と共に日本遺産の構成文化財に認定され、日本のおもてなしの心を大切に伝統を継承し、また、後継者の育成にも努めています。













ICMS 理事会メンバー（2022–2025）

委員長　Vernon RAPLEY（英国）
事務局長　Remigiusz PLATH（ドイツ）
理事　L.J. HARTMAN（米国）
　　萬捷（中国）
　　杉浦 智（日本）
　　Maura SPALINK（オランダ）








ICOM（国際博物館会議）は、博物館の進歩発展を目的として創設された国際的な非政府機関です。

ICMS（博物館セキュリティ国際委員会）は、そのICOMの国際委員会の一つで、セキュリティ、防火、防災の各分野の専門家やスペシャリストが集まり、来館者や文化遺産を盗難、暴力、火災、破壊から守るための教育、訓練、援助を行うことを目的とした団体です。



基調講演

基調講演 1

連携の強化とセキュリティの向上：国際連携と地域社会協力体制の構築

Anette HANSEN （デンマーク）
ルイジアナ近代美術館　施設セキュリティ担当部長

2016年から2022年までICMS理事会の委員長を務めた。現在、ICOM災害リスク管理委員会メンバーとしても活動。20年以上にわたり、多くの博物館のセキュリティ強化に尽力し、戦略的なリスク監査、緊急事態およびリスクマネジメントに精通する。NLPの実践に焦点を当てた、博物館セキュリティの専門家としての活動は、防犯やリスク評価に関するICMSのワークショップを実施するなど多岐にわたる。

基調講演　2

文化遺産の保護に向けた共通の責任

L.J. HARTMAN （米国）
ロサンゼルス・カウンティ美術館　施設セキュリティ運営副部長

ロサンゼルス・カウンティ美術館（LACMA）のセキュリティ運営の副部長を務め、LACMAの計画・運営、情報システム管理、来館者サービス、メンバーシップ部門の指導及びサポートを行う。ニューヨーク近代美術館（MoMA）とサンフランシスコの現代ユダヤ博物館における博物館セキュリティの最高責任者を歴任後、ロサンゼルスのゲティ美術館において、文化財保護のキャリアを歩み始める。カリフォルニアのラ・バーン大学で公共行政の学士号を取得し、さらに戦略的計画と組織開発に焦点を当てた、リーダーシップとビジネスマネジメントの2つの修士号も併せ持つ。ICMS理事会メンバーであり、スミソニアン文化財保護全国会議の諮問委員会にも所属する。

基調講演　3

日本の博物館の災害史とコミュニティ

栗原 祐司 （日本）
国立科学博物館　副館長

1966年東京生まれ。1989年文部省（現文部科学省）に入省後、文部科学省生涯学習政策局社会教育課企画官、文化庁文化財部美術学芸課長、東京国立博物館総務部長、独立行政法人国立文化財機構事務局長、京都国立博物館副館長等を経て、2023年4月より現職。ICOM日本委員会副委員長、ICOM-DRMC財務担当理事、日本博物館協会理事。

特別発表

文化財保護：この一年を振り返って

Robert COMBS （米国）
J・ポール・ゲティ・トラスト　警備・来館者サービス部長



連携の強化とセキュリティの向上：国際連携と地域社会協力体制の構築

Anette HANSEN　（デンマーク）
ルイジアナ近代美術館　施設セキュリティ担当部長

ご列席の皆様、来賓の皆様、関係者の皆様、おはようございます。

本日は、日本博物館セキュリティ国際委員会が主催するICMS会議に出席できることを大変光栄に思います。「地域に根差した防災セキュリティネットワークの構築」という私たちの共通の焦点は、絶え間なく変化する世界において非常に重要であり、私たちがここに集まることは、専門知識、献身、共有ビジョンのユニークな交差点を表しています。

本日は、地域に根差した防災セキュリティネットワークをどのように構築するかによってもたらされる課題に対処することに特に焦点を当てながら、博物館内の絆を強化しセキュリティを強化していくための国際社会と地域社会の構築という重要な領域を掘り下げていきたいと思います。

このように多様で尊敬される専門家のグループを結集してくださった組織委員会の方々に深く感謝いたします。世界的協力を促進するためのあなた方の努力は非常に貴重であり、私はあなた方の献身を称賛します。ICOM-ICMS東京大会2023実行委員長、東京富士美術館常務理事兼館長の五木田聡氏に心より感謝申し上げます。また、この大会の最初の数日間、私たちをこの美しい博物館に招待してくださった東京国立博物館長の藤原誠氏にも感謝いたします。また、この会議の開催に資金を提供していただいている文化庁にも感謝の意を表したいと思います。この会議を可能にする多大なご支援に感謝いたします。

少なくとも、この大会に先立って、企画全体を手伝ってくれた杉浦氏、石村凌平氏、そして彼らの周りのスタッフには特別に感謝しています。

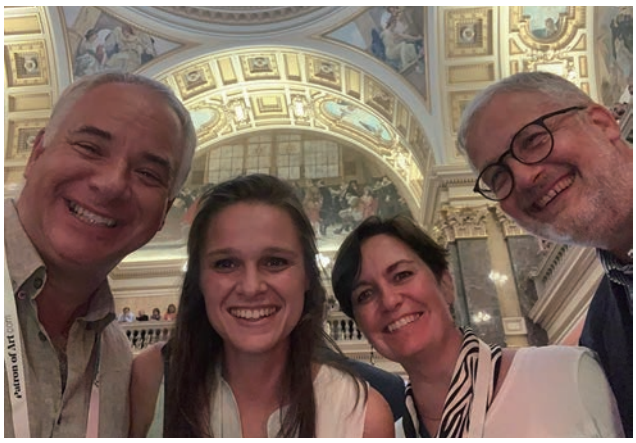
ありがとう……。

私が美術館の世界に入ったのは、美術館が好きだったからとは言えません。むしろ、施設管理と気候技術に取り組める機会のためでした。当初、セキュリティと安全はその領域に付随する義務のように思えました。私の博物館でのキャリアは歴史の浅い博物館でスタートしましたが、堅牢なセキュリティ組織という概念は、まだ初期段階にありました。

私のICMSとの旅路は、2003年にスイスのバーゼルで行われた私にとって最初のICMS会議に遡ります。私はそこでここにいる何人かに初めてお会いしたのですが、今日ここ東京で再びお会いできて嬉しいです。私だけが恐竜のように太古の存在じゃなくて嬉しいです。そのとき、私は二人のデンマーク人の同僚に触発されて、このネットワークのことを知りました。

20年後、今基調講演者としてここに立って、それ以来私がつながってきたこの素晴らしいネットワークを思い出します。

世界中から集まった専門家とのこの最初の出会いは、博物館のセキュリティと安全についての私の理解に大変貢献してくださいました。





ICMSに参加することが私にとって魅力的で、役に立ち、特別なものになったのはなぜでしょうか。また、なぜ今も参加しているのでしょうか。

私は、世界中から集まった新しい仲間が両手を広げて私に会い、知識や物語、そして良い経験も悪い経験も喜んで共有しようとする姿に、とても圧倒されました。ICMSのような専門的なネットワークに出会うことで、技術的知識、人事管理、法執行機関の経歴、考古学、ITなどのさまざまな専門知識にアクセスできるようになり、当時の博物館のセキュリティと安全性についての理解が深まり、今でも私たち全員に取り組んでいる問題についての総合的な理解を与えてくれます。もう一つ、少人数のヒューマニストとともに博物館勤務している私たちにとって、このレベルで専門的なセキュリティの問題について話し合えるという機会は非常に貴重です。

このネットワークは間違いなく私の職業上の成長の基礎となっています。

ここに来る前に、組織チームは私に、ここ日本の2つの重要な遺産のリスク評価を行うことに協力するよう依頼しました。

リスク評価を行うことは、適切な計画を立てて強力なセキュリティ組織を作り、トレーニングや技術システムのインストールにどのようなプログラムを提供する必要があるかを知るための基礎であることは言うまでもありません。

何年も前に、私たち（ICMS）は、組織、建設、および電子セキュリティのセキュリティバランスを制御するというOCEの原則に基づいてリスク評価を行うための簡単な作業ツールを提供しました。この3つの領域のバランスは、博物館と文化財の安全性とアクセス性を確保するために、私たちの仕事において不可欠です。

これはリスク評価についての教訓というよりも、プロのセキュリティグループとして、開催国が指摘した場所についてICMS会議で1つまたは2つのリスク評価を行うことを提案していたことを思い出させるものです。理事会がそれの再開を検討してくれることを願っています。これは始めた時の私にとって貴重なレッスンとなっており、新しいメンバーにとっても有益であると思います。そして、これまでの経験と経験を活かした知識が1か所に集まるということは、リスク評価を提供してくれた主催者への多大な感謝を表します。これにより、私たちが訪問する場所のセキュリティが向上し、いくつかの場所では、館長が私たちが指摘する問題を改善するための資金を見つけるのに役立ちます。



私たちには、ミラノの博物館で起こった成功の歴史があり、リオデジャネイロの国立博物館では信じられないほど悲しい歴史があります。2013年に国立博物館をチェックした後、館長に非常に危険なリスク評価を与えました。残念ながら、彼らの行動は間に合いませんでした。したがって、私たちが集うとき、この国際的な専門ネットワークが大いに貢献できると考えています。

長年にわたり、私はワークショップや共同作業の力を目の当たりにしてきました。これらの取り組みにより、知識の交換、リソースの共有、グローバルおよびローカルのパートナーシップとネットワークの構築が促進されました。地域コミュニティに特化した、絆を強化し安全性を高める最強の方法です。

私が参加した中で最も強力なワークショップは、ケニアのナイロビでの大会後に行われたワークショップだと思います。ワークショップのメインテーマは「災害計画」で、ケニア、ウガンダ、ザンビアから25名が参加しました。主な目的は、参加者にそれぞれの文化施設の災害計画を立てる方法を紹介することでした。ICMSのモデレーターは段階ごとに説明し、続いて訓練演習とディスカッションが行われました。参加者は段々と自分たちの施設の災害計画の草案を作成できるはずだと確信していきました。

ワークショップ終了後にアンケートを実施しましたが、参加者からの総合評価は非常に高かったです。他のアフリカ諸国でもこれらのワークショップを継続したいという希望が参加者全員から表明されました。残念ながら、私たちはそれを継続することができませんでした。

私たちがここにいるのは、文化遺産、芸術、歴史的記念物、そしていつか芸術遺産または文化遺産とみなされる未来の創造物を保護する責任を負っているからです。

文化遺産は私たちが共有する歴史を具体化し、個人にアイデンティティと起源の感覚を与えます。地域コミュニティ内での市民や企業のアイデンティティを形成する上で重要

な役割を果たします。私たちの義務は施設の壁を超えて広がっています。それは私たちの社会の構造そのものにまで及びます。私たちは単なる博物館関係者ではありません。私たちはコミュニティの構築者であり、国家、国際社会、世代の橋渡しとなるつながりを築きます。

今、地域に根差した国際規模の防災セキュリティネットワークの構築のコンセプトを探ってみましょう。それは複雑な課題です。私たちはどのようにして世界中の多様なコミュニティとつながり、文化遺産を効果的に保護するネットワークを構築し、緊急事態に対応できるのでしょうか。

私たちはICOMの一員です。ICOMはグローバル協力の精神を体現しています。141か国に30,000を超える美術館があります。

ICMSはICOM傘下の32の国際委員会の1つで、1974年にコペンハーゲンで設立されました。その使命は、国際協力と世界中の博物館業務の専門化を通じて文化遺産を保護することです。私たちの会員数は大幅に増加しました。

2013年には個人会員76名、団体会員19名でしたが、現在は個人会員261名、団体会員41名となっています。私たちのコミュニティは広大で多様性があり、知識が豊富です。私たちが時代の課題に立ち向かう強さを見つけるのはネットワークの中にあるのでしょうか。

私たちは協力して、共有された専門知識のタペストリーを作成し、世界中の博物館が絶え間なく変化する世界におけるセキュリティの複雑さを乗り切っていくための支援をします。

しかし、このようなグローバルネットワークに属していなくても、文化遺産の保護に取り組んでいるグループやネットワークが世界中に数多くあることも認識しています。非常に多くの人々がこの目的に尽力していることは心強いことですが、多くの貴重な知識が共有されていないことも同様に憂慮すべきことです。

ICOM内でさえ、文化遺産の保護、避難、災害管理に取り組んでいるが常任委員会は名前も出さず、忘れられた国際グループも一つ以上はあるはずです。

私たちが交流しないグループ、よりコミュニティに根差した他の組織と協力して知識を共有し、全体としての影響力を高めるにはどうすればよいでしょうか。

自然災害、紛争、社会不安に直面している今、課題は膨大です。受け入れられる熟練した労働力の確保、適切なトレーニングの確保、セキュリティ対策のバランスの維持は継続的な懸案事項です。多くの場合、理想的なセキュリティシナリオは、アラームが問題なく機能し、位置情報が保存され安全に保たれており、すべての担当者が適切なトレーニングを受けているというものですが、通知の遅れ、アラームの誤作動、カメラの故障、コロナ、または/およびスタッフの削減など、現実の問題によって中断される場合があります。

この時、災害の予防と支援を目的として設計された地域に根差したネットワークが解決策となる可能性があります。今後数日の議論やケーススタディが貴重な洞察を提供し、私たちのそのような課題への備えを改善していけることを期待しております。

ICMSの重要な側面の1つは、専門的なネットワークを提供する役割です。これはボランティアでも行うことができます。私は仕事以外でも、ボランティアのチームリーダーとして約400人を監督しています。それはデンマーク最大の音楽祭、ロスキレ・フェスティバルの献身的な群集安全セキュリティボランティアです。

ロスキレ・フェスティバルでは、毎年30,000人のボランティアが協力し、1週間続く大規模なイベント運営に協力し、130,000人の来場者を迎えます。

ロスキレ・フェスティバルは、安全とセキュリティの分野で





強力なコミュニティネットワークを構築することについての重要な教訓を私たちに与えてくれるかもしれません。

私たちは、どの博物館の中心にも地域社会があることを知っています。私たちの博物館は孤立した存在ではありません。博物館は周囲の文化的土壌に深く根付いた生き物です。地域社会と関わりながら、共生関係を築くように努めるべきです。

しかし、私たちの使命には課題がないわけではありません。私たちが今日直面している最も差し迫った世界的課題の1つは気候変動です。この危機には国境もイデオロギーもありません。それは私たち全員に影響を与えます。気候変動に対する抗議活動を行う人々の熱狂的な声にも遭遇します。これらの人々は多くが若く、変化への切実な欲求に突き動かされて、博物館の前でも彼らは抗議活動を行います。これらは、私たちの遺産だけでなく地球も守る必要性を思い出させてくれます。

文化の安全保障に携わる私たちは、こうした抗議活動参加者たちとどのように関わっていくのでしょうか。気候変動抗議活動参加者のエネルギーと決意を利用して、地域に根差したネットワークを強化することはできるでしょうか。彼らの情熱を、私たちの環境と文化的宝物の両方を守る行動に導くことができるでしょうか。これは私たちの時代の重要な質問の1つです。



私たちは共通点を見つけながら、彼らの情熱を受け入れなければなりません。博物館は対話のプラットフォームとして機能し、そこで彼らの懸念が聞き入れられ、尊重されます。彼らの視点を理解することで、私たちは協力して解決策を模索し地域に根ざした防災・安全ネットワークにおける持続可能な未来に向けた共通の闘いにおいて、敵対者となりうる人々を味方に変えることができます。

結論

結論として、文化遺産を保全するという私たちの集団的責任は最も重要です。協力を強化し、知識を共有し、強固なネットワークを構築することで、これらの課題に一緒に対処することができます。私たちの文化遺産の将来は、私たちの絆の強さと安全対策の強化にかかっています。知識、共感、団結のインスピレーションとなる、国際的および地域的なコミュニティを構築し続けていきましょう。

ありがとうございました。





文化遺産の保護に向けた共通の責任

L.J. HARTMAN　（米国）
ロサンゼルス・カウンティ美術館　施設セキュリティ運営副部長

親愛なる主催者と関係者の皆様、こんにちは。今年ICMSを主催してくださった日本の素晴らしい関係者や友人の皆様、思慮深いプログラムを作成するために数え切れないほどの時間を費やして準備していただき、今週私たちに共有していただく経験に感謝申し上げます。ありがとうございます。

ICOM-ICMS東京大会の基調講演者の依頼を受けたとき、さまざまな感情と想いが洪水のように押し寄せてきて圧倒されました。まず、このような形で会議に出席することを考えていただいたことを光栄に思い、恐縮しました。それから恐怖が襲ってきて、文化財保護と災害対策について、彼らがまだ知らないこと、あるいはまだ私に教えていただいていないことなど、世界中から集まった専門家のグループに何を共有できるだろうかと自問しました。

この質問に対する即座の明確な答えはなかったので、私は最善を尽くしてインターネットにアクセスし、基調講演の書き方を調べました。盗用できる事前に作成された基調講演は見つかりませんでしたが、基調講演はストーリーを伝え、本質的にグローバルで、感動的で、実用的で、記憶に残るものでなければならないことを発見しました。

このスピーチでこれらすべての要素を満たせるかはわかりませんが、私の話だけでなく、あなたの話でもあるそんなストーリーから始めましょう……。

ストーリー

私たちの中には、幼い頃から自分がどうなりたいかを知っていて、その目標に向かって努力する人もいれば、成長して新しい人生経験を始めるにつれて自分の情熱を発見する人もいます。そして、私のように、単にキャリアに夢中になる中で、それが人生観と世界における芸術と文化の重要性についての見方を広げる素晴らしい旅になったという人もいるでしょう。

その過程の中で、あなたと同じように、私は知恵とユーモアで指導してくれた良き指導者と出会い、彼らのサポートのおかげで私は成功できたと言えます。そして、有能で信頼できる同僚と仕事上の関係を築き、大切で信頼できる生涯の友情を見つけてきました。

私たちのそれぞれの旅は、今日ここ、この国際会議につながっています。この国際会議は、文化遺産の保存と保護に対する私たちの共通の取り組みを強調するだけでなく、災害への備えにおける私たちの集団的責任に焦点を当てることを目的とした集まりです。

相互につながった博物館の世界で、博物館を保全する皆さんにとって、私たちは国境や言語を超え、コラボレーションを促進し、回復力を与え、文化遺産保護のための統一戦線を作り出すというユニークで重要な役割を担っています。

あなたの博物館であっても私の博物館であっても、私たちは同じ目標を持っています。それは博物館を安全に保ち、訪問者がアクセスできるようにすることです。

文化遺産の力



私たちの美術館は、人類の集合的な記憶、文化の宝庫、そして芸術の歴史の守護者です。それらは世代間の架け橋として機能し、過去から現在、そして未来へとつながります。私たちの壁の中の工芸品や芸術作品は単なる物ではありません。それらは、多様な人々や文明の心と精神を覗く窓です。

寺院からギャラリー、岩の形をした彫刻に至るまで、想像を超えて、私たちはこれらの芸術品を保護し保存する管理者としての役割を担います。

私たちはつながりとオープンな対話を通じて、組織を守るための方法や災害への備えと対応への取り組み方を共有

することで、お互いを強化します。

コミュニティハブとしての博物館



私たちの使命は保存や展示だけにとどまりません。博物館は、コミュニティと関わる活気に満ちたセンターです。これらは対話、学習、インスピレーションのためのスペースです。コミュニティを積極的に巻き込むことで、私たちは変化と変革の触媒となります。

私たちの学芸員チームと教育者は、あらゆる年齢や身体能力の訪問者を対象に、芸術作品を中心としたプログラムを開発することで、すべての人が美術館を利用できるよう努めています。

私の記憶に最も残っているのは、博物館を訪れた視覚障害者のグループが、保護の恩恵のおかげで、手に手袋をはめて、初めて彫刻の輪郭に触れ、これまで口で説明を受けることしかできなかった芸術作品を感じることができたということです。

これは、すべての人が利用できるようにしながらコレクションを保護するという私の考え方を変える、とても衝撃的な瞬間でした。

私の心にもっと近づいたのは、さまざまな程度の知的障害と身体障害を持つ甥とそのクラスメイトが、人生で初めて博物館を体験するために LACMA（ロサンゼルス・カウンティ美術館）に来たときのことです。

この時が、コミュニティ全体が楽しめ、経験し、自分のものだと言える場所である博物館というものを祝福した瞬間でした。私の甥（オレンジ色のTシャツを着ている）の言葉を借りれば、「私のLACMA」です！

災害への備えとレジリエンス

私たちは過去を大切にし、現在を受け入れると同時に、不確実な未来にも備えなければなりません。気候変動、自然災害、人間の紛争は、私たちの文化遺産と私たちがサービスを提供するコミュニティを脅かしています。これら



の出来事により、かけがえのない宝物が壊滅的に失われたことは、私たちの脆弱性を思い出させるものとなっています。

これが、災害への備えが単なる選択肢ではなく、道徳的義務である理由です。博物館は芸術と文化の宝庫であるだけでなく、知識の宝庫でもあります。私たちはコレクションを保護し、建物を強化し、緊急対応計画を策定するために積極的な対策を講じる必要があります。さらに、私たちは危機の際に周囲のコミュニティを支援し、他のコミュニティに手を差し伸べるために専門知識を増やす必要があります。



建物の強化は、書面による災害計画や緊急対応設備の準備だけでは実現できません。災害計画は、建物や展示スペースの拡張または改修中に行われることがあります。LACMA の場合、長期的な災害計画は、地震発生時の建物と収集品への被害の軽減を支援するために、新しい建物の構造の下に複数の免震装置を設置するという形で行われます。

書かれた文書や職員に提供される訓練を超えて、あなた自身が災害計画に影響を与える可能性があることを理解することは、あなたが代表し支援する博物館にとって重要なことです。

コラボレーションと知識の共有

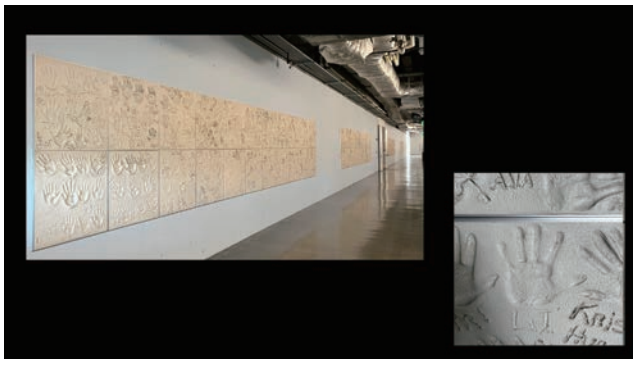
私たちが直面している課題は世界規模であり、解決には世界的な協力が必要です。私たちは国境を越えて知識



と良い実践方法を共有し、お互いに刺激し合いながら、私たちの機関とコレクションを保全するための新しい方法論を継続的に再評価し、見つける必要があります。

国際的なパートナーシップとネットワークは、災害への備えと対応の取り組みを強化するために不可欠です。

今後数日間この機会を利用して、対話に参加し、情報を共有し、指導者となり、街や国の境界を越えて参加者と関係を築いてください。お互いから学ぶ中で、セキュリティと災害への備えに対しての新しいアイデアをぜひ活用していってください。



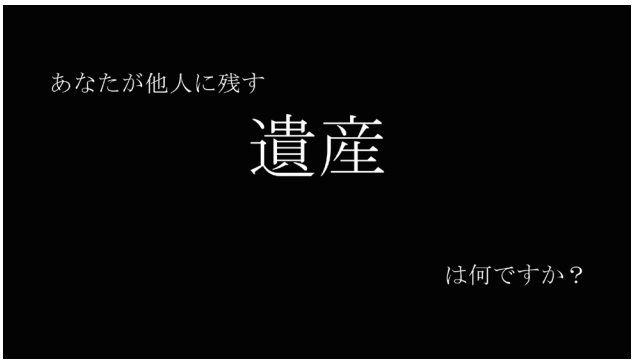
アライアンスを築き、戦略的に、新しいアイデアやアプローチに対して寛容な心を持ち、自分にとって困難なことを受け入れてください。

博物館は、文化が集まり、将来の世代にインスピレーションを与え、過去の遺産が祝福される場所であり希望の光です。

あなたが保護する施設に残す痕跡は、他の人がそこから学び、改善し、文化遺産の保存の成功ストーリーを創っていくことに役立ちます。

本日はお時間をいただき、文化遺産の保存に対する私たちの共通の取り組みについて私の考えを発表させていただいたことをとても光栄に思います。

ありがとうございました。











日本の博物館の災害史とコミュニティ

栗原 祐司 （日本）
国立科学博物館　副館長

こんにちは。国立科学博物館の栗原です。ICOM日本委員会の副委員長も務めています。私はDRMC（International Committee on Disaster Resilient Museums：博物館防災国際委員会）のボードメンバーで、一昨年東京で年次大会を開催させていただきましたが、今回ICMSの年次大会が再び東京で開催されることを、誠に嬉しく思います。

皆様ご存知の通り、博物館のセキュリティの観点から一番被害が大きいのが、武力紛争と自然災害です。近年、日本でも毎年のように自然災害が発生しており、数多くの博物館や文化財が被災しています。

保存の観点からは、生物被害、光や環境変化による劣化も大いなる脅威です。さらに、最近、我々は新型コロナウイルスによる脅威も経験しました。

もう一つ忘れてはならないのが、盗難、窃盗、過失による人為的な事故です。

本発表では、まず過去に日本で発生したエポック・メイキングな、あるいは有名な博物館や文化財の災害の事例を紹介し、警察、消防、コミュニティとの連携・協力による博物館や文化財の防災・防犯対策の事例と課題について述べたいと思います。

日本の博物館は、今から151年前の1872年、湯島聖堂で開催した文部省主催の博覧会を起源としており、東京国立博物館の前身にあたります。その開館の年に、早くも金や小判が盗難に遭っていますので、悲しいことに日本の博物館の歴史は、そのまま博物館の盗難の歴史でもあるといえます。



In 1872, at Exposition by the Ministry of Education (Origin of Tokyo National Museum) held in Yushima Seido, Gold and Koban(Oval gold) were stolen.

1872年、湯島聖堂で開催した文部省主催の博覧会（東京国立博物館の起源）において、金、小判等が盗難。

ちなみに、日本の博物館の多くは、警備担当を外注していますが、明治時代に開館した東京、京都、奈良国立博物館では「衛士」という警備担当の正職員が配置されています。本日は3館の衛士さんも参加されています。

今年は、日本では関東大震災から100年の節目に当たりますが、1923年の震災ではここにあった東京帝室博物館の本館が崩壊し、私が務めている国立科学博物館の前身で、当時は湯島にあった東京博物館も全焼しました。



Main building of the Imperial Museum (now Tokyo National Museum) collapsed in the Great Kanto Earthquake (1923)
関東大震災で崩壊した帝室博物館（現在の東京国立博物館）本館（1923）

Tokyo Museum (now National Museum of Nature and Science) burned down in the Great Kanto Earthquake (1923)
関東大震災で全焼した東京博物館（現在の国立科学博物館）（1923）

1917年に開館した日本初の私立美術館である大倉集古館も、関東大震災で三棟あった陳列館がいずれも全焼しました。

しかしながら、当館を含め、これ以降建てられた博物館や学校の多くは、耐震設計を施した「復興建築」が建てられるようになり、頑丈な作りで今でも活用されているものが多くあります。

その後も大典記念京都植物園（現京都府植物園）が、2年続けて室戸台風と京都大水害の被害に遭っています。

また、山火事や落雷による火災で、国宝建造物が相次いで焼失するなどの事件も起きています。

太平洋戦争中には、多くの文化財を焼失し、国宝建造物の約12%が失われました。

ここ東京でも大空襲があり、東京帝室博物館は美術品の疎開を行い、敷地内も農地として開放しました。

さて、戦後になって、順次復旧が進められますが、1949年1月26日に今は世界遺産になっている法隆寺金堂の焼損

という大事件が発生しました。これをきっかけに1950年に文化財保護法が施行され、文化財保護委員会（現在の文化庁）が設置されました。



これ以降、毎年1月26日は「文化財防火デー」として、日本中で文化財の防災訓練やイベントが行われています。

しかながら、文化財保護法が施行される直前の1950年7月に金閣寺の放火事件があり、舎利殿（国宝）を焼失しました。この事件は、三島由紀夫が小説にし、世界各国で翻訳されたり、映画化されたりしました。

戦争を乗り越えながらも、法隆寺金堂の火災と金閣寺の焼失が社会に与えたショックは大きく、これを機に文化財の保護や防災の必要性が大きく認識されるようになったと考えられます。

文化財保護法施行以降、少なくとも国宝建造物が火災で焼失した例はありませんが、その後も重要文化財の火災や、毀損、盗難等の事件は続きます。

1956年に延暦寺の大講堂及び鐘台が全焼しました。

1962年には妙心寺の鐘楼が放火により焼失しています。

1961年の消防法施行令の制定によって、新たに指定される文化財建造物に消火器や自動火災報知設備の設置が義務付けられましたが、1966年8月に、京都の大徳寺方丈で放火による火災が発生し、重要文化財の障壁画が焼失する事件が発生しました。

これを受けて同年12月に消防法施行令が改正され、既に指定されている文化財建造物にも自動火災報知設備の設置義務が適用され、文化庁による国庫補助も行われるようになり、飛躍的にその設置率が高まることになります。

火災以外では、1960年に国宝の広隆寺弥勒菩薩の薬指が折られるという事件もありました。京都大学の学生がお像に抱きついて折ったと言われていますが、いたずらなのか、恋心なのか、当時は何かと話題になったようです。

同じく1960年には、「永仁の壺事件」という有名な贋作事件も起きています。これは事故というよりも、スキャンダル事件ですが、贋作を国宝に推した文化財保護委員会の調査官が辞任したということもあって大いに問題になりました。この事件は小説にもなっています。

1968年には、（京都国立近代美術館で）フランスのロートレック美術館（Musée Toulouse-Lautrec）から借りていた名画「マルセル（Marcelle）」が、盗難に遭うという事件が起きました。その後無事発見され、フランスに返還されましたが、この事件も小説化されるなど、だいぶ話題になりました。



1972年から1973年と、立て続けにデパートの大規模な火災が発生しました。

これを受けて文化庁は、1974年2月1日以降、文化財の公開を本来の目的としないデパート等臨時施設における国宝・重要文化財の公開を許可しないこととし、現在もこのルールが生きています。

1983年には日本海中部地震があり、男鹿（おが）水族館が津波の被害に遭いました。残念なことに日本語の避難勧告が聞こえず、磯で遊んでいたスイス人観光客が犠牲になりました。

1991年には、陶芸家の板谷波山（いたやはざん）の記念館で、作品20点余が盗難に遭う事件がありました。その後、公立博物館となり、万全の防犯体制がとられています。

1995年に発生した阪神淡路大震災は、直下型の地震で、近畿圏の重要文化財162件などが被災する未曾有の大被害が生じました。

この時、文化庁が、4つの学術団体に参加を求め、文化財レスキュー組織を立ち上げ、初の文化財レスキュー事業を実施しました。国指定文化財のみならず、未指定の文化財も救援対象としました。このことは、その後の東日本大震災時の文化財レスキューでも継承されています。

阪神大震災発生当初、全国から延べ137万人超が支援に集まり、1995年は「ボランティア元年」と呼ばれました。文化財にとっても救援ボランティア元年であり、国内で復



旧・復興を支えようという意識が広がる契機となりました。

なお、この震災では、文化財指定を受けていない多くの貴重な日常的生活景観も多大な被害を受けたことから、1996年から指定制度を補完する登録文化財制度が発足しました。現在は全国で13,000件以上が登録されています。

2000年には、京都の寂光院（じゃっこういん）本堂が焼失し、地蔵菩薩立像が焼損しました。いまでも痛々しい状態で重要文化財の指定は解除されていませんが、本堂には新しく模造された菩薩像が置かれています。

2004年5月の新潟県中越地震では、十日町市博物館に展示中の国宝・縄文土器が被災しました。

2004年7月には、九十九里（くじゅうくり）いわし博物館で爆発事故が発生し、臨時職員1名が死亡、1名が全身にやけどを負って一時重体となり、博物館は休館となりました。原因は、この地域特有の自然湧出する天然ガスが文書収蔵庫内に流入し、引火して爆発に至ったとされています。

いわし博物館は、その後2015年4月に別の場所に再建されましたが、2019年9月に今度は台風による停電で水槽内に酸素を送るポンプが停止し、いわし約3000匹が全滅する事件が起こっています。

国宝の高松塚古墳壁画の劣化も世間を大きく騒がせた事件でした。

この壁画自体が、1972年に発見されたおよそ1300年前の極彩色の貴重な文化財で、国の厳重な管理体制のもとで保護されていたはずだったのですが、2004年にカビが発生していたことが判明し、大きく報道されました。最終的に文化庁は現地保存を断念して石室を解体し、2007年からカビの除去作業をはじめとする修理を行いました。修理作業は2019年に完了しました。皮肉な話ですが、これを機に日本の文化財保存科学はさらなる発展を遂げます。



2009年7月には新潟市美術館の展示室で制作された土塀状の作品などにかびが発生し、さらに翌年には燻蒸せずに持ち込んだ電動カートからクモや甲虫類が計34匹確認されるという事件が起きました。

これを踏まえ、展覧会のために借りる予定だった国宝・重要文化財の仏像15点の貸出について、文化庁は許可を出さず、新潟市美術館での展覧会の開催は中止となりました。

2010年7月には、熊本市現代美術館が高知の絵金蔵（えきんぐら）から借り受けた屏風絵5点を燻蒸作業した際、緑色の部分が黒変するという事件が起きました。原因は燻蒸薬剤の選定ミスで、同館は搬送を専門業者に委託し、さらに燻蒸業者に再委託するというプロセスにおいて、学芸員は立ち会っていなかったことが判明しました。

残念ながら、黒変した色は完全に元には戻らないようです。



2011年2月には、北海道の夕張市美術館が、記録的な大雪による屋根の積雪で倒壊しました。幸い冬季閉鎖中のため怪我人はなく、地下収蔵庫の作品は無事でしたが、翌年、同館は閉館となりました。



2011年3月11日には、東日本大震災が発生しました。

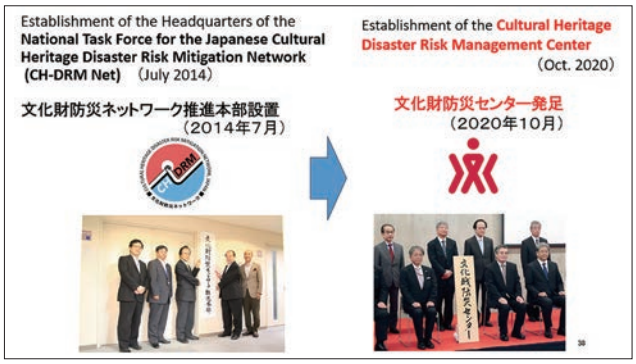
特に津波による被害は甚大で、博物館236、図書館251、公民館894が被災しました。

この時も、文化庁主導で、大規模な文化財レスキューが行われました。



また、この震災では原子力発電所が被災したことから、被爆しないよう、限定された地域で、放射線量を測定しながら文化財を救援するという未曽有の経験もすることとなりました。

東日本大震災における文化財レスキューの経験を受けて、常設の文化財防災組織を設置するよう文化庁に働きかけ、2014年7月に、「文化財防災ネットワーク推進本部」が設置されました。



当初は文化庁の補助金による運営でしたが、2020年10月には国立文化財機構の一組織として、文化財防災センターが発足しました。

文化財防災ネットワーク推進本部（CH-DRM Net）の最初の大きな仕事は、2015年3月に仙台で開催された第3回国連防災世界会議の文化財防災セッション開催で、世界中の文化財防災関係者を招へいして様々な議論を行いました。

これを機に、各地方公共団体で定めている防災計画に、文化財防災や博物館の防災について明記するところが増えるようになったのは、大変結構なことだと思っています。

その後も、2016年4月に熊本地震が発生し、多くの文化財が被災しました。

2019年10月の台風により、川崎市市民ミュージアムの収蔵庫が浸水するというような災害が起こっています。こちらは、以前から浸水の可能性が指摘されていながら、対策を怠っていたことが原因でした。いずれも今なお、復旧・修理作業が行われています。

2020年11月には、アーツ前橋で作家の遺族から預かった美術品を紛失する事件がありました。廃校になった校舎に置いていたことが原因で、紛失を把握後すぐに公表しなかったことも問題視されました。マネージメント上の問題だろうと思います。

2015年から2017年にかけて、全国各地で寺社に油をまく事件が頻発しました。

実は、ご記憶の方もいらっしゃるかもしれませんが、この事件については、2015年のICMS鄭州大会（中国）で発表しました。

犯人は海外に逃亡しました。犯行理由は宗教的な理由でもあるようですが、よくわかっていません。

残念ながら、最近も似たような事件が起こっています。

文化財建造物が多い京都、大阪、滋賀では、故意または過失による文化財毀損事故が毎年のように発生しています。

中にはドラマの撮影中の事故もあり、さらなる注意喚起が必要です。

2022年4月には、越後妻有里山現代美術館で現代美術の価値がわからない中学生によって、美術作品が破壊されました。

監視員が不在で、事前に中学生に十分な学習が行われなかったことによる不幸な出来事だろうと思います。

2022年8月には、山梨県立美術館で、消防設備の点検会社の職員が作品を盗む事件がありました。これをきっかけに全所蔵品の確認調査をしたところ、2点が所在不明となっていることが判明し、実は同館では、全収蔵品の調査点検を20年以上実施していなかったことが明らかになりました。管理運営上の問題があったと思われます。

ICMSが扱う対象ではないかもしれませんが、生きた動物を扱う動物園や水族館でも毎年のように事件が発生しており、戦前の1936年に上野動物園でクロヒョウが脱走した事件は、その年の三大事件に取り上げられました。

現代の新しい事例としては、先ほど紹介した2016年の熊本地震の直後、「熊本の動物園からライオンが逃げた」というデマ情報がTwitterに投稿され大騒ぎになりました。

この写真は映画のワンシーンであることが判明し、災害時にデマを流し業務妨害をしたとして3か月後に犯人は逮捕されました。

その後も、サンシャイン水族館（東京都）で、酸素欠乏症で魚類が大量死する事件が起きています。

今年2月に琵琶湖博物館では、大型水槽が破損するような事件が起きました。

鳥インフルエンザも、最近毎年のように動物園の鳥類が感染しています。

つい最近、東北サファリパーク（福島県）で、飼育員がライオンに襲われ死亡する事件もありました。このような動物による飼育員の死亡事故はほぼ毎年発生しており、さらなる飼育員の安全確保の徹底が必要です。

無住の寺社から盗まれた文化財は、写真などが残っていないため、その後盗難品が発見されても、所有者不明のままの場合が多くあります。博物館ではこれらの盗難文化財を警察から預かる場合が多くあります。和歌山県立博物館ではこれらの盗難文化財を展示して所有者に呼びかけましたが、なかなか名乗り出てはくれません。日頃から寺社の宝物をコミュニティで守るという取り組みが必要でしょう。



京都市消防局の調査によれば、火災の原因は放火が42%と一番多くなっています。

自然災害がなくても、放火、タバコ、火遊びなど人為的な原因が4分の3を占めていることを考えれば、やはり、「防災」よりも「防犯」を重視し、地域全体で防火に努める姿勢が求められると思います。

木造建築物の多い京都市では、市民が容易に利用できる消火栓の整備などを柱とする防災水利整備事業を行っています。

また、文化財係を設置し、文化財社寺周辺の市民による協力を得て、社寺ごとに文化財市民レスキュー隊を結成し、「文化財セーフティタグカード」を作成し、何がどこにあるのかを把握するようにしています。



このようなコミュニティ全体での取り組みは、少なくとも放火や盗難に対する抑止力にはなると思います。

奈良県警は、「文化財保安官」を配置しています。

和歌山県警は、「津波避難推進官」を配置しています。

警察や消防によるポスターも効果的でしょう。

ポスターでも地域の目を光らせることが重要です。

今年の4月から、通報者がスマホで画像などを送信する「110番映像通報システム」の運用が開始され、早速、長野市の善光寺で、盗難の通報から約2時間半で容疑者を逮捕したそうです。今後とも最新の技術を駆使して、地域で文化財を守る取り組みが重要だと思います。

駆け足で、とりとめのない話で恐縮ですが、日本の博物館や文化財の災害事例が皆さんの参考になれば幸いです。ご清聴どうもありがとうございました。





文化財保護:この一年を振り返って

Robert COMBS　（米国）
J・ポール・ゲティ・トラスト

こんにちは！

多くの友人や関係者の皆様にお会いできて、ここ東京で一緒に時間を過ごせることをとても嬉しく思います。

私たちは、過去一年間に発生した文化財に影響を与えた事件を迅速に振り返っていきたいと思います。

重要なのは当惑するのではなく、これらの出来事から学ぶことです。

同じような運命を避けていきましょう。

私たちは2022年、気候変動抗議活動参加者によるロンドンのゴッホのひまわりの絵へのトマトスープの投げ込みで「一年の振り返り」を締めくくりました。

そして数日後の10月22日、ポツダムのバルベリーニ美術館で、2人の気候変動抗議活動参加者がクロード・モネの「積みわら」の絵にマッシュポテトを投げつけました。それから彼らは絵の下の壁に手を貼り付けました。その絵は、2019年にこの作品に1億1000万ドルを支払ったコレクターから貸し出されたもので、ガラス張りになっており、博物館によると襲撃による損傷はなかったといいます。

博物館は事件後、リスクとセキュリティ手順を見直し評価するために、その月は休館になりました。

数日後イギリスで

10月25日早朝、住宅の建物から出火した火災が隣接するドーキング博物館に延焼し、屋根が損傷したほか、一部の展示物が灰や水に浸かりました。

消防士はコレクションの一部を移動させ、他の部分は防水シートで覆い、消防ホースからの水害をなるべく抑えました。

博物館は火災以来休館となっています。屋根の修理は7月から始まり、すぐに業務再開したいと考えています。

翌週はイタリアで

気候変動抗議活動参加者3名が、ローマのパラッツォ・ボナパルト美術館にあるゴッホの絵画「種をまく人」を襲撃しました。この絵は印象派展のためにオランダのクレラー・ミュラー美術館から搬入されたものです。

抗議者たちはエンドウ豆のスープをガラス張りの絵画の上に投げつけ、ギャラリーの壁に手を貼り付けました。

翌日はスペイン、マドリードのプラド美術館へ

2人の気候変動抗議活動参加者は壁に「+1.5C」と書いた後、フランシスコ・デ・ゴヤの絵画「着衣のマハ」と「裸のマハ」の2作品を攻撃しました。

4日後オーストラリアで

キャンベラの国立美術館で気候変動抗議活動に参加した2人が、アンディ・ウォーホルのキャンベルスープ缶のプリント展示に近づき、「気候危機」や「芸術的抗議」などのスローガンを書き、いくつかの作品を覆うガラスに貼り付けようとしました。警察によると、接着剤の効果があまりなかったため、警察が対応する前に彼らは美術館から立ち去ったといいます。

翌日はアイルランド

警察は、クロフォード美術館にあるアーティスト、ジョージ・アトキンソンによる解剖学的研究作品にスープを投げつけた20代の気候変動抗議活動参加者を逮捕。

この作品はガラスで覆われており、永久的な損傷はありませんでした。掃除をして翌日には展示しました。

2023年6月、そのデモ参加者は罪を認め、賠償金を支払うことに同意しました。

博物館の清掃にはなんと450ポンド（約8万4000円）かかりました。

ウクライナでの戦闘により、文化的に重要な場所、屋外彫刻、コレクションが被害を受けたという話は数多くありますが、この話は、ウクライナ当局がロシア軍による略奪を非難した数多くの事例のうちの1つを描いています。

11月、ウクライナ軍は同国東部のヘルソン市の奪還に成功しました。ヘルソン美術館の報告によると、ロシア当局はヘルソン市を去る数日前に、最大40人に対し、美術館から

コレクションを撤去し、ロシア占領下のクリミアに向かう車両に積み込むよう命じました。同博物館のソーシャルメディア投稿は、これを「ウクライナの最高のコレクションの一つの誘拐」と呼びました。

私たちは皆、この地域での戦争行為が早く終結する日を待ち望んでいますが、さらに多くの場所が紛争によって深刻な影響を受け、さらに多くのウクライナの文化史が失われたり略奪されたりするのではないかと懸念しています。

11月13日にカナダで

バンクーバー美術館では、2人の気候変動抗議活動参加者が、画家エミリー・カーの「Stumps and Sky」というタイトルの絵画をメープルシロップで攻撃し、その後絵画の下の壁に手を接着しました。

絵画はガラスで保護されており、攻撃による大きな損傷はありませんでした。

翌日イギリスで

当局は、イギリスのケント地方にあるリーズ城からアンティークのガラスのゴブレットが持ち去られたことを明らかにしました。ラリックの手がけたゴブレットは、11月10日から14日の間に城を訪れた訪問者によって持ち去られたと考えられています。

ノルウェーでも同日

ノルウェー国立美術館では、2人の活動家がエドヴァルド・ムンクの有名な絵画「叫び」のガラスにサインを貼っているのに警備員が気付き、彼らによって中断されました。自分の体の一部をガラスに接着しようとしましたが警備員によって阻止されました。

幸いなことに、絵は無傷で、抗議者2名とその事件を撮影していた人物は拘留されました。。

翌日はオーストリアへ

さらに別の「気候変動抗議」攻撃では、レオポルド美術館で警備員が作品を守ろうとする中、2人の抗議者がグスタフ・クリムトの「死と生」と題された絵画に油状の黒い液体を投げつけました。警備員はデモ参加者の1人を押しのけることに成功しましたが、2人目の犯人は絵に手を貼り付けました。絵はガラスで保護されていたため、永久的な損傷を受けませんでした。しかし美術館の報告によると、この液体は絵画の額縁だけでなく、床や壁にも深刻な損傷を与えたといいます。

3日後

2人の若者は、ブルス・ド・コマース現代美術館の外にあるチャールズ・レイの作品「馬と騎手」の彫刻に「残り858日」と書かれたTシャツを着させ、その後、オレンジ色のペンキを注ぎました。Tシャツのメッセージは、地球が存続可能な未来を持つためには、炭素排出量が2025年までにピークに過ぎる必要があるという最近の研究に言及しています。

同じ日、オスロの抗議活動参加者は、地元で人気の「モノリス」という彫刻にオレンジ色のペンキを注ぎました。

そしてミラノのファブリカデルヴァポーレアートセンターでは、デモ参加者がアンディ・ウォーホルによってデザインされたBMWのスポーツカーに小麦粉を振り撒きました。

3つの状況すべてにおいて、芸術作品は正常に洗浄されたと報告書に記載されています。

4日後ドイツで

11月22日の早朝、泥棒らがケルト・ローマ博物館近くの通信拠点のケーブルを切断し、建物に侵入して展示ケースを破壊し、170万ドル相当のケルト金貨483枚を盗みました。コインの日付は紀元前100年でした。

通信ケーブルの切断は地域内の多くの場所に影響を及ぼし、警察は地域内のすべての銀行が標的になっている可能性があるとみて、優先的に対応することを決定しました。

7月には4人の容疑者が窃盗容疑で逮捕されました。残念ながら、483枚のコインのうち残っていたのは溶けた金の塊だけです。科学的分析の結果、金には元の金貨に含まれていたものと同じ合金が含まれていることが判明しました。

この話は4年前のドイツから始まります。

早朝、少なくとも7人の強盗団が、歴史的なグリーン・ヴォルトコレクションの本拠地であるドレスデン州立博物館近くのアウグストゥス橋にある電気接続箱で火災を起こしました。この火災により博物館への電力が遮断され、博物館の警報システムが影響を受け、地元の街路灯も停電したと伝えられています。その後、泥棒たちは美術館の窓の1つを力づくで開け、小さな穴を作り、そこをすり抜けて展示室に侵入しました。

監視カメラの映像によると、泥棒のうち2人は斧を使ってガラスの陳列ケースを突き破り、歴史的でかけがえのない宝飾品を強奪しました。ポーランド白鷲騎士団のダイヤモンドをちりばめた星のブローチや、16カラットのダイヤモンドの帽子の留め金、その他の大きな宝石14個、小さなダイヤモ

ンド103個、柄に大きなダイヤモンド9個と小さなダイヤモンド770個がちりばめられた剣と揃いの鞘などです。盗まれた宝石の総額は12億ドルと報告されています。

2022年の12月の話になります。

6人の容疑者が逮捕され、窃盗罪で裁判を受ける準備ができた頃、ベルリン当局は盗まれた宝石のうち31個を回収したと発表しました。どうやら警察は被告の代理人弁護士からその所在に関する情報を提供されていたようです。ドレスデンのホワイトダイヤモンドを含め、宝石の多くは未だ行方不明のままです。

5月には、この部分自白により容疑者のうち4人が軽い刑を受けました。5人目の被告は無罪となり、6人目は青少年犯罪の判決を受けました。当局は7人目の容疑者について捜査を続けています。

12月にコロラド州で

デンバー地域の歴史的な寒波の中、州の歴史資料を保管する建物のメインフロアで一部のパイプが凍結し、その後破裂したことを職員が発見しました。

漏洩は2日間発見されませんでしたが、州警察がアーカイブが置かれている地下1階、2階、3階全体で大規模な水漏を発見しました。各階それぞれが洪水によって大きな影響を受けて水濡れによって損傷のある段ボール製の収納ボックスの様子を写真で示しています。スタッフはすぐに対応し、劣化を止めて文書を乾燥させるゆっくりとしたプロセスを開始するために、すぐに濡れた箱を冷凍トラックに移動し始めました。

翌日はオクラホマ州

オクラホマシティ美術館でコレクションチームによる定期検査中に、7万ドル相当のガラス製の置物が行方不明であることが発見されました。

ビデオ映像の調査により、容疑者と思われる人物が特定されました。男がディスプレイから作品を取り出し、パンツポケットに入れたようでした。

博物館は容疑者を会員証の写真と照合して博物館の会員であると特定し、その男性は自白し、作品は美術館に返還されました。

翌日はコネチカット州へ

クリスマスイブ、ハートフォードでは氷点下の気温が地域に影響を及ぼしました。

メインストリートにあるハートフォード国立図書館の最上階にある冷却装置につながる4インチの水道管が破裂しました。漏水は図書館の1階から4階までのすべてのフロアに影響を及ぼし、コンピューター機器や備品のほとんどが損傷しました。幸いなことに、コレクションへの影響は比較的軽かったため、図書館はその後すぐに清掃を行って業務を再開することができました。

クリスマスの日にも、インディアナポリス子供博物館の凍結したスプリンクラーラインが破裂し、博物館のウェルカムセンターが浸水し、深さ約1インチの水が溜まったという同様の事故が起きました。博物館は、清掃および修復作業員が水と損傷の処理を行うため、一般公開を止めていました。幸いなことに、コレクションへの被害は最小限でした。

メキシコでは1月14日に

早朝、メキシコのモントレーにあるクライスト・ザ・キング教区教会に、酒酔いした泥棒が柵を飛び越え、ガラスのドアを突き破って侵入しました。

中に入ると、彼は大天使聖ミカエルの貴重な像を盗もうとしました。泥酔状態の彼は転倒し、自らミカエルの剣で首を切りました。

大量の出血をしながらも、近くの住民に助けを求め、緊急サービスが彼を致命的な状態から救いました。

このようにアートが反撃することもあります！

翌週はフランスで

ナポレオンの姪で皇帝ニコライのいとこであるマチルド・ボナパルト王女が所有していた歴史的な宝石が、エベール博物館の職員によって盗まれていたことが発見されました。

泥棒らははしごを使って宝石が展示されている部屋に到達し、雨戸の閉まった窓を突き破りました。泥棒らのその過程で警報が鳴りましたが、博物館職員が対応する前に逃走することができました。

3日後スイスで

2022年8月、チューリッヒの美術館で午後10時頃に梱包室から出火し火災が発生しました。負傷者は出ず、消防士らが火災を抑えることができましたが、空調システムのせいで煙が美術館の古い部分全体に広がり、700点を超える美術品が清掃と修復のために移送されることになりました。

そして2023年1月、当局は古典派巨匠コレクションの美術品2点が行方不明になったと発表しました。徹底的な捜索と調査を行った後、美術館は、個人の永久貸与品で

あった2枚の絵画の盗難の可能性をもはや排除できないと判断しました。絵画は両方ともオーク材に描かれた17世紀半ばのもので、サイズは小さいものです。

2週間後ベルギーにて

早朝、プリンセスホフ陶磁器博物館の屋根を突き破って泥棒が侵入し、1階に“パーティー”という展覧会の一部として展示されていた11点の珍しい中国陶磁器を盗みました。この展覧会では、中国の旧正月にあたる春節に焦点を当てた展示を含め、オランダの人々がさまざまな方法で祝福する様子が描かれていました。盗難中のある時点で侵入警報が鳴り、警察が対応しましたが、残念ながら手遅れでした。急いで逃げようとしたため、陶磁器のいくつかが落下し、破片が博物館の近くで発見されましたが、陶磁器4つは行方不明のままです。特定の物品を狙った盗難であったと考えられています。

カナダでは3月1日に

「On 2 Ottawa」という環境活動家グループに属している活動家が、ロイヤルブリティッシュコロンビア博物館に展示されているケナガマンモスのレプリカにピンクのペイントを加えました。博物館の警備員は、警察が到着して二人を逮捕するまで、活動家と共犯者を拘留しました。博物館スタッフは即座に対応し、攻撃から90分以内にこの人気の展示品についた水性塗料を取り除くことに成功し、来館者のためにギャラリーを再開することができました。

3月6日、オーストラリア国立海洋博物館のIT技術者が博物館の会計システムにアクセスし、銀行口座の詳細を転送して自分の銀行口座に9万ドルを送金したことがわかりました。

犯人はシドニー在住の23歳の男で、その後オーストラリア連邦警察によって逮捕され起訴されました。

博物館は財務情報のいくつかの異常に気づき、不正行為を追跡する法廷捜査官と契約を結び調査をしました。その泥棒はまた、数人の従業員の財務の情報にもアクセスし、クレジットカードを使用して多数の買い物をしていました。

数日後、イタリアで

ミラノでの気候変動に対する抗議活動中、2人の参加者がイタリア人芸術家エルコレ・ローザ作の19世紀の騎馬像に黄色のペンキをスプレーしました。抗議活動参加者たちは警察に逮捕されました。修復家たちは、作品にさらにダメージを与えずにペイントを除去する最善の方法を未だ検討しています。

イタリアは最近、国の記念碑や文化遺産を破壊した者に多額の罰金を課す法律を可決しました。

翌週はフィラデルフィア

アメリカ革命博物館で行われた調印式では、FBI美術犯罪課が法執行パートナーとともに、50点の歴史的品物を5つの州から17の異なる博物館に送還しました。

2022年8月、デラウェア州ニューアークのマイケル・コーベットは、1970年代を通して多くの歴史的な銃器をこれら17の博物館から盗んだとして有罪を認めました。報告によると、彼は現在70代で、盗んだ品物を屋根裏部屋と地下室に隠していました。匿名の情報提供により発見され、その後逮捕されました。

コーベットは有罪を認めましたが、健康状態と年齢のため、懲役1日のみ、その後3年間の自宅軟禁が言い渡されました。美術犯罪課が盗まれた財産を返還するため、正当な所有者を追跡するための捜査活動が続けられました。多くの施設は、これらの品物が50年前にコレクションから持ち出されたことさえ知らなかったと報告されました。

翌日、ボストンにて

イザベラ・スチュワート・ガードナー美術館のスタッフは、米国史上最大の美術品盗難事件の33周年の日に美術館内で「抗議活動」を行うという環境活動家グループ「エクスティンクション・レベリオン」の計画を知りました。この有名な窃盗事件では、ボストンの警察官に扮した犯人が美術館に侵入し、職員2人を縛り上げ、5億ドル相当の美術品13点を盗みました。

2022年の3月18日、博物館はスタッフ、来館者、コレクションへの配慮からその日は一般公開を中止することを決定しました。気候変動に対する抗議活動参加者らは、入場を拒否されたため、代わりに博物館の前で「ダイ・イン」を行うことにしました。博物館は翌日、何事もなく再開しました。彼らは33年前に盗まれた空の絵画フレームの中に生物多様性の喪失と気候変動について強調されている自分たちのオリジナルアートワークと呼ぶものを展示することを計画していました。

2日後カナダで

西バンクーバー諸島産業遺産センターのボランティアは、歴史的な蒸気機関の真鍮のベルが盗まれていることを発見しました。数年前に別のエンジンのベルが盗難されたため、博物館はベルをブラケットに溶接したり、博物館の訪問者のためにエンジンが稼働していないときは、エンジン内に柵を

設置するなど、いくつかの予防策を講じていました。窃盗犯は安全柵を突き破ってベルに到達しましたが、重いベルを運ぶには少なくとも2人が必要だったであろうとされています。残念ながら博物館のそのエリアには監視カメラがありませんでした。

数日後イギリスで

開館後すぐ、2人の訪問者がハーバート美術博物館に入り、衣服を脱ぎ始め、白い「ジャスト・ストップ・オイル」Tシャツになりました。彼らは展示品の低いガードレールを乗り越えましたが、その時点で博物館の警備員が介入し、手錠をかけたまま連行しました。

犯人2人は、逮捕された時、乾いたペンキの入った袋を2つ所持していました。

一方、同じ日、ミネソタ州では

ミネアポリス美術館を訪れた訪問者が、150点の古代中国の青銅器の展覧会に入場していたところ、紀元前12世紀の古代のフクロウの形をしたワインの器につまずいて破損させてしまいました。「ピルズベリーフクロウ」として知られるこの遺物は、保存処理のため展示から外されました。報告書によると、この事件で訪問者は無傷だったといいます。

4日後イギリスで

一夜にして、ロザラムのクリフトンパークアンドミュージアムに泥棒たちが侵入し、1800年代の主に金や真珠の宝飾品など、いくつかの歴史的に重要な工芸品を持ち去りました。

4月27日、ワシントンD.C.で

ランチタイムの直前、黒いスーツを着た2人の気候変動抗議活動参加者が手に絵の具を塗りつけ、国立美術館にあるドガの彫刻「14歳の小さなダンサー」が入っているケースと台座に絵の具を塗り始めました。2人は塗料をペットボトルに隠して美術館に持ち込み、2400ドルの損害を与えました。彼らの行為により、この作品は13日間展示されなくなり、数人の修復家が展示品を清掃し、繊細な彫像の損傷を査定する必要がありました。

5月、加害者2人は「米国に対する攻撃を行う陰謀」の罪で米司法省に起訴され、懲役5年と罰金25万ドルが科せられる可能性があります。

一週間後イギリスで

開館前の日曜日の早朝、泥棒らがケルハム島博物館に侵入し、アングルグラインダーを使って展示ケースに切り込みを入れ、博物館のコレクションから12点の複製不可能な工芸品を盗みました。この博物館はこの地域の歴史に特化しており、それぞれの物品はこの地域の優れた鉄鋼製品の代表的な例と考えられており、中には1700年代に遡るものもあります。

2022年5月、大雨によりボローニャ市やフォルリ市などイタリア北部のエミリアロマーニャ州で広範囲に洪水が発生しました。この大雨により、この地域全域に大規模な洪水が発生し、17人が死亡、5万人以上が避難しました。文化的な場所や図書館も影響を受けました。75の記念碑、6つの遺跡、12の図書館が影響を受けました。いくつかの図書館には16世紀に遡るコレクションがあり、対応チームは迅速に行動し、さらなる被害を防ぐためにこれらの重要なコレクションを凍結することに取り組みました。

イタリアは6月、地域の文化遺産の救出に資金を提供するためにある一定の期間、国営美術館の入場料を1ユーロ引き上げました。

6月8日にイギリスで

深夜、エイボンクロフト歴史的建造物博物館で火災が発生したとの通報を受け、消防士が出動しました。彼らが到着すると、木造の茅葺屋根の納屋が燃えているのを発見しました。彼らは火を消し、隣接する30棟の建物を守ることができましたが、納屋の茅葺き屋根は完全に破壊され、軀体も損傷していました。

当局は後に火災は放火によるものであると断定しました。

6月14日、ストックホルムにあるクロード・モネの「ジヴェルニーの芸術家の庭」を覆うガラスに、2人の環境抗議活動参加者が赤いペンキを塗りつけて手を貼り付けました。警察が到着して2人の女性を逮捕し、修復担当者は攻撃によって絵画に損傷がなかったことを確認しました。警察はまた、博物館と協力して映像を調査し、他の人が攻撃に関与していたかどうかを確認していました。

7月7日

カナダ人の10代の少年が、ユネスコ世界遺産に登録されている8世紀の唐招提寺金堂の木材に爪を使って「Julian」と彫ったとして、日本当局の捜査を受けました。日本人観光客が破壊行為に気づき、寺院内の警備員に通報し、少年と

対峙しました。彼は自白し、両親のもとに戻されました。彼は未だ罰金または懲役刑に処される可能性があります。

7月15日、約2000年の歴史を持つコロッセオに自分の名前を刻んだとされるスイスの10代の少女がローマで逮捕されました。地元のツアーガイドが彼女の行為を発見し、警備員に通報しました。その行為の動画もありました。この事件は、ブルガリア人観光客が壁に「Ivan+Hayley'23」を彫り、撮影されていることに気づいて笑顔を見せている様子が撮影されてからわずか数週間後に起きました。両者には罰金と懲役刑が科せられる可能性があります。

しかし、歴史はより適切な罰を与えるだろうと主張されることもあります。

8月1日、気候変動に抗議するグループがアメリカ自然史博物館の恐竜棟で抗議活動を行いました。コレクションへの影響はありませんでした。抗議者らは博物館の寄贈者、特にこのスペースの名前の由来となった億万長者のデービッド・コッホに焦点を当てていました。この平和的な抗議活動に続き、9月2日にも同様に2回目の抗議活動が行われました。

翌週はハワイです。

マウイ島、特にラハイナの町を壊滅させた恐ろしい山火事の被害は計り知れません。8月下旬の時点で100人以上の死亡が確認され、さらに行方不明者もいます。被害を受けた土地の総面積は1万7000エーカーを超え、2207棟の建物が破壊されました。失われた建物の中には、中国人移民労働者のための20世紀初頭の社交ホールや、この種の建物としては島最古とされる築200年の住宅、ラハイナヘリテージミュージアムなどと、ラハイナ修復財団が管理する14の博物館のほとんどが含まれていました。報告によると、紙、木、布地で作られたあらゆる物品が失われたようです。

8月16日にイギリスで

ロンドン警察が、紀元前1500年から紀元19世紀までの金、宝飾品、半貴石の宝石など、大英博物館からの多くの盗難品目を捜査していることがわかりました。大英博物館には800万点を超える世界最大の美術館コレクションがありますが、一度に展示されるのはわずか約8万点です。報告書によると、100～2000個のアイテムが紛失していたといいます。伝えられたところによると、博物館は2013年に収蔵品の紛失を認識しており、2016年にはいくつかの収蔵品がe-bayに登場し始めました。盗まれた品物は特に高価なものではありませんが、総額約6万3000ドルの価値があり、e-bayではわずか40～50英国ポンドで販売されていました。

内部調査の結果、博物館は最近、30年以上博物館で働いてきた地中海文化専門学芸員を解雇しました。

8月20日、この夏の南カリフォルニアでは非常に珍しい出来事ですが、ハリケーン・ヒラリーが到来しました。この地域全体で生じた被害は懸念されていたほどではありませんでしたが、洪水による被害がありました。カリフォルニアアフリカ系アメリカ人博物館は、建物内への浸水のため博物館を10月まで休館すると発表しました。

数日後、フィレンツェで

若いドイツ人観光客数人がウフィツィ宮殿美術館とピッティ宮殿を繋ぐ有名なヴァザーリ回廊を汚損しました。

築500年のこの建造物は、メディチ家宮殿のボッボリ庭園から都市国家フィレンツェの行政庁舎までの保護された通路を提供し、コジモ・デ・メディチが両者の間を安全に移動できるようにするために1565年に建てられました。その落書きにはミュンヘンを拠点とするサッカーチームを指す「DKS 1860」と書かれていました。翌日、警察は他にも9人の若いドイツ人観光客が一緒に宿泊していたAirbnbを強制捜査しました。警察は黒いスプレーペイントと黒いペイントがついた衣服を発見し、2人は逮捕されたといいます。ウフィツィ美術館の館長によると、清掃にはかなりの時間がかかり、費用は約1万ユーロになる見込みで、2人の若者が刑期の一部として返済する予定です。彼らはまた、文化的な場所を汚損した場合、6か月から3年の懲役刑が科される可能性があるという新しい規則に基づいて起訴されることを望んでいます。

翌日ワシントンD.C.にて

1人の訪問者が国立自然史博物館の化石ホールの看板に手を貼り付けている間、恐竜のような服を着ていた他の2人が障壁を越えて「最後のアメリカの恐竜」の展示物内に入り、気候変動についての発言を続けました。3人は逮捕されました。ワシントン・ポストがこの抗議活動を報道したようで、その3人は今年初めに「14歳の小さなダンサー」の台座とケースを汚した罪で逮捕された2人の抗議活動参加者と同じグループ「Declare Emergency（非常事態宣言）」の一員であったと報じています。ギャラリーは30分間閉鎖されましたが、博物館の広報担当者は被害はなかったと述べました。

9月4日深夜、若いドイツ人観光客がルネッサンス時代に作られた噴水に登ってネプチューン像と一緒にポーズをとりました。この噴水は、市の新しい水道橋を祝うためにコジモ・デ・メディチによって依頼され、1574年に完成したものです。写真を撮った後、下に降りようとした際に大理石の破片を壊し、大きな損害を与えました。観光客は逮捕され、フィレンツェ市長は加害者が高額の罰金を支払うと発表しました。

翌週

旧ブリュッセル証券取引所前の銅像の保存工事が進められ、9月9日に除幕式が行われました。まさにその翌日の夕方、若いアイルランド人観光客がライオンにまたがって写真を撮ろうと決めました。ライオンから降りるとき、彼は像の手をしっかりとつかみ、その際に手が折れました。報道によると、泥酔したその観光客はしばらくして近くのレストランで発見されたといいます。

専門家らは、像を適切に修復するには何か月もかかるだろうと述べました。

建物自体は、ビールに特化した真新しい博物館としてリニューアルオープンしたばかりでした。

次の日

ミュンヘンのドイツ博物館の元職員がドイツの芸術家による絵画4点の窃盗罪で有罪判決を受けました。

犯人は2016年から2018年まで同美術館に勤務していた間に、20世紀の絵画4点を粗雑な贋作とすり替えて盗みました。

同博物館が盗難を発見したのは、社内の鑑定士がフランツ・フォン・シュトゥック作「カエルの王子様のおとぎ話」を鑑定し、目録に記載されているものと正確に一致していないことに気づいたときでした。その後、美術館は他の3枚の絵画も贋作にすり替えられていたことを知りました。

泥棒には1年9か月の減刑が言い渡され、絵画の販売で得た6万3000ドルの返済を命じられました。窃盗犯らの「反省と法廷に協力する意欲」により、寛大な判決が下されました。窃盗犯は法廷で、窃盗は簡単に犯せると述べましたが、博物館は「実際にはかなり安全な施設を備えているが、それが館の従業員の場合、安全を保つのはかなり難しい」と答えました。

この問題については、3年半前に戻る必要があります。早朝、泥棒がシンガー・ラーレン美術館のガラス扉を突き破り、フィンセント・ファン・ゴッホの絵画を盗みました。博物館は新型コロナウイルスのパンデミックのため閉鎖されており、侵入当時、現場には警備員はいませんでした。扉から侵入された際に警報が鳴りましたが、警察は到着が間に合わず、絵画を小脇に抱えてバイクで逃走した窃盗犯を阻止することができませんでした。報道によると、この絵はオランダの別の美術館から貸し出されていたものだったそうです。

数週間前、オランダ警察と協力していたオランダ人の「美術探偵」が玄関先でその絵を引き渡されたと発表されました。この絵画泥棒は実際には2021年に逮捕され、有罪判決を受けていましたが、その絵画はすでに犯罪組織の手に渡っていたことが判明しました。その犯罪組織は、他の犯罪に対する刑期の短縮を交渉する手段としてこの絵を利用するつもりでした。

9月13日にドイツで

泥棒たちは窓から東アジア美術館に侵入し、展示ケースをこじ開け、推定100万ユーロ相当の古代磁器9点を持ち去りました。9点の作品は16世紀から19世紀のものです。

そして最後に、9月17日にインドネシアで

ジャカルタのインドネシア国立博物館は火災により建物と収蔵品に大きな被害を受けました。夕方の火災により、元の建物にあった4つの大きなギャラリーを含む6つの部屋が被害を受け、屋根の一部が陥没しました。火災の原因は、近くのメンテナンス小屋の漏電でした。その後、強風により博物館に火が燃え移りました。

1. 抗議者たち
   「衝撃と畏怖」の要素は減少しています……次はどうなるでしょうか？
   第三者介入の危険性……
2. 時間外侵入
3. 火災
4. 破壊行為
5. 水漏れ・浸水

私たちが直面する最大の脅威の1つは自己満足です……

どうもありがとう！

研究発表

ポーランド　国立博物館研究所　Paulina FLORJANOWICZ

チェコ共和国　ICOMチェコ共和国　Pavel JIRÁSEK

フィリピン／オーストラリア　メルボルン大学　Ana Maria Theresa LABRADOR

日本　国立文化財機構文化財防災センター　黄川田 翔

中国　河南博物院　李政育

日本　東北大学災害科学国際研究所　蝦名 裕一
日本　岩手県立博物館　目時 和哉

ケニア　ケニア国立博物館　Joyce KINYANJUI

日本　国立文化財機構文化財防災センター　浜田 拓志

イタリア／英国　イングランド芸術評議会　Valentina SABUCCO

ドイツ　ハッソ・プラットナー財団　Nikolaos DOKALIS

ベルギー　ヘント地方警察　Kim COVENT

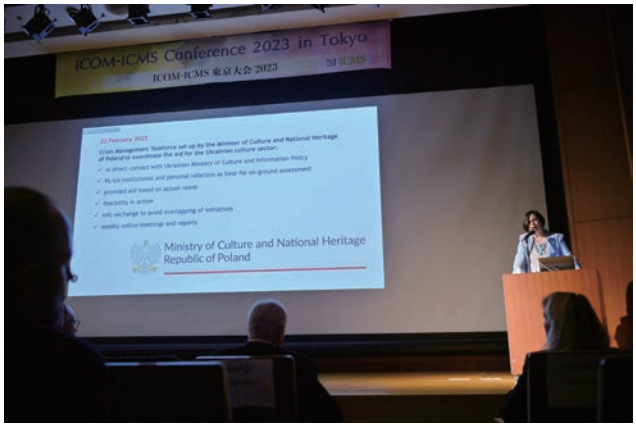
ドイツ／米国　ラトーゲン研究所 ベルリン国立美術館　Stefan SIMON



博物館から博物館へ：ロシアのウクライナ侵攻に伴うポーランドの危機管理　得られた教訓

Paulina FLORJANOWICZ　（ポーランド）
国立博物館研究所

こんにちは、おはようございます。まず最初に、この重要なイベントにお招きいただき、この1年半の博物館事業についてお話しさせていただくことを、日本の当局の方々、そして私どもの同僚に感謝したいと思います。





さて、ポーランドだけでなく、ヨーロッパ全土、特に中東欧で事態が展開されていることからパンデミックは、ロシアの独立ウクライナへの侵攻に端を発した真の危機の前兆であったようです。私たちの施設は一般的な博物館とは異なるので、簡単に説明します。私は国立博物館研究所の所長を務めています。国立博物館研究所は、博物館部門全体を監督する責任を負う文化省管轄の国家機関です。私たちは美術館を直接監督するのではなく、美術館と協力してガイドラインや基準を設定し、セキュリティ上の懸念に対処しています。このユニークな仕組みは、ポーランドでは30年以上前から、さまざまな変遷を経て実施されています。



確かに、私たちはウクライナでいつ戦争が始まるかわかりませんでしたが、2月中旬には、戦争は数日の問題であるというのが一般的な感情であり、戦争を回避する可能性については懐疑的な見方が強まっていました。その結果、わが文化省は紛争開始のわずか1日前に、ウクライナの文化遺産と危機に瀕した文化のためのタスクフォースを設置しました。このタスクフォースは、国立図書館、公文書館、私たちの組織、文化省内の関連部署の責任者など、すべての遺産機関の最高責任者で構成されています。タスクフォースの主な目的は、ウクライナ文化省と直接連絡を取り合い、現地の真のニーズに対応することでした。



最初の頃は、ポーランドとウクライナの機関の間に強力な人脈を築くことが極めて重要でした。私たちは直接連絡を取り合い、毎日オンラインでミーティングを行い、実際のニーズに迅速に対応できる柔軟性を発揮しました。重複した取り組みを避けるため、週1回のミーティングに移行し、データ収集と現状報告の作成を可能にしました。紛争初期、私

はポーランド文化省の文化遺産部長を務めていたため、ウクライナ文化省との関係は特に重要なものとなりました。

戦争が始まると、私は世界中の仲間からウクライナの芸術作品を安全に保管できる場所を提供してほしいという電話を受けました。驚くべきことに、現地の人々の安否や実際の状況について尋ねるものは皆無で、誰もが避難場所を提供することに集中していました。戦争のようなシナリオでは、避難は地元当局にとって最重要事項ではないことを認識することが重要です。また、ウクライナは幸いにもまだ独立国であり、文化遺産を守る能力は十二分にありました。避難は最後の手段としてしか考えていないのです。その結果、この危機の初期段階は3段階に分かれて展開されました。

第一段階は完全に自然発生的なもので、ポーランド国内だけでなく、さまざまな国の人々から発生しました。ウクライナと最も長い国境を接し、この地域で最大の国であるポーランドは、当然ながら難民を最初に受け入れました。雪と氷点下の寒さに直面した冬のポーランドには、6週間で200万人を超える難民が到着しました。特筆すべきは、その95%が子ども連れの女性だったことで、ポーランド社会全体から自発的な反応が起こりました。

ポーランドには難民キャンプがひとつもなかったことを強調しておきます。その代わり、難民は主に個人の家庭や家に避難し、誰もが自発的に支援に加わりました。ここで紹介する画像は、慈善団体のものではなく、医療援助や食糧配給の拠点となったポーランドの美術館のスナップショットです。美術館のゲストルームが利用可能であれば、子ども連れの母親のための居住スペースに改装されました。当時、子連れの母親のためのプログラムや活動を提供することが重要な要件であったことは、すぐに明らかになりました。

博物館は非常に有能であることが証明され、数日のうちにウクライナ語による教育プログラムや教室が開設されました。ウクライナ語に堪能な専門家を見つけるのは困難でしたが、多くの難民がこうした機会を利用して、子どもたちの関心を戦争からそらし、状況や避難生活について難しい質問をするのを防ぎました。











迅速に、私たちの焦点はウクライナの地元の博物館に具体的な支援を提供する方向に移りました。彼らの即座のニーズを理解し、最初の要件はコレクションを国外に移送するのではなく、西ウクライナに隠すための梱包資材であることを認識しました。

侵攻の日に、ウクライナのすべての博物館は文化省からの情報を受け取り、コレクションを避難させるべき場所が指定されました。彼らは避難プロセスを開始しましたが、2つの主要な課題に直面しました。まず第一に、梱包に必要な資材が不足していました。第二に、人員の深刻な不足がありました。

多くのスタッフ、主に女性は状況を考慮して急いで国を去り、子供たちを優先しました。同時に多くの男性は軍に志願しました。その結果、多くの博物館ではスタッフの10%未満しか残っておらず、一部のスタッフは博物館にさえ到達できませんでした。重大なスタッフ不足に直面し、彼らは梱包をはじめられる人に連絡を取ろうとしました。

戦争が勃発する可能性があると知っていながら、なぜ事前に準備しなかったのか疑問に思うかもしれませんが、これは情報政策とプロパガンダの問題です。人々は迫り来る戦争を恐れており、戦争が始まる前に博物館を閉鎖することは降伏と見なされる可能性がありました。そのため、博物館は爆弾が落ちるまで開かれたままでした。

最初に送られた資材はポーランドの博物館の既存の資材からでした。緊急性を認識し、私たちの研究所がこれらの資材の最初の輸送を調整しました。ユネスコのサイトを管理する一部の有名な博物館を含む15の博物館が、梱包や防護資材（消火器や場合によっては防弾ジャケットなど）を含む何でも手に入れられるものを提供するためにボランティアとして参加しました。これらの博物館からの最初の輸送は、戦争の開始から約2週間以内にウクライナに到達しました。最初の週のかなりの部分は手続きの調整に費やされ、ウクライナとの国境はシェンゲン協定の外部国境であり、両側で貨物の移動に特別な規則が適用されるためでした。欧州委員会との調整が必要で、通関の遅延なしに動きを促進するためです。すべてのサービス、通関および国境警備隊を含む、非常に助かりましたが、法的手続きへの遵守が必要でした。

ウクライナ侵攻から1週間以内に、ポーランドにいるウクライナの博物館職員や専門家向けのコンタクトポイントを設立しました。初めのアイデアは最初の日に考案されましたが、ヘルプデスクのためのウクライナ語を話す専門家を見つけるのに1週間かかりました。このコンセプトは、200万人以上の難民の中には迅速に雇用を見つける必要があるであろう多くの女性の博物館の専門家がいるという信念に基づいています。緊急性を認識し、これらの女性が言語の障壁による低いポジションに就くのではなく、専門的な能力を発揮する手助けをすることを目指しました。

広くコンタクトポイントを宣伝し、いくつかの博物館の専門家を特定しました。同時に、ICOMポーランドはグローバルに寄付を集め、これらの専門家の奨学金を後援しました。これは博物館が新しいスタッフを雇う予算がなかったためです。最初の3か月のための資金を提供し、これらの女性が仕事を再開できるようにしました。反応は予想ほども広範囲ではなかったものの、英国博物館協会などの機関がいくつかの奨学金の資金提供に重要な役割を果たしました。この取り組みは主に最初の数か月にわたりましたが、コンタクトポイントは今も運営されており、現在はウクライナの博物館がポーランドの博物館との協力を求め、博物館業務のスキル向上を図るために焦点を移しています。

博物館は通常の業務の範囲を超えた活動に取り組みました。ポーランドとウクライナの国境に近い戦争地帯に位置するプシェムィシルの国立博物館がその典型です。この博物館は保管施設を空にし、それを主にポーランドからの経験豊富な医師のための医療ハブに変えましたが、他の国からも医師が参加しています。このハブは、ウクライナの前線に向かう医療専門家のサポートセンターとして機能し、直接の戦闘地域で援助を提供しています。プシェムィシル博物館の補給エリアは、ポーランド政府によって一貫して補充され、文化機関と医療部門の危機への対応におけるユニークな連携を示しています。

ポーランドの博物館の統計を収集する機関として、私たちはさまざまな種類の博物館によるウクライナおよびウクライナの博物館への援助を目的としたほぼ400の取り組みを文書化しました。これら多様なプロジェクトは、国内の博物館が行った広範な貢献を示す形で、ポーランド文化大臣から特別な賞状の形で賞賛されました。

4月に、私はフランスがヨーロッパ評議会議長国を務める中で開催された重要な会議に参加しました。この会議で



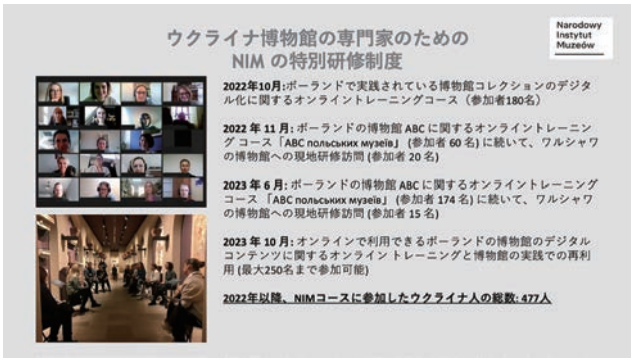
は、博物館がパンデミック後に直面する重大な課題に焦点を当てました。驚くべきことに、ウクライナはこの会議全体で取り上げられませんでした。主題は主にザッカーバーグによって導入された新しいメタバースと、それが博物館を再構築する可能性を中心に置いていました。今日の議論は、ウクライナの危機によって生じた直接の課題に再び焦点を当てる重要性を強調するものです。

第二段階に移るにあたり、進行中の戦争に関係なく、私たちは博物館業務において専門性を維持する必要性を認識しました。このコミットメントは、ウクライナの博物館が困難な状況にもかかわらず運営を続けるという同様の決意を反映したものでした。

ウクライナ危機への対応として、美術品の避難は正式には決定されませんでした。ただし、私たちは「安全な避難所」という制度を考案しました。これはハーグ条約によって規制されていないものの、長期の貸し出しや一時的な展示に基づいています。このアプローチにより、重要な美術品がポーランドや隣国で長期間の展示のための避難所を見つけることができました。展示では、これらの美術品を梱包し避難させる際の実際の状況が示されます。ポズナン国立美術館やワルシャワの王宮など、主要な博物館では高品質のヨーロッパ美術が展示されています。また、私たちはポーランドで美術品の輸送を調整する機関として、ポーランド国内だけでなく他の国へ向けた美術品の輸送を援助しました。



私たちは博物館専門職のトレーニングを専門とする機関として、年間約30のコースを実施しており、これらは固定とオンラインの両方の形式でさまざまな博物館のトピックをカバーしています。ポーランドの機関にウクライナの博物館専門家が急増していることを認識し、私たちは彼らにポーランドにおける博物館の運営の基礎、関連法、および欧州連合の規制について教育するためのコースを開講しました。驚くべきことに、参加者の大多数はまだウクライナの博物館で活動しているウクライナの専門家でした。成功と需要を考慮して、私たちは複数のセッションを実施しており、最新のものでは約200人の参加者を予定しています。特に、これらのコースはウクライナでの激しいミサイル攻撃、電力不足、避難所からの参加など、困難な状況を乗り越えて続けられています。今後のコースは、ウクライナの同僚の要望に応じて、戦時下で博物館業務を続ける彼らが、デジタル化された資料をデジタル展示やポスター展示に使用できるように訓練することに焦点を当てています。





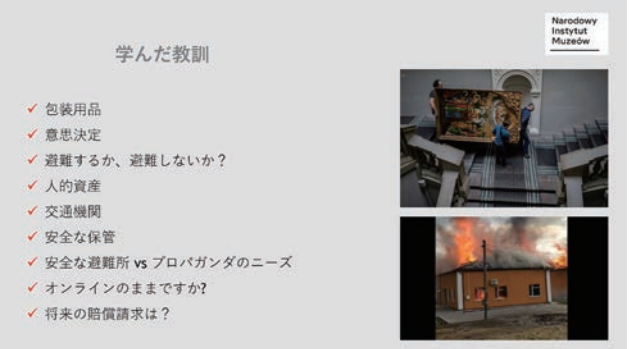
第三段階では、経験を共有し、そのような共有に不適切な時期はないと強調します。

ポーランドでは、ウクライナの戦争中の文化遺産の安全性に焦点を当てたいくつかの会議が開催されています。これらの会議はオンラインとポーランド国内で物理的に行われ、ウクライナの参加者は自らの視点を共有し協力するために、時には24時間以上かけて参加する努力をしています。

結論として、当機関ではこの危機中にうまくいったこととそうでなかったことについての報告書を準備しています。以下は、ウクライナの同僚からのいくつかの重要な観察です。

1. 梱包資材: 博物館はコレクションの保管において、有効期限のある梱包資材を含む課題に直面しています。
2. 意思決定: ウクライナでの決定は非常に中央集権的であり、博物館の現地のディレクターではなく、省が行っていました。
3. 人的資産の不足：正当な理由で多くのスタッフが不足したため、コレクションの管理に課題が生じました。
4. 交通の問題：交通手段の手配は独立して行われ、混乱した状況での渋滞などで困難が生じました。
5. 安全な保管：現代の戦争の精密さから安全のためには地下の保管が必要であり、そうでない場合はコレクションを隠しても有効でない可能性があります。
6. 安全な避難所 vs. プロパガンダの必要性: 安全のために博物館を閉鎖するか、プロパガンダの目的で開いておくかの決定にはジレンマを生じました。
7 オンラインでの継続：ウクライナの博物館はオンラインでターゲットにされるのを避けるために沈黙し、コレクションに関する情報を削除し、Googleの場所を変更しました。
8. 屋外展示の保護：屋外展示品、とくに戦争関連の芸術作品（戦車や飛行機など）は軍事目標と見なされました。
9. 将来の返還請求：ロシア人による略奪やロシアの博物館専門家の関与に対する懸念があり、これについての証拠がプラハのセッションで提示されました。ICOMはロシアの専門家や博物館に対するメンバーシップの閉鎖についての決定を下していません。

これらの観察は、危機の時に博物館が直面する複雑な課題と、現代の紛争に対する適応戦略の必要性を強調しています。



これで私のプレゼンテーションを終了します。質問があれば、喜んでお答えします。また、ウクライナの博物館専門家がガイダンス、トレーニング、またはその他の支援を求めている場合は、どうぞ当機関のコンタクトポイントにご照会ください。どうもありがとうございました。





ICOMプラハ大会2022の反響

Pavel JIRÁSEK　（チェコ共和国）
ICOMチェコ共和国

こんにちは。まず最初にこちらでスピーチさせていただく機会を与えてくれた主催チーム、東京富士美術館、および東京国立博物館に感謝の意を表明させていただきます。私のプレゼンテーションでは、ICOMプラハ大会からの経験を共有し、同大会のような大規模なイベントに、世界的な脅威がどのように影響するかを説明したいと思います。また、ウクライナの協力による現在のチェコ共和国の状況についても少し触れたいと思います。







さて、ICOM総会を計画し、候補を準備したのはもう5年前のことです。その際、4つの主要なテーマを見つけました。メインテーマは「博物館の力」でした。その目的は博物館と市民社会、持続可能性、博物館と回復力、ビジョン、博物館とリーダーシップ、デリバリー、博物館と新技術でした。私は、哲学的な側面に焦点を当てたチームとしては博物館と市民社会がメインテーマであると考えています。私は私たちの仕事により関連する博物館と新技術の部分により深く関与していました。全体として、それは博物館の力を象徴していると思います。これらの種類の考えや博物館の発展の方法を考えるとき、セキュリティについても考えるべきです。

では、8月とそれ以前の日々に戻りましょう。こちらがICOM総会のためのオフィスで、それはまだ一部残っています。中央にあるのが、すべての財政的な操作に責任を持っていたICOM理事会です。残念ながら、私は今年の終わりまで会計を担当しており、会議の財政的な余波にはまだ多くの影響がありますが、いずれにせよ、私たちはすべての問題を克服すると信じています。

では、影響についてです。特に会議の経済に影響を与えたのは、COVIDパンデミックでした。2020年3月から、旅行業界はほぼ崩壊し、ヨーロッパではライブイベントがなくなり、法律およびヨーロッパの規制により、ヨーロッパ全体でこのような会議を開催することが禁止されました。そのため、会議の2年前には、会議を開催できるかどうか不確かでした。当然、航空旅行も制限され、以前よりも費用がかかりました。したがって、将来のCOVID制限については非常に不確かでした。なぜなら、特に2020年には、チェコ共和国内でさえ、特別な許可なく地域から地域へと移動することがほとんどできない年があったからです。そしてそれだけでなく、2022年2月にはロシアがウクライナに侵攻を開始したからです。

そして実際的には、私たちにとって、会議のハイブリッド形式を準備するためには非常に財政的な負担があることを意味します。また、国際委員会と協議した際には、オンライン参加ソリューションを導入する必要があり、これは多くの保守的なICOMメンバーには受け入れられませんでした。特に博物館フェアや博物館展覧会にとって脅威となったのは、企業にとって先行き不透明な経済状況でした。さらに、スタッフを雇うための高いコストも問題でした。COVID前と後の給与を比較すると、給与は莫大に増加しました。また、ウクライナとロシアのメンバー市場も失われました。彼らはほとんど参加できなかったためです。ウクライナのICOMメンバーはほんの数人しか会議に参加できませんでした。彼らが無料で会議に参加できるようにし、その他の費用もサポートしました。しかし、多くのウクライナの博物館の職員は国を離れたり、博物館を離れたりしてほとんど不可能でした。博物館はロシアのミサイルの脅威にさらされていました。

そして、これが会議の経済的結果です。計画よりもはるかに多い893,000ユーロが参加者の料金や博覧会などの企業の料金から得られ、国家予算を通じてICOM国内委員会から1,000,000ユーロ以上がサポートされました。これは、私たち5人の個人が今後9年間、この1,000,000ユーロに対して全財産で責任を負うことを意味します。チェコの法律によれば、NGOとその代表者は国家予算からのすべての財政支援に対して責任を負います。

他にも結果があります。現地で3,000人以上、オンラインで650人以上の参加者がおり、124か国から参加者がありました。遠隔参加者もいたり、出展者の数は118、オフサイトミーティングの数は32、エクスカーションの数は40、関連イベントの数は81など、いくつかの他のデータもあります。ランチボックスの総数は6,350個で、計画から倍になりました。

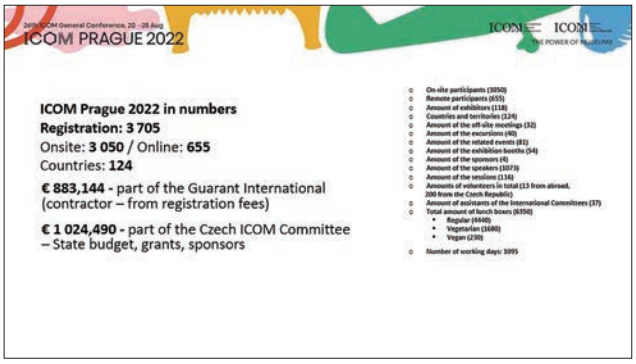
しかし、興味深いのは、私たちの性別の数値です。ICOM全体で依然として女性の割合が高いのです。61%です。男性の割合は30%でしたが、9%が性別を宣言していませんでした。これは社会全体においてこれらの2つのカテゴリーに属さない新しい状況です。

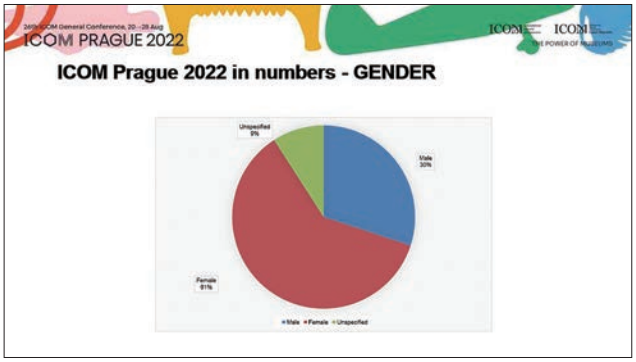
いくつかのイベントがありました。オープニングセレモニーや基調講演者、パネリストなどです。

会議では基調講演者が5人、パネリストが16人いました。









そして、Paulinaが言ったように、ウクライナの特別パネルは、プログラムには記載されていませんでしたが、実際にはICOMの事務総長に無理を言ってICOMウクライナパネルを追加してもらいました。

今の状況について少し言いたいと思います。Paulinaが

言及したように、ロシアのニュースと専門家がウクライナの博物館の略奪に関与しているという証拠があります。それが最も恐ろしいことです。私は1月にICOMヨーロッパの会議に派遣され、私たちの大統領から、ロシア代表にこれらの事例を知っているかどうか、ICOMの代表としてそのようなICOMのルールに反するものに対して何をしているか尋ねましたが、何の回答も得られませんでした。そして、すでに言及されているように、ICOMの事務総局やICOMの仲間たちは、ウクライナの問題やロシアのウクライナ侵略を解決することよりも他にも優先事項があるようです。そして、私の国の状況も、すでに言及されたように、ほぼ50万人の難民がおり、それはつまり私の国の4人に1人がウクライナから来たことを意味します。

そして、私たちはICOM国内委員会として、文化省との合意に基づき、ウクライナの博物館への財政的支援に責任を持っています。したがって、私たちはまだ、これらのことを組織し、ウクライナの同僚と連絡を取っている専門家のオフィスを維持しています。実際には、年末までに行われる最後の助成金は、国立図書館からの2つのステーションで、移動ステーション、正確な名前はわかりませんが、トラックとデジタル化機器を備えた柔軟なデジタル化施設です。これはウクライナ側でそのような柔軟なデジタル化の施設が必要とされたものです。

もちろん、他にもいくつかのイベントがありました。ソリダリティ・プロジェクト、LGBTIQ、および博物館の特別パネルは、おそらくすでにお見せしたグラフに関連しています。

そして、博物館ナイトもありました。

会議の5日目には、フラッグリレーセレモニーがありました。したがって、アブダビ代表団にアイコンのフラッグを手渡しました。

もちろん、この美しい記念切手もありました。企画してくださった方に感謝します。

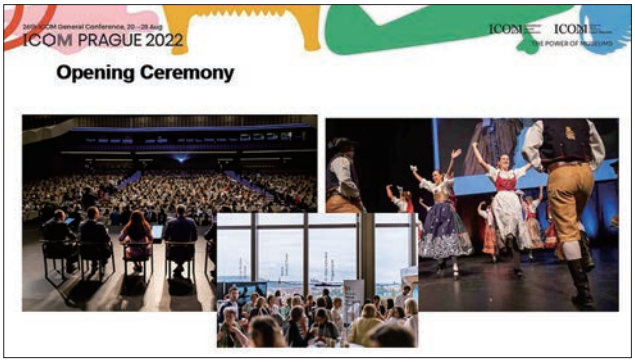
多くのボランティアとアシスタントがいました。特に若者や学生が多かったです。

また、会場外で開催された会議の一環として、特別な2つの会議がありました。一つは野外博物館コレクションの保護と、ロズノフの国立野外博物館へのエクスカーションで、そこで楽しい時間を過ごしました。









二つ目はブルノで、危機に瀕した建築アイコンについてのものでした。

パネルとICOMの国内委員会間の交渉の結果として、ウ









クライナのレッドリストがすでに2022年11月に公開されました。ウクライナのリストはICOMの特設ページで利用可能です。インターネットに接続されているかどうか分かりませんが、ICOMの特設ページに行けば、すべてのICOMのレッドリストが掲載されており、その中にウクライナのものもあります。

さて、私たちはシーズンフェアを開催し、国立美術館での滞在中にそのオフサイトミーティングを行いましたが、そこでセキュリティシステムをより詳細に見る時間はほとんどありませんでした。そのセキュリティシステムのメインスキームをお見せします。

私はそのシステムの一部のモデルの責任者でした。したがって、実際には制御パネルがアクセス制御システムと侵入警報システムを統合していますが、環境制御などのために特別なモデルもあります。私たち、つまり博物館にとって最も重要なのは、このシステムがオープンであることと、そして、博物館に携わる人々と共にいくつかのモデルを追加できます。

これは国立美術館と工芸美術博物館、および他の多くの博物館で使用されているシステムのトポロジーです。これはチェコ共和国でのほぼ標準です。

また、システムには特別なグラフィカルな上部構造があり、サーバーとクライアントの基盤で1つの中央ステーションでオブジェクトを見ることができます。これは、たとえば国立美術館の貿易フェア施設で使用されています。ただし、これはチェコ警察の標準としても使用されており、同じシステムを使用しているため、技術的な問題なしに警察に接続できるという利点があります。そして、文化省と内務省の30年以上にわたる協定によれば、選択された重要な文化財は無料で地域および中央の警察署に接続されています。これは博物館のセキュリティガードのバックアップです。

したがって、これらのシステムの技術的な部分に興味を持っている方々には、こちらに英語の情報がありますので、プレゼンテーションの後に提供できます。

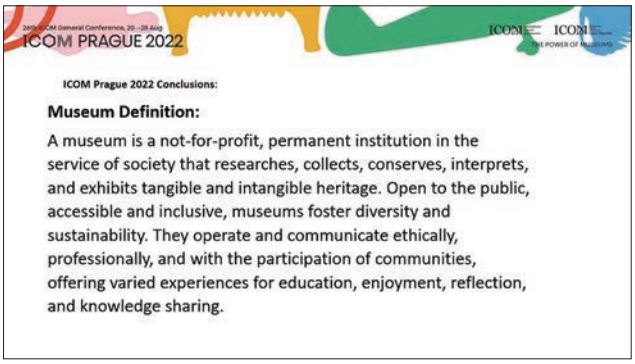
ICOMプラハの結論です。3つの決議と1つの博物館の定義がありました。最初の決議は戦争勃発時およびその後の博物館やコレクションの管理に焦点を当てています。重要ですが、あまり頻繁に使用されていません。2番目の決議は言語の多様性を促進し、すべてのメンバーの参加のための言語の障壁を克服することを目指しています。3番目の決議はすべての国内委員会の参加を容易にし、ICOMのリソースへの均衡の取れたアクセスを確保することです。

プラハ総会の最も重要な結果は、新しい博物館の定義

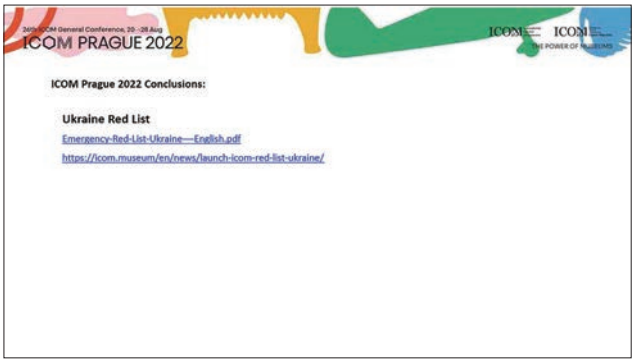
です。これはICOMの進歩的な側面と保守的な側面のバランスを見つけたことだと思います。京都大会で提示された定義ほど革命的でなく、急進的でもありませんが、遂にプラハ大会で新しい定義が得られました。

ご清聴ありがとうございました。



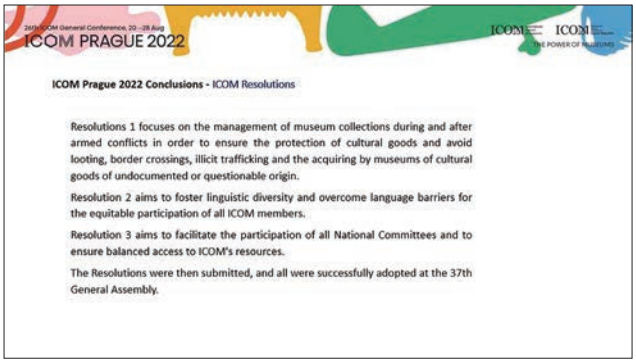


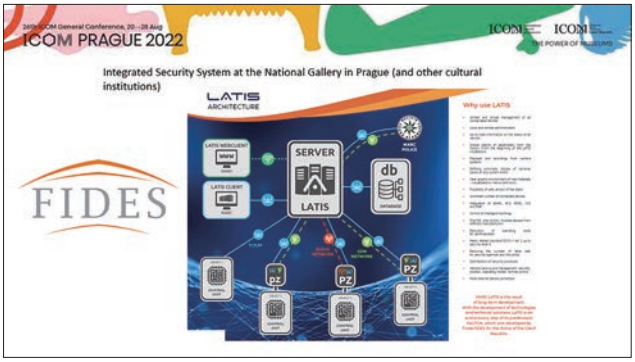














博物館の防災対策戦略とモデルの構築におけるギャップに目を向ける：地域住民との過去の復興活動の教訓を生かして

Ana Maria Theresa LABRADOR　（フィリピン／オーストラリア）
メルボルン大学

皆さん、こんにちは。この講演にお招きいただき、うれしく思います。博物館の外にありながら、フィリピンの博物館の実践に大きな影響を与えた事例についてお話しします。





まず最初に、この発表のための調査がグリーンウェイ・センターで行われたことに感謝の意を表したいと思います。私が働いている土地の伝統的な所有者に謝意を表し、過去、現在、未来の長老たちに敬意を表します。また、グリーンウェイ・センターでの教育活動には、彼らの知識と長老の知恵を惜しみなく分かち合ってくれる先住民のパートナーや学生たちの存在が不可欠であることを認識し、感謝したいと思います。

それでは、このプレゼンテーションの前提条件と枠組みをいくつかご紹介したいと思います。これはICMS会議のテーマに基づいており、コミュニティベースの防災セキュリティネットワークの構築を中心に、協力によって生まれる相乗効果についての事例研究を強調しています。このプレゼンテーションでは、博物館コレクションの安全確保における経験から得られたリソースを掘り下げています。コレクションを保護する際、保存の意味合いについての疑問が生じます。社会人類学者、学芸員、そして予防的保存に携わる者として、私はコレクションの保護と保全の関係を探ります。さらに、社会的利益について考え、より広い視点から考察します。これらの洞察を今後の仕事にどのように活かしていくか。これらは私が考察した側面の一部であります。

私の講演の概略は、簡単な背景と、自然保護と災害リスク管理の実践を理解するための枠組みを掘り下げ、そして問いを投げかけることです。フィリピン中部に位置する東サマール州ギュアンの教会の修復を例に、このことを説明します。さらに、遺産を守る上での地域住民の役割についても探っていきます。博物館がサービスを提供するコミュニティを通じてコレクションを確保することには多くの課題がありますが、コミュニティのメンバーを議論に参加させることは非常に重要です。

博物館においては、私たちは通常、劣化の主体について言及し、しばしば受動的な貢献者と見なします。収蔵品はそれ自体として捉えられることもあり、放置などの問題によって劣化していきます。

最近、私たちはより広範な視点を提案し、私たちが考慮しなければならない予防的保存の4つの主体や機関を提案しました。この枠組みは、地域社会がコレクションの保護にどのように積極的に参加できるかを強調するものです。支配的で普遍的なシステムに傾倒する保守的なアプローチとは反対に、予防的保存の原則を主張するための従来の手段は、人々がより関与できる他の要素を見落としている可能性があると我々は主張します。モノについて議論するとき、私たちの目的は、認可された知識体系を切り離し、複



数の形式を考慮しながら、多様なモノの知識を再リンクさせます。人に関しては、私たちは共同制作された知識と知識の自己決定を重視します。場所については、植民地体験が起こった地政学的、経済的、環境的空間を認識します。最後に、時間については、価値の喪失と損害の閾値が文化的に偶発的なものであることを認めます。

2005年、「博物館における統合的危機管理のためのチームワーク」によって、災害前、災害時、災害後のサイクルに焦点を当てた、このプログラムのフレームワークが確立されました。強調された2つの重要な要素は、モニタリングとコミュニケーションであり、これは今日でもいくつかの博物館で採用されています。

パヴェル氏が、2年前にプラハで行われた重要なマイルストーンについて触れてくださったことをうれしく思います。この定義によれば、博物館とは、有形・無形の遺産を研究し、収集、保存、解釈し、展示する、社会に奉仕する非営利の常設施設です。一般に公開され、アクセシビリティと包括性を重視する博物館は、多様性と持続可能性を促進します。博物館の運営とコミュニケーションは、倫理的かつ専門的に行われ、地域社会の積極的な参加を得て、多様な教育的体験、楽しい体験、内省的体験、知識の共有体験を提供しています。博物館のセキュリティを考慮することなく、この新しい博物館の定義を実行に移すことはほとんど不可能です。

2015年にユネスコが発表した、博物館とコレクションの保護と振興に関する重要な勧告を紹介したいと思います。この勧告は、コレクションの多様性と社会的役割に焦点を当て、2015年に採択されました。

伝統的な環境以外の博物館や、博物館の壁を越えたコレクションを探求することが重要です。これらの提言の性質は、フレームワークの包括性を強調しています。オーベル氏が述べたように、私はICOMの定義とユネスコの勧告の両方に関わる機会に恵まれました。先進的な側面と定義の制約のバランスをとるのは、難しいことでした。私たちは、国際コミュニティや国内コミュニティとの協議を通じて得たキーワードを用いてデータ分析を行いました。

私たちが活用できるもうひとつの枠組みは、国連の持続可能な開発目標です。目標17は特に重要で、より多くのネットワーク化を促し、コミュニティへの関与を促進するものです。

フィリピンでは、今回紹介する事例研究にあるように、気候変動に関する国家的な枠組み戦略が存在します。異常気象は博物館内外のコレクションに大きな被害をもたらしています。もともとは2010年から2022年までの12年間の枠組みとして計画されましたが、前政権による真剣な検討不足のため、2028年まで延長されました。

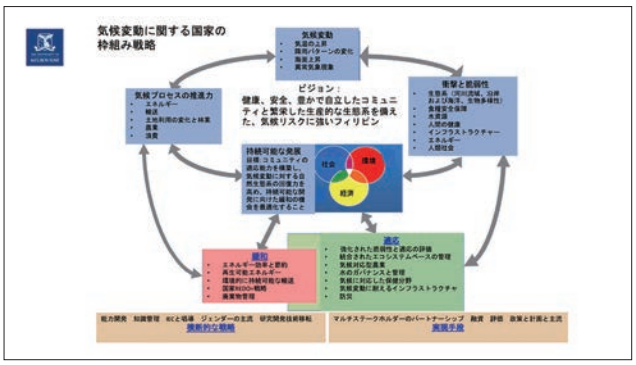
フィリピンは、日本のすぐ南にあり、中国に向かって伸びている島々です。中国との間にも大きな問題があり、特に海洋における境界線に関する問題が大きいのです。仲裁中にもかかわらず、潜在的な脅威が残っており、危険は陸の国境にとどまらず、海洋の領土にも及んでいることが浮き彫りになっています。

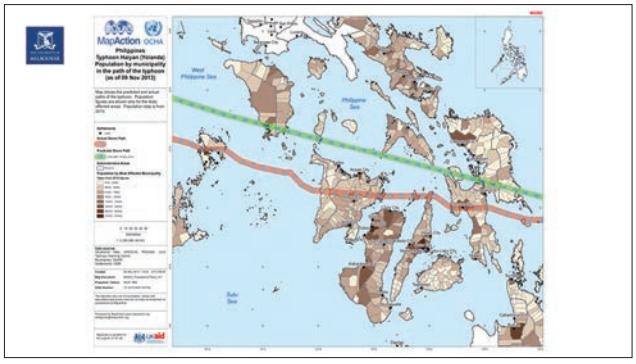
異常気象は私たちすべてに影響を与えます。画像の緑の線は、2013年に発生した超大型台風「ハイエン」の予想進路を表します。オレンジ色の線が実際の進路で、国宝の教会がある東サマールのギウアンに初上陸しました。

この画像はその余波を捉えたものです。貨物船が内陸に押し込まれ、大きな被害が出、多数の人命が失われました。多くの人が台風の強さに油断しました。フィリピン人の強い宗教的感情から、即座の対応として祈りと行列が行われました。注目の教会は、グイアンにある無原罪の聖母教会です。台風直後に撮影された航空写真は、台風が人命と財産にもたらした壊滅的な被害を鮮明に映し出しています。

これが復興期の教会の様子です。しかし同年10月、セントラルパークの2つの島、特にボホール島とセブ島を地震が襲い、その復興に関心と資源が向けられました。台風ハイ







ヤンが東サマールのギュアンを襲ったときは、比較的遠く、到達するのが困難であったため、遺産の復旧を支援する人は多くはありませんでした。人命が最優先であることを認識し、限られた援助は文化遺産の復旧に向けられました。台風後の写真に写っている教会は、復旧に時間がかかりました。フィリピン国立博物館のような文化機関が関与しているにもかかわらず、何人かの同僚は困難な旅に出ることを渋りました。現地までは3つの交通手段を使い、半日近くを要しました。教会は2015年になっても修復されないままでした。

国宝としての教会の重要性は、その驚くべき特徴にあります。フィリピンの東の果てに位置し、その立地条件を考えると、その建築と存在は印象的です。

2014年、フィリップ・ゴールドバーグ駐フィリピン米国大使は、教区司祭のロペス・オブレリド・モンシニョールとともに現地を視察しました。訪問後、米国務省は教会の修復のために30万ドルを拠出することを約束しました。特筆すべきは、フィリピンがかつて米国の植民地だったことです。2015年2月、フランソワ・オランド仏大統領は当時のクリストファー・シーン=ゴンザレス国連市長を伴い、マニラでのCOP21会議後に東サマールを訪問しました。オランド大統領は、重要な国連サミットを前に、気候変動に対する世界的な意識を高めることを目的としていました。地元の人々は、フランス大統領がウールのスーツを着て1マイル（約1.6km）を汗だくになりながら歩いたことに感銘を受けました。

このような訪問が彼らの窮状により多くの関心を集めると信じていた私は、国立博物館の副館長として修復作業を手伝うことを志願しました。2016年3月、私は国立博物館から技術者、保存修復師、民族学者、生物学者、考古学者を含むチームを集めました。この取り組みは、フィリピン国立博物館ギアン遺跡保存プロジェクトとして知られるようになりました。しかし、私たちが遭遇した現実は、2014年 第1四半期の復旧段階を描いたこの画像のような報告書や写真とは異なっていました。塗装されたトタン天井を含むほとんどの内装部品は、教会の外で錆びついたまま放置されていました。祭壇の木製の部分のように一時的に保管されているものもあり、この写真のように教会の記録はその場しのぎの博物館のような場所に置かれていました。

この写真は、当館理事のレネ・ジャベリャーナ神父と、修復プロジェクトでお世話になったギウアン教区の故モイセス・メルカンポ神父です。

結局、私たちはプロジェクトを入札にかけ、業者と協力することができました。ファサードは2017年初頭までに完成し、2017年半ばには屋根も設置されました。これらのマイルストーンが達成されたことで、私たちは内装を進めることができました。当初、国立博物館のメンバーによって設置された仮設店舗は、理想的な収納ソリューションを提供するものではありませんでした。そこで私たちは、欄干や赤いタブローの柱、祭壇などの部材を取り出し、レゴのピースのように立てて並べました。当初、いくつかの物品が紛失していたため、混乱期に持ち出された土産物を探すコミュニティ・キャンペーンが行われました。この地域は安全が確保されていなかったため、地域の人々は進んで持ち帰った品々を返してくれました。このような協力のおかげで、私たちは内部の復元に成功したのでした。

この画像は、修復の初期に国立博物館のメンバーによって設置された仮の保管庫です。しかし、展示品の収納は理想的なものではありませんでした。そのため、私たちは、欄干や赤いタブローの柱、祭壇などの部材を慎重に取り外し、元の位置に合わせて縦に並べました。レゴのピースを組み立てるように、すべてをつなぎ合わせて構造を構築しました。当初、いくつかの物品が紛失していたため、混乱期に持ち出された土産物を回収するコミュニティ・キャンペーンが行われました。幸いなことに、地域の人たちは自分たちが持ち出したものを返してくれました。





コミュニティとの共有決定セッションで、私たちはレタブロや祭壇の修復方法について話し合いました。古い写真から判明したオリジナルは、後の白と金色ではなく、赤と金色でした。この教会は当初イエズス会でしたが、イエズス会がフィリピンから追放された後、フランシスコ会となりました。バロック様式と鮮やかな内装色から、私たちは天井の修復も決定し、新しすぎることなく建物を視覚的に引き立てるためにHのタティーナを採用しました。その過程を通じて、地域の人たちから貴重なアドバイスをもらい、地元の人を雇い、彼らがプロジェクトの一員であることを実感できるようにし、彼らの心理的な回復を助けました。特筆すべきは、ジム・バスケスやスペインで修行を積んだ著名な教会美術修復家ガイ・カストディオ氏といった熟練した専門家を起用したことでした。

ガイ・カストディオ氏が若いチームと天井の片側で作業している様子。大工仕事と雑用に長けたジム・バスケス監督も写っています。動物学部門のマリビーを含む地元の専門家たちは、壁や聖廊を飾る貝殻の回収を手伝い、貝殻固有種の代替品を特定しました。フロイラン・ガラビリスとアルフレッド・メノザという2人の地元アーティストも修復作業に参加しました。洗礼堂のビフォー・アフター画像は、修復プロセスを通じて達成された大きな変化を強調しています。

このスライドは、洗礼堂の修復を担当した地元アーティストのフロイラン氏を紹介しています。

修復作業中、祭壇に描くフランシスコ会の聖人の絵について、地元の芸術家アルフレッド・ミノソ氏と少し緊張が走りました。私たちは控えめな外観を目指したのですが、彼は教会の演劇性を信じていて、足の爪までピンクに塗っていました。しかし、私たちは博物館的な枠組みを使わないことに決め、教会は共同体のものであることを強調しました。聖人の彫像はこのアプローチを反映しています。地域住民との定期的なミーティングでは、進捗状況について常に情報を得ることができ、彼らは積極的に参加し、ハードハットをかぶり、深い関与を感じていました。災害からの復興は、単に建造物を再建するだけでなく、コミュニティが尊敬する遺産の修復に貢献できるようにすることでもありました。私たちのチームは、支援を希望する地域住民のためにワークショップを開き、プロセスを検証し、進捗状況を評価しました。中にはパネル画を描くのを手伝った人もいました。カトリック教会の「修復された教会は新しい教会である」という考え方に従った教会の献堂式は、2019年12月8日の無原罪の御宿りの日に行われ、前フィリピン教皇領ヌンシオのガブリエル・ジョルダノ・カッチャ神父が出席し、最後の公式行事となりました。

2019年12月8日、無原罪の聖母の日の献堂式には、前フィリピン教皇領ヌンシオのガブリエル・ジョルダノ・カッチャ神父が出席しました。この行事が彼の最後の公式行事となり、地域の人々は教会の修復が成功したことに大きな誇りを抱いていました。

世界的な数々の課題に直面する中で、グローバルなネットワーキングは極めて重要になっています。特に、紛争資金や武器購入のために戦争中に古美術品が不正に取引されていることを考えると、世界中でパートナーシップを確立する必要性は明らかです。

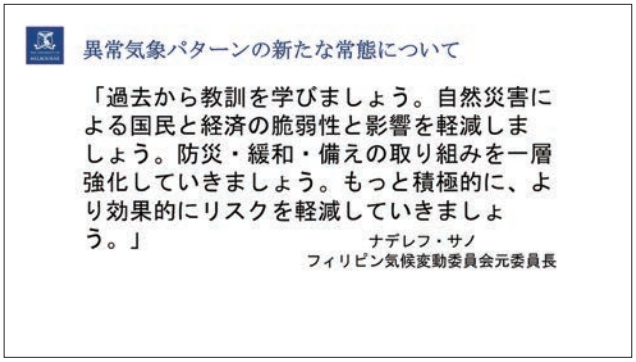
先に、2月24日のロシア侵攻から100日以上経った後に撮影された写真を紹介しながら、ウクライナとの連帯について述べました。ウクライナ国立文化財研究所の「トロツキーとネッツの友」コミュニティは、ドイツのパートナー、特にウクライナ・エイド・アート・センターから資料の小包を持ってきました。これらの資料は、ウクライナの歴史、文化、人物に関するコレクションを保護するためのものでした。

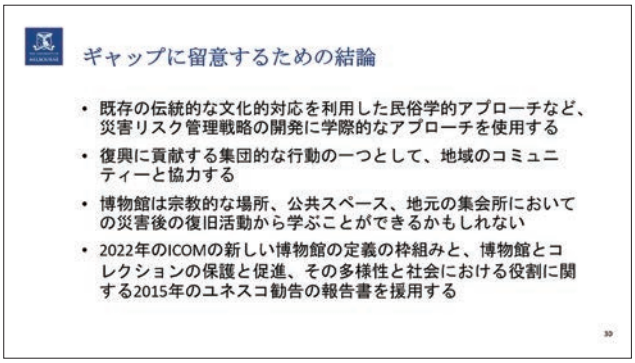


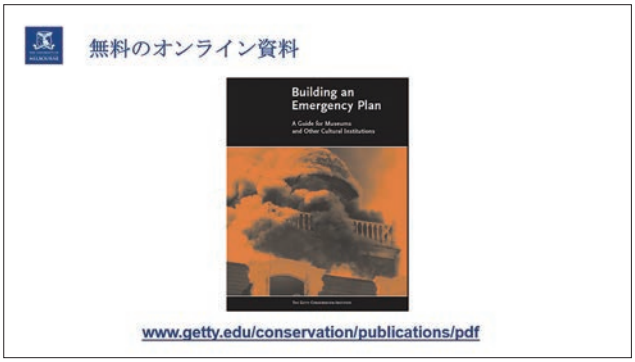




最後に、気候変動に関する国家枠組み戦略の委員からの引用を紹介したいと思います。「過去からの教訓を学び、自然災害の影響に対する国民と経済の脆弱性と暴露を減らし、災害予防、緩和、準備の取り組みを強化し、リスク削減のためにより積極的かつ効果的に行動しよう。」なお、佐野氏はその後、フィリピン政府への不満から気候変動委員会を去り、東南アジアグリーンピースに参加、現在は事務局長を務めています。







結論として、災害リスク管理戦略を策定する際には、学際的なアプローチを採用することが不可欠であり、民族誌学的手法を取り入れることで、被災したコミュニティを巻き込み、復旧・復興に関する意思決定を共同で行うことができます。災害に対する伝統的な文化的対応を活用し、地域コミュニティを集団行動に参加させることは、復興への取り組みに大きく貢献することができます。博物館は、災害後の宗教的な場所、公共空間、地域の集会場における復興経験から教訓を得るべきです。さらに、国連の持続可能な目標への配慮とともに、2022年のICOM新博物館定義と2015年のユネスコ勧告「多様性と社会における役割を通じた博物館とコレクションの保護と促進」の枠組みを活用することが不可欠です。

KTの緊急プランのようなオンライン・リソースは、危機の際の指針を提供する、博物館にとって貴重なツールであり

続けています。

オーストラリアはSignificance 2.0を開発し、緊急時にどの展示物を優先的に避難させるかについて戦略を立てる手助けをしています。

私が国立博物館を去る前に、私たちはASEAN博物館会議の議事録をまとめ、COVID-19のパンデミックによってもたらされたユニークな課題に取り組みました。このパンデミックは予期せぬものでしたが、積極的な反響を呼び、東南アジア地域全体で実施された復興戦略について議論するオンライン会議へと発展しました。

このハンドブックは、もともと中東の紛争で荒廃したシリアの復興活動のために作成されたものです。このハンドブックは古いにもかかわらず、困難な時代に博物館を運営するための貴重な参考資料となっています。

ご清聴ありがとうございました。グイアン教会の机を含め、修復活動に積極的に貢献した若者たちの姿をお見せしたいと思います。皆さんの関心と取り組みに大変感謝しています。







埼玉県立博物館等施設における収蔵資料防災マニュアル策定

黄川田 翔 （日本）
国立文化財機構文化財防災センター

独立行政法人国立文化財機構文化財防災センターの黄川田と申します。本日は埼玉県立博物館等施設における収蔵資料防災マニュアル策定について事例報告させていただきます。



こちらが本日の報告内容です。1日ご参加された皆様はそろそろ疲れもたまってきているかと思いますが、あと15分ほどお付き合いいただければと思います。

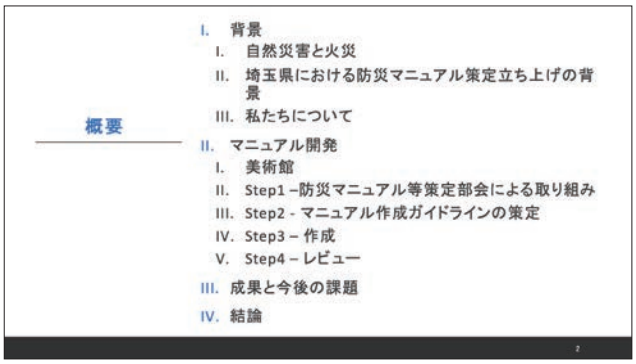
近年、日本においても多数の災害が発生しており、博物館などの文化施設が被害を受ける事例も少なくありません。ここには代表的な災害の事例を挙げています。2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震は、地震の揺れによる被害、そして東日本大震災に関しては、津波による被害が生じています。2019年に発生した台風19号、通称ハギビス、また東日本台風とも呼ばれますけれども、この時には、内水氾濫により川崎市市民ミュージアムが浸水し、多くの収蔵品が被害を受けています。その数週間後には沖縄の首里城跡で火災が発生し、建物や多数の文化財が焼失してしまいました。

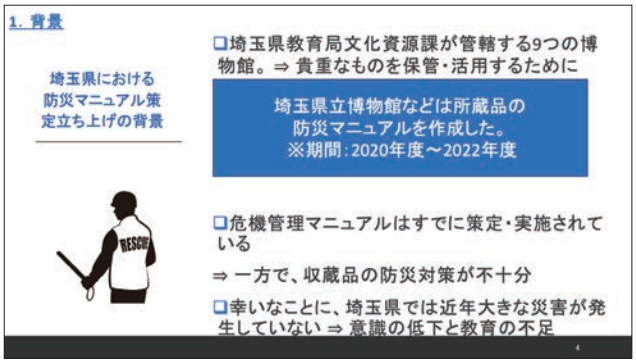
このような状況を背景に、埼玉県では県立博物館などにおける収蔵資料の防災マニュアル策定について検討が行われます。現在、埼玉県教育局文化資源課では、博物館など9つの施設を所管しており、そこでは貴重な県民財産である収蔵資料・文化財が保存・活用されています。かねてより、緊急時の対応を記した危機管理マニュアルなどが整備されていますが、災害時に収蔵資料・コレクションをどのように保護するか、といった具体的なことについては十分な備えができていませんでした。また、幸いにも埼玉県では近年大きな災害を経験していないため、防災意識の低下や防災教育の不足なども懸念されていました。そこで、災害時における収蔵資料の保護に焦点を当てた防災マニュアルを2020年度から2022年度にかけて策定することになりました。

さて、我々の組織についても簡単にご紹介させていただきます。2020年10月、独立行政法人国立文化財機構の本部組織の一つとして、文化財防災センターが設立されました。国立文化財機構は本部のほかに、7つの施設で構成されており、本日の会場になっている東京国立博物館もその施設の一つです。なお、私は文化財防災センターのほかに東京国立博物館の研究員も兼ねており、普段はこちらの施設で勤務しています。

さて、文化財防災センターは、こちらにある5つの事業に主に取り組んでいます。その中でも一番上にございます、地域防災体制の構築という事業は、中核的な事業であり、地方公共団体、特に都道府県の文化財担当部局と緊密に連携しながら、各地域において文化財に関する防災体制の構築、防災対策の強化を当センターでは支援しています。そのため、今回県立博物館等施設の収蔵資料防災マニュアルを策定する際にも、埼玉県の文化財担当である文化資源課より依頼を受けて、マニュアルの検証作業に参加することになりました。

それではマニュアルの策定プロセスについてご紹介します。今回、マニュアルを策定した施設は、先ほど申し上げたように9つございます。まずそもそも埼玉県がどこかという話ですけれども、こちらが日本の地図です。埼玉県は東京の真上、上のところに位置する地域となります。一つ目の施設は、県の中心部である大宮にあります、埼玉県立歴







史と民俗の博物館です。埼玉県立歴史と民俗の博物館は埼玉県の中でも中核的な博物館であり、主に歴史資料や民俗資料、美術品などを多く収蔵しています。そしてその近くにあります、埼玉県立近代美術館です。埼玉県立近代美術館は、埼玉ゆかりの作家の作品や、国内外の優れた近現代美術の作品などを多く収蔵しています。そして、上に移りまして、行田市にあります、埼玉県立さきたま史跡の博物館です。こちらの博物館は、国指定特別史跡の埼玉古墳群など、県内の史跡や遺跡に関する考古資料を多数収蔵しています。そして、こちらにありますのが、埼玉県立嵐山史跡の博物館です。史跡、菅谷館跡など、中世の城館跡に関する歴史資料など、様々な資料を収蔵している博物館です。こちらは、埼玉県立自然の博物館です。この博物館は、日本地質学発祥の地と呼ばれる秩父長瀞に位置しており、多数の自然史資料を収蔵しています。そして、こちらは埼玉県立文書館（もんじょかん）です。埼玉県立文書館は、県内の古文書や行政文書などを多く収蔵しているところです。こちらは寄居町にあります埼玉県立川の博物館です。この博物館は河川や水と人々の暮らしの関わりを学べる体験型の博物館として機能しており、それらに関する歴史資料、民俗資料、自然史資料などを収蔵しています。こちらは桶川市にあるさいたま文学館です。さいたま文学館は埼玉ゆかりの文学者や文学作品に関する資料、原稿、貴重書などを収蔵しています。そしてこのマップには記載されていませんが、この他に熊谷市に埼玉県文化財収蔵施設という施設もあり、こちらには発掘調査により出土した埋蔵文化財などが多く収蔵されています。以上の施設でマニュアルが今回策定されました。

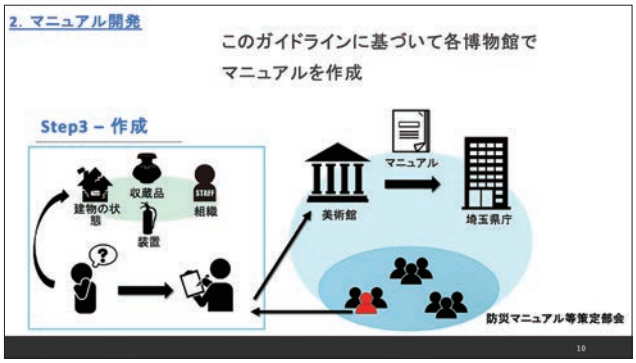
それでは、具体的な策定プロセスをご紹介します。はじめに、各館の学芸員を構成員とする防災マニュアル等策定部会が2020年度に設置されます。この部会では、埼玉県文化資源課も含めて協議を重ねながら、各館が抱える課題やマニュアルをどのように策定すべきかといったこと、あとはその方針などが検討されています。なお、この部会のメンバーが各博物館において、今回のマニュアルを策定する担当者となっています。

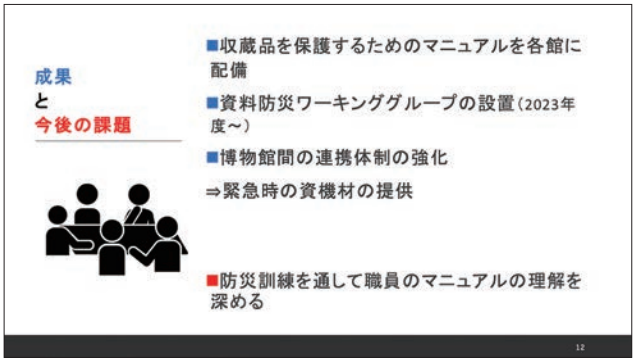
部会での議論をもとに、埼玉県文化資源課が中心となり、マニュアル策定の指針となるガイドラインがまずはじめに策定され、部会を通じて各博物館に共有されました。ガイドライン策定時には、私も助言指導で協力しています。このガイドラインは、火災、地震、風水害を主な対象として、防災・事前の備え、発災、そして復旧の各フェーズにおいて必要とされる記載項目を挙げています。また、それらの項目に関して、具体的な対応例や留意点などをこのガイドラインでは示しています。例えば、過去に発生した被害箇所の把握が記載項目として挙げられていまして、それに対して過去の被災状況の記録が保管整理されているか、といった留意点がガイドラインに記されています。

そして、先ほど作ったガイドラインに基づきながら、部会メンバーである各博物館の担当者がマニュアルの素案を作成することになります。具体的かつ実現可能な方法をマニュアルに記載するためにいつ誰が何をどうやって対応するのかということが各博物館で検討されました。その他にも、各博物館にどのような収蔵品があり、緊急時にはどのようにトリアージを考えるべきなのか、そして組織体制はどうなっているのか、またどのような設備があるのか、建物の状況はどうなっているかといった各博物館の環境や条件など









がマニュアル作成の際に考慮されています。

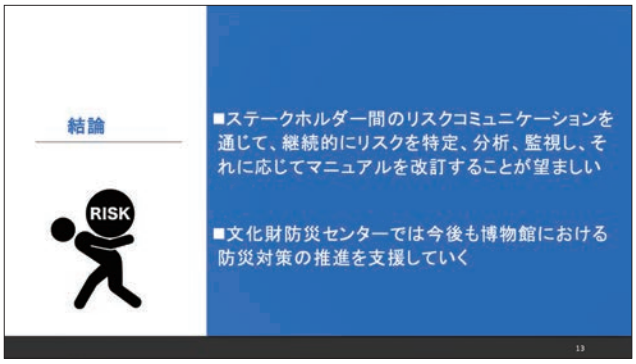
作成されたマニュアルの素案は、埼玉県文化資源課を通じて、文化財防災センターと埼玉県危機管理防災部消防課に共有され、検証作業が行われました。検証作業では、マニュアルの構成や記載事項の確認だけではなく、実際に博物館の展示室、収蔵庫、機械室などを見ながら、マニュアルに記載された対応が可能か、あるいは他に問題点がないか、といったことを確認しています。この検証作業を踏まえて、適宜マニュアルの修正が行われています。こちらの写真は、埼玉県立川の博物館で検証作業を行ったときのものです。この博物館は、2019年の東日本台風、台風ハギビスの際に、川が増水したことにより、屋外展示物などが被害を受けています。また、展示物以外にも、この博物館には、子どもが遊びながら川について学ぶことができる遊具、アトラクションなどもありますので、そういった設備や機材をどのように守るのか、ということも考えなければなりません。こちらの博物館は、河川敷・リバーバンクに面した博物館ですので、今後も水害対策については強化していかなければならない施設となっています。

このように9つの施設において、収蔵資料防災マニュアルが策定されました。収蔵品に対する防災対策の強化として、マニュアルの策定は一定の効果があると考えられます。2022年度までにマニュアルの策定が完了した後、前述の防災マニュアル等策定部会は解散しましたが、今年度から新たに資料防災ワーキンググループが立ち上がりました。このワーキンググループにも各県立博物館の担当者が参加しているので、今後も継続的に収蔵資料に対する防災対策の強化が図られていく予定です。この他にも、事業の成果として、県立博物館同士の横のつながりが強化されたことが挙げられます。緊急時には、埼玉県文化資源課を介して、災害対応に必要な資機材の提供・相互利用ができる体制が整いました。一方、課題として、策定されたマニュアルの実効性が確保できるのかという点が懸念されます。そのため、各博物館で防災訓練を徹底し、マニュアルに対する職員の理解度を深めていく必要があります。

本報告のまとめに移りますが、これまで申し上げたように、埼玉県では、県の文化財担当部局である埼玉県文化資源課が中心となり、県立博物館の職員と協力しながら、収蔵資料を対象とした防災マニュアルが今回作られました。そして、我々文化財防災センターは、依頼を受けて、マニュアルの検証作業に参加、協力しました。今回このマニュアル策定事業に関わって感じたこととしては、やはり各博物館が主体的にリスクマネジメントに取り組むことの重要性です。建物や設備は老朽化し、場合によっては改修作業などが行われていきます。収蔵資料の増加に伴い、収蔵庫や展示室の状況は変化していく可能性があります。また、組織体制の変化や職員の入れ替わりなどもあります。マニュアル策定は完了しましたが、リスクを継続的に特定、分析、監視し、職員や関係者がリスクコミュニケーションを

取りながら、適切にマニュアルを改定していくことが今後求められます。埼玉県のように、県立博物館が一斉に資料防災に特化したマニュアルを策定するという事例は、日本国内でも珍しい取り組みかと思います。今後も文化財防災センターでは、各都道府県と連携しながら、このような博物館の防災の取り組みを支援していきたいと考えております。また、本日ご参加いただいているような国内外の皆様とも、博物館の防災対策に関して、今後情報共有できることを期待しています。

以上で、簡単ですが発表を終わります。本発表にご協力いただきました埼玉県文化資源課の皆様に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。





セキュリティ教育―
博物館のリスク防止能力を強化する効果的な方法

李政育　（中国）
河南博物院

本日は、博物館の安全に関連するいくつかの事項について話し合います。皆さんは豊富な仕事経験を持っており、博物館の安全に関する3つの重要な側面を理解しているはずです。



最初の側面は、博物館の物理的な構造に関連する、安全で頑丈な建物の必要性です。

2番目の側面は、安全管理のためのシステムを持っていることです。

3番目の側面は、今日議論したいことですが、安全担当者または博物館の専門家の訓練と教育です。

博物館の安全トレーニングに関しては、包括的な内容、正しい作業方法の採用、教育とトレーニングの目標を明確に定義するという3つの側面からアプローチするべきだと考えています。

博物館の安全審査には複雑な仕事と内容が含まれます。まず第一に、博物館が直面する安全リスクを理解する必要があります。同時に、博物館内の各ポジションの安全責任をカテゴリー分けする必要があります。

これら2つのタスクを完了した後、トレーニングの具体的な内容を明確に定義し、ターゲットを絞ったトレーニング内容を確保できます。

全体的に、安全教育とトレーニングの内容は主に3つの主要な部分に分けることができます。第一部は安全管理のシステムとワークフローに関するものです。第二部は基本的な手順に関する構造化された合理的な内容を含みます。第三部は実践的なケース、演習、および実地訓練に焦点を当てます。

トレーニング方法に関して、私は2つの経験があります。一つ目は分類されたトレーニングの方法です。二つ目は、消防や警察組織の専門家が内部スタッフをトレーニングする必要性を強調しています。





博物館内の各部門とポジションに対して具体的な内容と計画をカテゴリー分けする必要があります。

例えば、文化財に関与する労働者、管理者、または文化財保存を担当する技術者は、一般的なタスクや専門の安全チームに関与する者とは異なるトレーニング内容と計画が必要です。

さらに、私たちのトレーニングや演習は特定の年数に固定されず、繰り返し行う必要があります。単純なプロセスの繰り返しは、私たちの熟練度を向上させます。

「3分の緊急訓練」は主に中国の消防管理の中での1分と3分の緊急要件に関与しています。これは、1分以内に反応し、専門の安全チームは3分以内に緊急事態に対処するために現場に到着しなければならないという意味です。したがって、これを3分の緊急要件と呼んでいます。

「3分の緊急訓練」の方法はシンプルですが非常に効果的であり、私たちのチームの熟練度を継続的に向上させます。





同時に、年に2～3回、専門の消防チームとの共同大規模な活動を組織する必要があります。

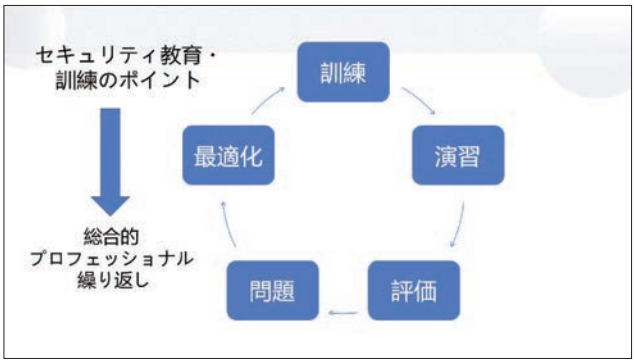
私たちの日常のトレーニングと教育は長期間続ける必要があり、包括性、専門性、および初期の進捗という3つのキーポイントまたはキーワードがあります。





トレーニングと演習を通じて、評価に続いて、スキルや知識などのトレーニング内容の問題を特定し、計画を最適化します。最適化後、トレーニングプロセスを繰り返します。

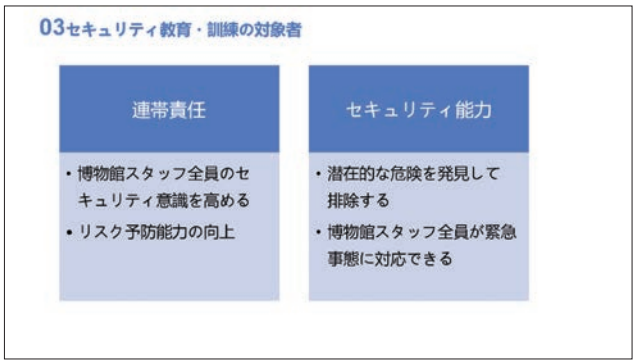
私たちのトレーニングには明確な要件と目標があります。当博物館の目標は、各スタッフの安全意識を高め、全体的なリスク予防能力を向上させることであり、各従業員が安全上の危険を特定して是正措置を講じる能力と、緊急事態に対処する能力という2つの能力を持つことを期待しています。

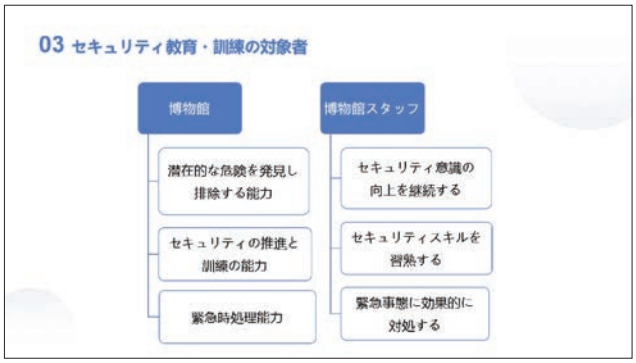


サービスセンターでのセキュリティトレーニングの目標は、予防と調査、トレーニングの推進、および緊急事態に対処する能力を身に付けることです。

時間の制約があるため、このプロジェクトについての私

の考えをここまでしか共有することしかできません。ありがとうございました。








オンラインマップの作成と活用による文化遺産防災体制の整備に関する研究

蝦名 裕一／目時 和哉 （日本）
東北大学災害科学国際研究所／岩手県立博物館

はじめに

東北大学災害科学国際研究所の蝦名裕一です。私は歴史学の研究者で、日本の江戸時代の歴史のほか、災害発生時における古文書の保全などを専門的に研究しています。今回の報告は、自然災害が発生した際、歴史資料をはじめとする文化遺産を保全するための手法として、文化遺産防災マップを活用した文化遺産の保全活動についてお話しいたします。報告は、私と岩手県立博物館の目時さんでおこないます。まず私からは、2011年の東日本大震災における文化遺産レスキュー活動の体験と、そこから得た文化遺産防災マップの着想について述べていきます。

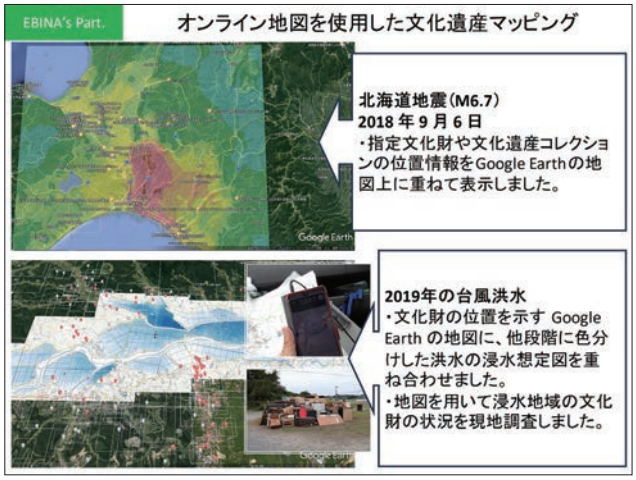


1. 2011年の東日本大震災における歴史資料レスキューと津波浸水マップ

私が歴史資料の保全活動に参加したのは、2003年に発生した宮城県北部連続地震がきっかけでした。当時、東北大の歴史研究者をはじめ、宮城県の歴史学や文化財の関係者が多数参加して、被災地の古文書の整理や撮影といった活動を続けていました。この活動の参画者が中心となり、後にNPO法人宮城歴史資料保全ネットワークが結成され、2011年の時点で、私はこのNPO法人の事務局を努めていました。3月11日、東日本大震災が発生した際、私は東北大学の中に居りましたが、地震により研究室は停電し、階段も一部崩落して危険な状態であったため、私たちは歴史資料の所蔵者のデータが入ったパソコンなどを運び出し、別棟の資料室に仮設の事務局を設置しました。そこを拠点に、東日本大震災で被災した歴史資料のレスキュー活動に向けた準備をはじめました。

東日本大震災では東北地方の沿岸部で甚大な津波被害が発生し、被災地では長期間にわたって被災者の救助活動やインフラの復旧作業がおこなわれていました。また、ガソリン不足が続いたため、私たちは被災地に赴くことができませんでした。そうした中で、国土地理院が被災地の航空写真をインターネットで公開していることに気づきました。当時は、まだ津波浸水のマップなどは作成されていなかったので、この航空写真をもとに、グラフィックソフトを用いて地図に津波の浸水範囲を書き込み、独自に津波浸水マップを作成しました。この津波浸水マップと、それまでに調査した歴史資料の所在データを突き合わせて、被災した可能性の高い歴史資料について、そのレスキュー方法や現地に赴く経路について協議しました。実際に歴史資料のレスキューを開始できたのは4月に入ってからですので、約1ヶ月は直接的な歴史資料のレスキュー活動はできませんでした。しかし、それまでに津波浸水マップを使ってロジスティクスを考案していたことで、実際のレスキューをスムーズに実施することができました。これにより、私たちは災害時にオンラインマップを活用して文化遺産の所在情報を把握することの重要性を認識したのです。







2.
文化遺産防災マップの構築

その後、大規模な自然災害が発生するたび、文化遺産の所在情報と災害情報の重ね合わせの方法について研究を続けました。2018年の北海道胆振東部地震では、Google Earthを使用して指定文化財の位置と推定震度分布図を重ね合わせて、被災した可能性の高い文化財の位置を推測しました。また、2019年には東日本の広範囲で台風による水害が発生しました。この時は、各地の文化財の位置と水害による浸水範囲をGoogle Earthで重ね合わせてマップを作成し、各地の文化財関係者とデータを共有しました。また、宮城県内の水害被災地における歴史資料の被災状況について、マップにもとづきながら巡検調査を実施しました。

2021年と2022年に連続して、福島県沖を震源としたマグニチュード7を超える地震が発生し、宮城県南部と福島県北部の沿岸地域で大きな被害がありました。この時は、文化遺産防災マップを防災科学技術研究所で開発されたeコミマップをプラットフォームとして作成し、地震の推定震度分布と被災地域の文化財の位置情報を重ね合わせました。その情報は、宮城県と福島県で歴史資料保全に関わる人々に共有され、オンライン会議でマップを共有しながらレスキューの計画を議論しました。さらにマップをもとにした文化遺産の被災状況について巡回調査を実施しました。

これらの災害の経験をもとに、災害時における文化遺産防災マップの役割について整理してみましょう。災害が発生した際、被災地の内部と外部では直面する課題が異なります。まず被災地の内部では、災害による直接的な被害をこうむっており、人命救助や生活の復旧を最優先にしなければなりません。文化遺産の保全に関わる学芸員たちも被災していますから、それぞれの自治体で実施する被災地対応が最優先課題になります。それゆえ、被災地の外からは、被災地が落ち着くまで直接接触することを極力避けるべきです。

一方、現在は様々な災害情報が発信されているので、これらの情報を集約することで、被災地の実態がある程度把握できます。被災地の外部で文化遺産防災マップの作成を進めることで、文化遺産のレスキュー活動に向けた支援物資や被災地へのボランティアのコーディネートをすることが可能になります。災害時の文化遺産レスキューが始動するまで、被災地の内部では復旧に専念し、被災地の外では情報の整理と準備をすすめることで、迅速にレスキューを開始することができます。

このように、災害時の文化遺産レスキューにおいては、被災地の内と外で効果的に連携することが重要であり、文化遺産防災マップはそのための効果的なツールといえます。特に、最近普及したオンライン会議ツールを文化遺産防災マップと併用すれば、より迅速に被災地の内部と外部の効果的な連携体制をつくることができるようになります。



3.
東日本大震災から見た文化遺産を対象とした地域防災上の課題

岩手県立博物館の目時和哉と申します。本節からは、東北大学で生み出された文化遺産防災マップのコンセプトに学びながら、岩手県がその実装に取り組む中で見えてきた可能性と課題について述べてまいります。



岩手県は東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた県の一つであり、やはりその経験が岩手県版文化遺産防災マップを作成するに至った大きな動機となっています。

私は学芸員として現在の職場で働き始めた最初の年に東日本大震災を経験にすることになりました。駆け出しの私はもちろんですが、当時の岩手県の文化財関係者の中には、広域にまたがって文化遺産が甚大な被害を受けるという事態に対処した経験を持つ者は皆無といっていい状況であったかと思います。

被災した博物館や文化遺産の救援活動に従事する中で、私たちは3つの壁に直面することになりました。

一つ目は、何を救うべきなのか。すなわち、救援対象となり得る文化遺産がどこにどれだけあるのか。

二つ目は誰がどのような体制で救援活動を行うべきか。

三つ目はどのようにして地震や津波で被災した文化遺産を再生させることができるのか、というものです。

2011年3月11日以降、私たちはこれらのいずれについても十分なノウハウを持ち合わせないまま、手探りで救援活動に当たっていったということになります。

国内外からの支援に後押しされ、岩手県沿岸部も復興が相当に進展し、既に次なる災害に備えるというフェーズに移行しつつあります。先に挙げた3つの課題の内、「誰が」、と「どのようにして」という点については、東日本大震災を経て大きな前進が見られました。

まず国立文化財機構文化財防災センターという恒常的な専門機関が立ち上げられたほか、岩手県では県内の博物館等が有事の際にどのように連携して事態に当たるべきかというマニュアルが整備されました。また、特に海水で損傷した文化遺産に対する処置法に関する方法論の構築が進んだことは、東日本大震災後の救援活動の成果の一つといえます。

しかしながら、次に同じような事態が起きた際に、私たちは何を救わなければならないのかという点、すなわち県内の文化遺産の情報共有については震災の前後でそれほど大きく変化していないのではないかというのが、文化財行政に携わる者としての率直な印象であり、特に次なる災害を意識した際、そこに大きな危機感を抱いておりました。

そのような時に前節までに述べられた、東北大学における先駆的な事例の存在を知り、そのノウハウを共有していただくとともに、財源的な面では文化庁によるInnovate MUSEUM事業の補助を受けることで、2022年度に岩手県バージョンの文化遺産防災マップの整備に着手するはこびとなりました。



4.
岩手県版文化遺産防災マップの作成

66頁右下の図が「岩手県版文化遺産防災マップ」のサンプル画面です。地図上に赤や黄色で塗り分けられているのは河川氾濫時に想定される浸水被害の程度をあらわしています。画面右側の方に複数見える丸いアイコンでプロットされているのが各種文化遺産の位置情報です。このようにハザードマップと文化遺産の位置情報を重ね合わせられることが、このマップの大きな特徴です。

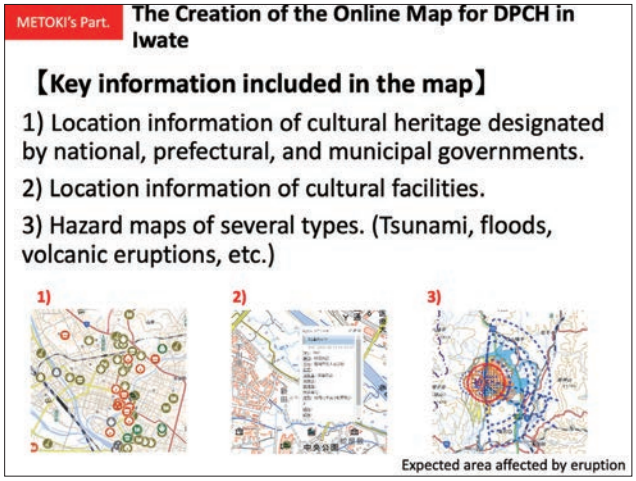
岩手県版の文化遺産防災マップが搭載している主要な情報は次の3種に大別されます

一つ目は国・県・市町村の文化財に指定されている文化遺産の位置情報で、現在は全体の約85%に当たる2400件が登録されています。

二つ目はそれら文化遺産などを収蔵している博物館などの文化施設の位置情報。

三つ目は、文化遺産を脅かす津波・土砂洪水災害・火山噴火といったハザード情報です。

この文化遺産防災マップは2023年4月1日より運用が開始されていますが、そこに至るまでの過程で認められた成果と課題は次のように整理されます。



まずこのようなスキームでオンラインマップを整備することにより、県内の文化財行政に関係する者が広く保全すべき遺産の情報を共有できるようになるとともに、各文化遺産の潜在的な被災リスクについても可視化することができます。今後大規模自然災害が発生した際には、このマップを活用し、より効率的に救援活動を遂行できるものと期待されます。

一方、制作や運用にそれなりにコストがかかることに加え、文化遺産の中に含まれる少なくない数の個人所有物について、情報共有と個人情報の保護をいかに両立していくかという点が大きな課題となりました。

日本の個人情報保護に関する法律では、行政が個人情報を第三者に提供することについて制限がかけられております。そこで、岩手県で防災マップを作る上では、県と33の市町村に、情報の提供者ではなく、制作の主体という位置づけで参画してもらいました。

さらに、住所、すなわち文字情報としての位置情報は非表示とした上、所管する自治体の承諾を得たものに限り正確な位置を示すようにしました。加えて閲覧可能な者は基本的に岩手県内の自治体職員に限定するという形で運用しております。

かくして個人情報保護に最大限配慮しつつ情報共有をはかる枠組みを立ち上げることができましたが、現在のマップが抱える課題の一つとして、搭載されている情報が指定文化財に限られていることから、指定されたものだけを守ればよいという誤解が生じかねないという点が挙げられます。これを解消するために、県内の文化財行政関係者が簡便に情報を追加登録できるアプリケーションなども活用しつつ、充実をはかることに取り組みたいと思います。さらに、より実践的な活用をはかるべく、2023年の11月にこのマップを活用して行う図上訓練を実施します。そしてこれらの取組を通じて関係者がネットワークを築いていくことが、有事における文化遺産防災力の向上につながるものと考えています。

おわりに

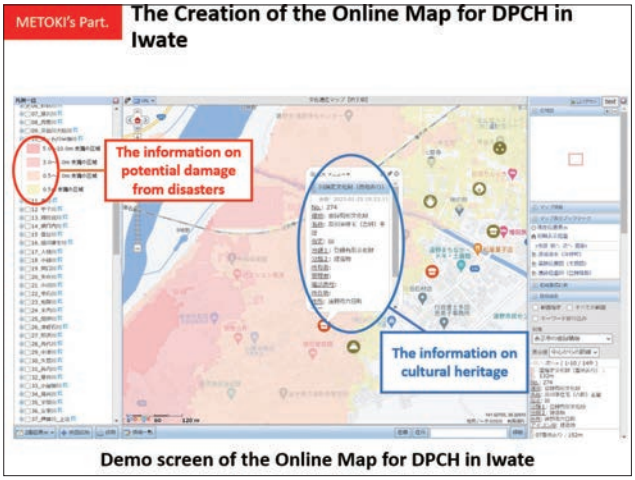
両名の報告の内容をまとめます。

本研究の成果として、東日本大震災における経験に基づき、東北大学においてオンラインマップを活用した文化遺産防災システムが確立され、その後の災害時における試行を経てその有効性を確認できたことがまず挙げられます。

続いて岩手県におけるマップの制作と実装からは、情報共有と個人情報保護を両立しつつ同様のシステムを構築可能であることが確かめられました。

更に今後防災訓練などで活用することにより、本システムは発災時のみならず平時から文化遺産防災に寄与する





ことが期待されます。

結びに当たり、東日本大震災以降、国内外の皆様よりいただいたご支援に改めて感謝申し上げます。皆様に支えられて復興を果たすことができた東北地方だからこそ、同じような文化遺産の大規模被災を繰り返すことがないよう、最大限の努力をする責務があると思いますし、その実現に向けた試行錯誤の中で生まれた本発表のような成果について、これからも皆様と共有してまいりたいと考えております。



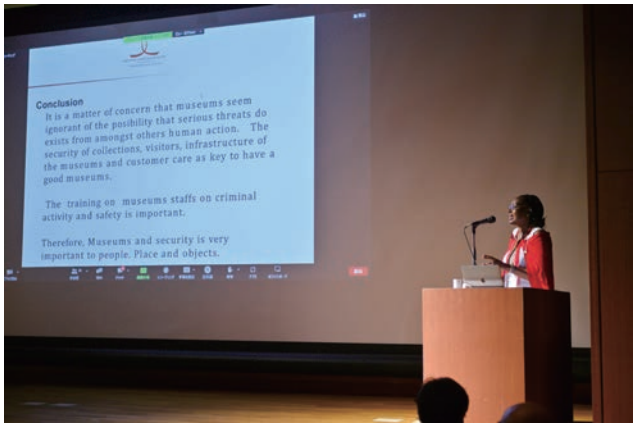
博物館とセキュリティ：ケニア国立博物館のケーススタディ

Joyce KINYANJUI （ケニア）
ケニア国立博物館

概要

本発表では、特にケニア国立博物館をケーススタディとして取り上げ、博物館におけるセキュリティ問題を探求します。

博物館は、文化遺産や歴史的遺物を保護し、解釈する上で極めて重要です。しかし、盗難、破壊行為、文化財の違法取引などの問題にしばしば直面します。本研究の目的は、ケニア国立博物館で実施されているセキュリティ対策を分析することにより、貴重な文化財を保護するために採用されている戦略を理解し、その有効性を評価し、博物館のセキュリティを改善するための提言を行うことです。



はじめに

博物館は、文化、歴史、芸術、自然の様々な側面を探求し、知識を得、熟考する機会を個人に提供します。ケニア国立博物館は、文化、歴史、芸術、自然の4つを基本的な柱として設立されました。そのコレクションは、文化的、芸術的、歴史的、自然的、考古学的な品々を中心に、古代遺物、遺跡、記念碑、研究コレクションなど、300万点を超えています。

研究部門は、植物学、動物学、生態学、民族学、先住民の知識体系、文化の多様性、地質学、石灰学、考古学、古生物学など、多様な分野を研究しています。その研究は、文化史や自然史における注目すべき発見をもたらし、生物学、生態学、動植物や人間の進化における科学的知識に大きく貢献しています。

しかし、人間の行為による博物館への潜在的なリスクが、気づかれなかったり、対処されなかったりすることが懸念されます。予防可能な事件が、ケニアの博物館やその評判、そして警備業界を危険にさらすことになれば、残念なことです。





1.1 背景と意義

博物館のコレクションを保存・保護することは、不正行為、破壊、不測の事故から守る上で極めて重要です。これは、入退室管理、区画管理、内部警備を含む様々な対策を取り入れることによって達成されます。ケニアでは、博物館は、その豊かな歴史、文化、自然資源、芸術を包括する国の多様な遺産を発見するために不可欠です。博物館は、文化交流を促進し、相互理解を育み、協力と平和











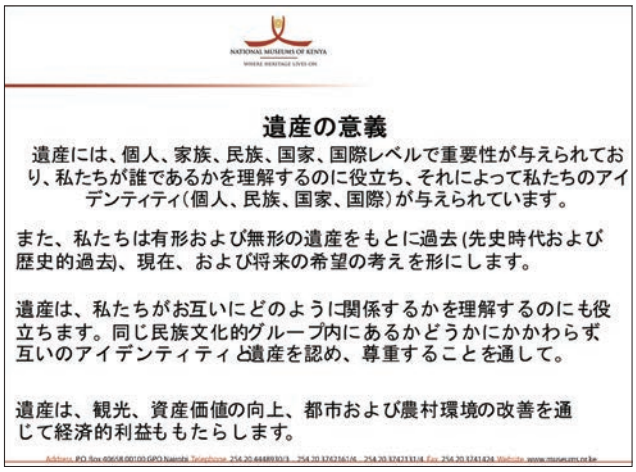
的関係を促進します。ケニア国立博物館（NMK）には、歴史的な銃器、美術品、サイの角、文化的な衣装、象牙、その他の貴重な展示品など、300万点を超える貴重なコレクションが収蔵されています。

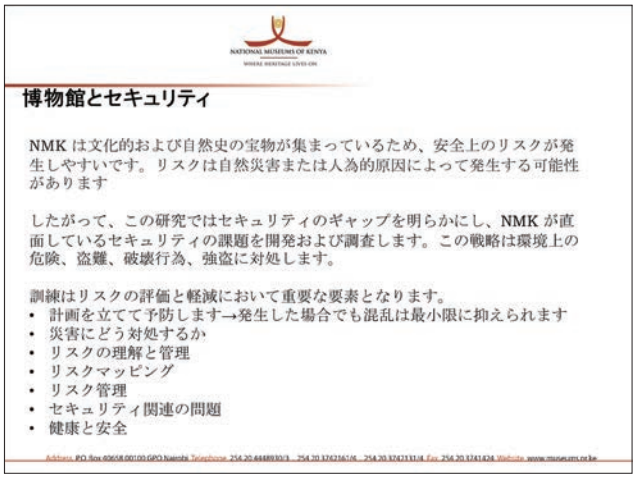
残念なことに、世界中の博物館で、これらのコレクションが犯罪者にとって魅力的であるため、盗難が増加しています。その結果、自然災害や人為的な原因によるセキュリティ上の脅威にさらされやすくなっています。米国では、1980年代から1990年代にかけて、およそ1,800点の芸術品が博物館から盗まれ、その多くがオリジナルの化石やコレクションに関わるものでした。1990年から2010年にかけて、博物館の展示品からサイの角や象牙が狙われ、盗まれる傾向が顕著に見られ、ナイジェリア、ケニア、南アフリカがその被害国となっています。

1.2 研究目的

研究の目的は、関心のあるテーマの根底にある基本的な概念を確立し、重要な研究課題を浮き彫りにすることです。博物館のセキュリティの文脈では、この実践の包括的な概観を提供することが目的です。国際博物館会議（ICOM）は、博物館を、人類の有形・無形の遺産とその環境を取得、保存、研究、伝達、展示することによって、社会の発展に重要な役割を果たす非営利施設と定義しています。これらの施設は一般に公開され、教育、研究、娯楽を目的としています。

博物館セキュリティは、あらゆる状況における収蔵品、施設、人々の安全を守る包括的な概念です。本研究では、博物館内での盗難、破壊行為、事故から収蔵品を守るための対策に焦点を当てます。博物館のセキュリティを定義するために、Keller（2007）[※1] はそれを「博物館保護





のセキュリティの側面」と表現し、入館管理、区画管理、内部セキュリティという3つの重要な要素を挙げています。遺物を展示することがその使命にとって不可欠である博物館において、入館と保護のバランスをとることは困難ですが、それはしばしばセキュリティの要件と相反します。展示物には多くの人が集まるため、犯罪行為の標的になりかねません。

Keller（2007）やICOM（1983）※2 が指摘しているように、残念ながら、美術館のセキュリティ・マネジャーは、従来の方法に固執し、美術館の枠組みの中で活動することができないため、その職務に失敗することが多いわけです。したがって、博物館のセキュリティの複雑さを理解し、来館者、スタッフ、コレクションの安全を確保するために、アクセスと保護のバランスをとる必要性を理解することが極めて重要です。

1.3 方法論

本研究の第一の目的は、既存のギャップを特定しつつ、博物館のセキュリティを強化できる革新的な戦略を調査・開発することです。本研究では、リスク管理、災害管理、セキュリティ管理など、博物館のセキュリティに関連する特定の分野を探求します。セキュリティ管理のセクションでは、予防、準備、緩和、対応、災害リスク軽減など、さまざまな要素を検証します。さらに、博物館における不十分なセキュリティ対策が社会経済的に及ぼす影響を分析し、環境ハザード、盗難、破壊行為、博物館強盗などのリスクを軽減するための実践的な提言を行います。

本研究の目的は、博物館のインフラとコレクションのセキュリティを向上させるために実施可能な、新しく体系的な戦略を特定することです。斬新なセキュリティ戦略の適用は、国立博物館の博物館・遺跡・古美術品・記念碑総局がより効果的かつ効率的に機能することを目的としています。さらに、これらの戦略は政策に付加価値を与え、投資を促進し、脆弱な地域を保護します。さらに、この研究は、博物館のコレクション、建物、環境に対する損害を防ぐ方法についての知識を深めるものです。

目的を達成するために、本研究では、調査やケーススタディを含む質的・量的調査方法を用います。データはケニアの20の博物館、3つの研究部門、モニュメントからアンケートを通じて収集します。最終的には、博物館のセキュリティの現状を洞察し、ギャップを特定し、博物館のセキュリティを強化するための新たな戦略を提案します。

この研究は、博物館セキュリティの分野に大きく貢献するものです。調査結果は博物館セキュリティに関する貴重な洞察を提供し、提言はこの業界の利害関係者にとって有益なものとなるでしょう。この研究の成果は間違いなく、博物館セキュリティを強化し、博物館が所蔵する貴重なコレクションや建物を保護するための、より良い政策や投資につながるでしょう。

ありがとうございました。

※1　Steve Keller　Museum Security Expert
※2　ICOM 1983　General Conference, 13th, London, UK, 1983

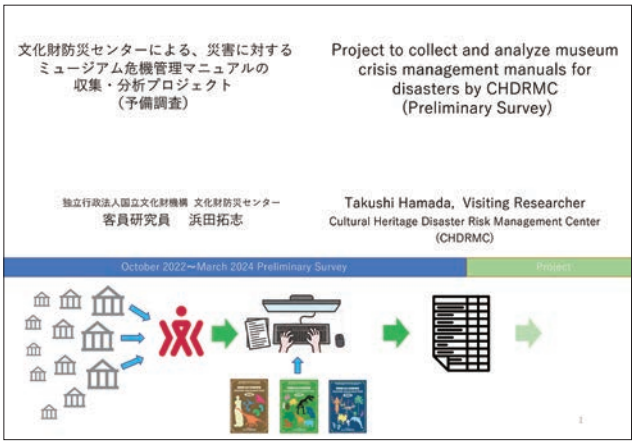




文化財防災センターによる、災害に対するミュージアム危機管理マニュアルの収集・分析プロジェクト（予備調査）

浜田 拓志 （日本）
国立文化財機構文化財防災センター 客員研究員

発言要旨



近年、気候変動に伴う気象災害の激甚化が進んでおり、ミュージアムの被害も増えている。また、これまでに報告されている南海トラフ地震や首都直下地震の被害想定を踏まえると、日本のミュージアムにも甚大な被害が及ぶ可能性が高いと考えられる。【スライド 2】



【スライド 2】

こうした状況のなかで、文化財防災センターはプロジェクトチームを作り、予備調査を進めている。このプロジェクトは、日本国内の多様なミュージアムの危機管理マニュアルを一部収集し、その記載事項を分析・整理することで、災害およびリスクに応じた対応や課題の抽出を目指している。



講演者もそのチームの一員である。

予備調査の主な対象は、地震、風水害、火災、その他自然災害への対応に関する記載事項である。

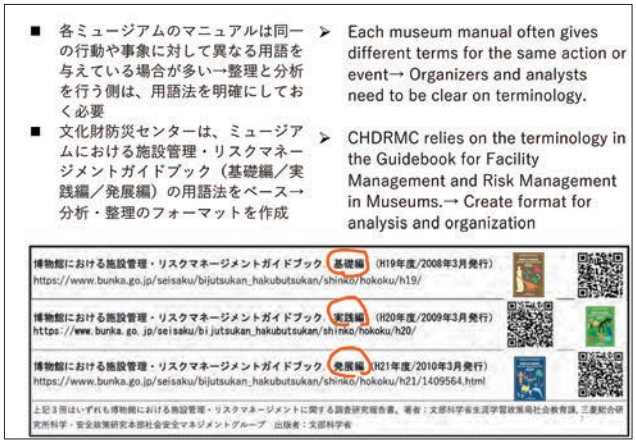
プロジェクトチームは、文化遺産防災ネットワーク推進会議(CHDRM Network Promotion Council)の参画団体に協力を求め、複数のミュージアムからマニュアルの提供を受けた。予備調査の成果や今後のプロジェクトの方針は2024年3月以降に出される予定である。

分析結果は匿名化、一般化される予定である。

各ミュージアムのマニュアルは同一の行動や事象に対して異なる用語を与えている場合も多いので、整理と分析を行う側は、用語法を明確にしておく必要がある。プロジェクトチームは、ミュージアムにおける施設管理・リスクマネージメントガイドブック（基礎編／実践編／発展編）の用語法をベースとしている。このガイドブックは三冊を合計すると200ページ以上で、充実した内容を持っている。ネット上でも公開されているが、しかしあまり知られていないし、索引のようなものがないため記載事項へのアクセスには多少の困難が伴う。【スライド 7・8】

また最後の発展編が発行されたのは2010年、つまり東日本大震災の前の年である。その後のミュージアムの危機管

理マニュアルは、さまざまな災害の経験と取り組みを通じて、より深められ進化しているとわたしたちは推測している。



【スライド 7・8】

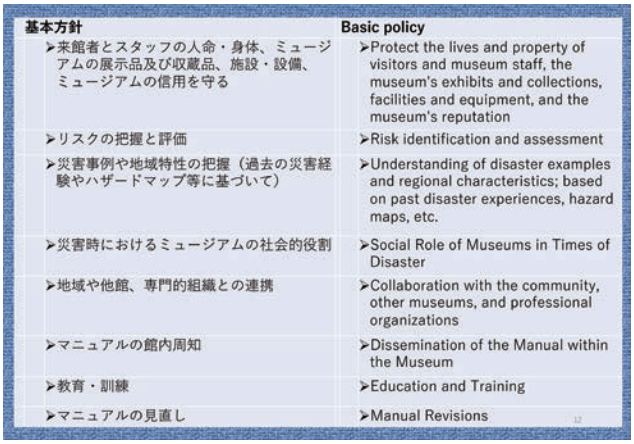
このような理由で、わたしたちは参考となるマニュアルの収集と分析を必要としている。また東日本大震災後に出版されたさまざまな報告書も重要な参考になると考えている。【スライド 9】



【スライド 9】

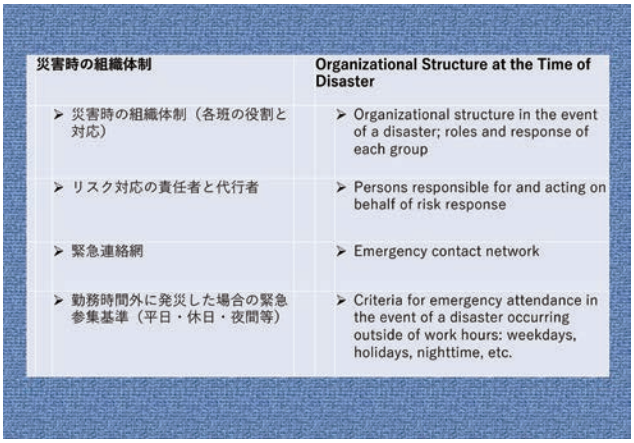
もちろん博物館セキュリティ国際委員会が初版を2010年に出版し、ウェブで公開している『ミュージアムにおける非常事態措置に関するハンドブック　災害レジリエンス』（HANDBOOK ON EMERGENCY PROCEDURES DISASTER RESILIENCE）も重要な参考文献のひとつである。

ミュージアムにおいて、地震や風水害などに対する危機管理マニュアルを改訂したり、新たに策定したりする場合、参考となる記載例があると役に立つ。では、どのような項目を中心に現在分析と整理を進めているか、主要なものだけご紹介する。この大会に参加していらっしゃる皆さんはすでにご存じの項目がほとんどだと思う。



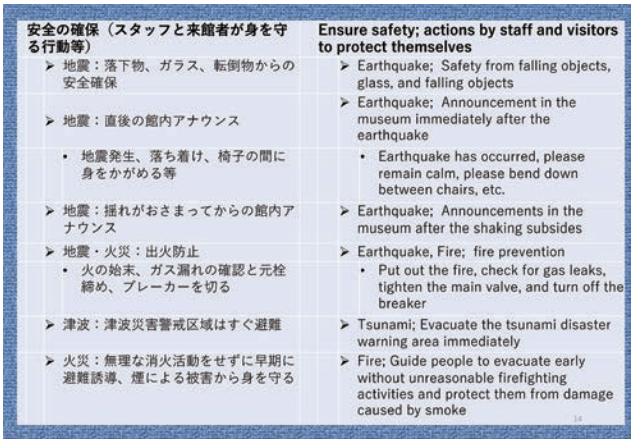
基本方針	Basic policy
➢来館者とスタッフの人命・身体、ミュージアムの展示品及び収蔵品、施設・設備、ミュージアムの信用を守る	➢Protect the lives and property of visitors and museum staff, the museum's exhibits and collections, facilities and equipment, and the museum's reputation
➢リスクの把握と評価	➢Risk identification and assessment
➢災害事例や地域特性の把握（過去の災害経験やハザードマップ等に基づいて）	➢Understanding of disaster examples and regional characteristics; based on past disaster experiences, hazard maps, etc.
➢災害時におけるミュージアムの社会的役割	➢Social Role of Museums in Times of Disaster
➢地域や他館、専門的組織との連携	➢Collaboration with the community, other museums, and professional organizations
➢マニュアルの館内周知	➢Dissemination of the Manual within the Museum
➢教育・訓練	➢Education and Training
➢マニュアルの見直し	➢Manual Revisions

【スライド 12】



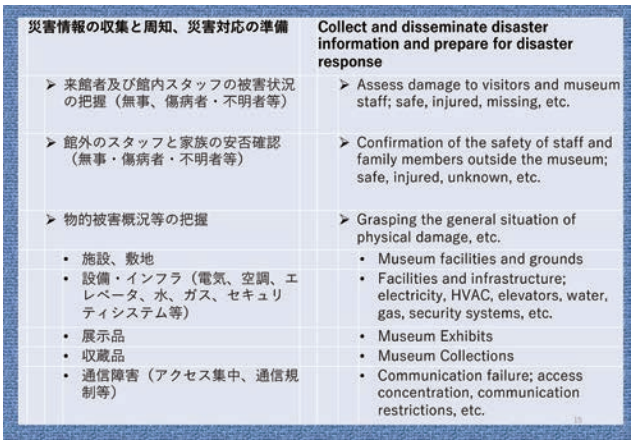
災害時の組織体制	Organizational Structure at the Time of Disaster
➢ 災害時の組織体制（各班の役割と対応）	➢ Organizational structure in the event of a disaster; roles and response of each group
➢ リスク対応の責任者と代行者	➢ Persons responsible for and acting on behalf of risk response
➢ 緊急連絡網	➢ Emergency contact network
➢ 勤務時間外に発災した場合の緊急参集基準（平日・休日・夜間等）	➢ Criteria for emergency attendance in the event of a disaster occurring outside of work hours: weekdays, holidays, nighttime, etc.

【スライド 13】



安全の確保（スタッフと来館者が身を守る行動等）	Ensure safety; actions by staff and visitors to protect themselves
➢ 地震：落下物、ガラス、転倒物からの安全確保	➢ Earthquake; Safety from falling objects, glass, and falling objects
➢ 地震：直後の館内アナウンス	➢ Earthquake; Announcement in the museum immediately after the earthquake
• 地震発生、落ち着け、椅子の間に身をかがめる等	• Earthquake has occurred, please remain calm, please bend down between chairs, etc.
➢ 地震：揺れがおさまってからの館内アナウンス	➢ Earthquake; Announcements in the museum after the shaking subsides
➢ 地震・火災：出火防止	➢ Earthquake, Fire; fire prevention
• 火の始末、ガス漏れの確認と元栓締め、ブレーカーを切る	• Put out the fire, check for gas leaks, tighten the main valve, and turn off the breaker
➢ 津波：津波災害警戒区域はすぐ避難	➢ Tsunami; Evacuate the tsunami disaster warning area immediately
➢ 火災：無理な消火活動をせずに早期に避難誘導、煙による被害から身を守る	➢ Fire; Guide people to evacuate early without unreasonable firefighting activities and protect them from damage caused by smoke

【スライド 14】



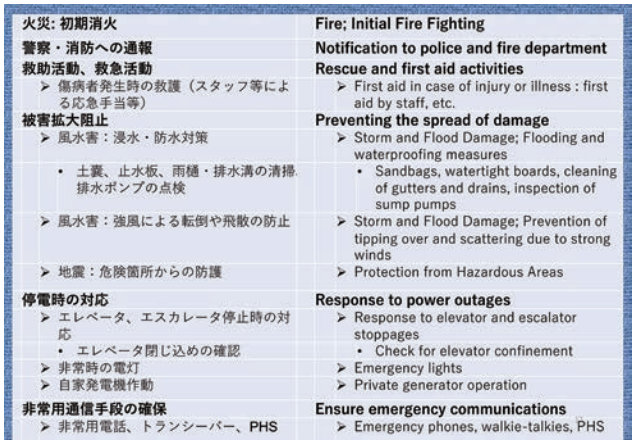
災害情報の収集と周知、災害対応の準備	Collect and disseminate disaster information and prepare for disaster response
➢ 来館者及び館内スタッフの被害状況の把握（無事、傷病者・不明者等）	➢ Assess damage to visitors and museum staff; safe, injured, missing, etc.
➢ 館外のスタッフと家族の安否確認（無事・傷病者・不明者等）	➢ Confirmation of the safety of staff and family members outside the museum; safe, injured, unknown, etc.
➢ 物的被害概況等の把握	➢ Grasping the general situation of physical damage, etc.
• 施設、敷地	• Museum facilities and grounds
• 設備・インフラ（電気、空調、エレベータ、水、ガス、セキュリティシステム等）	• Facilities and infrastructure; electricity, HVAC, elevators, water, gas, security systems, etc.
• 展示品	• Museum Exhibits
• 収蔵品	• Museum Collections
• 通信障害（アクセス集中、通信規制等）	• Communication failure; access concentration, communication restrictions, etc.

【スライド 15】



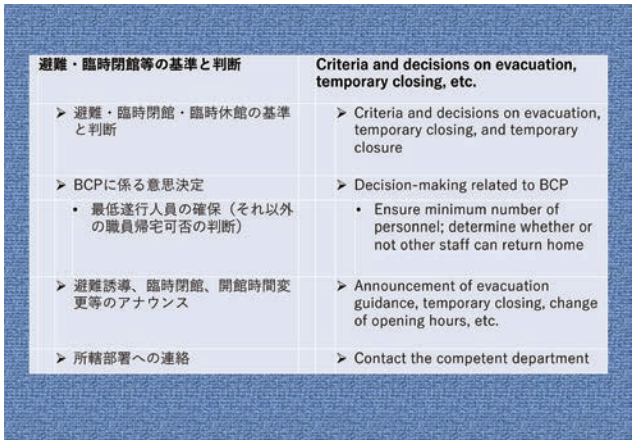
➢ 災害情報の収集	➢ Collection of disaster information
• 近隣の被害概況、交通機関、道路状況	• Damage assessment, transportation, and road conditions in the neighborhood
➢ 来館者への情報の周知	➢ Dissemination of information to visitors
➢ 組織体制の検討（対応人員確保）	➢ Examination of organizational structure; securing corresponding personnel
• （勤務時間外の場合）緊急参集可否の判断	• Outside of working hours; Emergency attendance decision
➢ 会議室（対策室）の確保	➢ Securing a meeting room: countermeasure room
➢ 防災用具の準備と確認	➢ Prepare and check disaster prevention equipment
➢ 所轄部署への連絡	➢ Contact the competent department

【スライド 16】



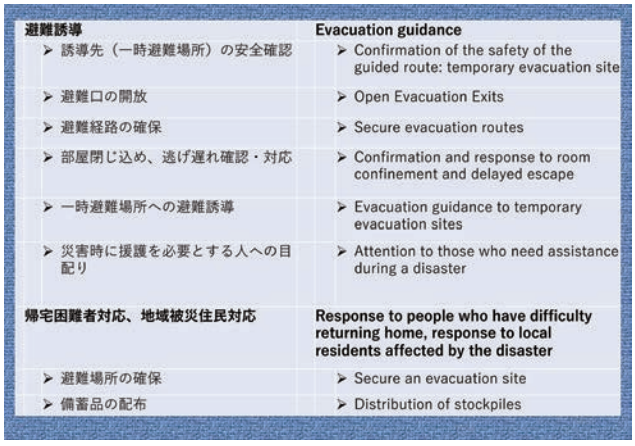
火災: 初期消火	**Fire; Initial Fire Fighting**
警察・消防への通報	**Notification to police and fire department**
救助活動、救急活動	**Rescue and first aid activities**
➢ 傷病者発生時の救護（スタッフ等による応急手当等）	➢ First aid in case of injury or illness : first aid by staff, etc.
被害拡大阻止	**Preventing the spread of damage**
➢ 風水害：浸水・防水対策	➢ Storm and Flood Damage; Flooding and waterproofing measures
• 土嚢、止水板、雨樋・排水溝の清掃排水ポンプの点検	• Sandbags, watertight boards, cleaning of gutters and drains, inspection of sump pumps
➢ 風水害：強風による転倒や飛散の防止	➢ Storm and Flood Damage; Prevention of tipping over and scattering due to strong winds
➢ 地震：危険箇所からの防護	➢ Protection from Hazardous Areas
停電時の対応	**Response to power outages**
➢ エレベータ、エスカレータ停止時の対応	➢ Response to elevator and escalator stoppages
• エレベータ閉じ込めの確認	• Check for elevator confinement
➢ 非常時の電灯	➢ Emergency lights
➢ 自家発電機作動	➢ Private generator operation
非常用通信手段の確保	**Ensure emergency communications**
➢ 非常用電話、トランシーバー、PHS	➢ Emergency phones, walkie-talkies, PHS

【スライド 17】



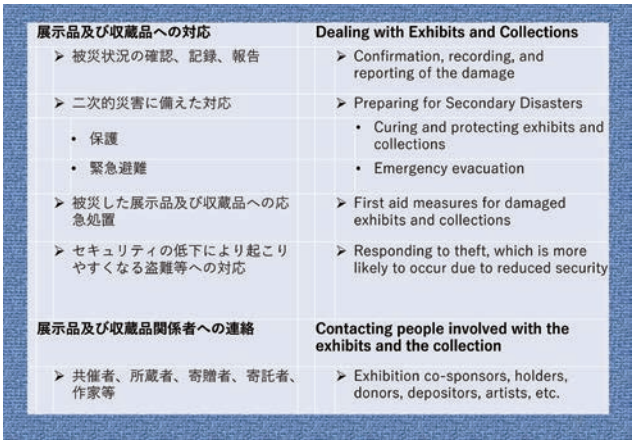
避難・臨時閉館等の基準と判断	**Criteria and decisions on evacuation, temporary closing, etc.**
➢ 避難・臨時閉館・臨時休館の基準と判断	➢ Criteria and decisions on evacuation, temporary closing, and temporary closure
➢ BCPに係る意思決定	➢ Decision-making related to BCP
• 最低遂行人員の確保（それ以外の職員帰宅可否の判断）	• Ensure minimum number of personnel; determine whether or not other staff can return home
➢ 避難誘導、臨時閉館、開館時間変更等のアナウンス	➢ Announcement of evacuation guidance, temporary closing, change of opening hours, etc.
➢ 所轄部署への連絡	➢ Contact the competent department

【スライド 18】



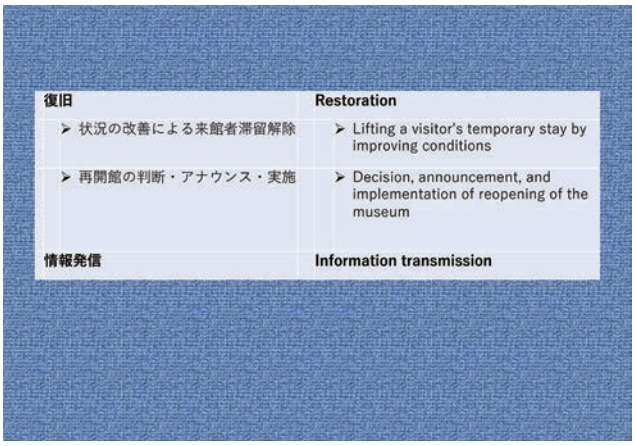
避難誘導	**Evacuation guidance**
➢ 誘導先（一時避難場所）の安全確認	➢ Confirmation of the safety of the guided route: temporary evacuation site
➢ 避難口の開放	➢ Open Evacuation Exits
➢ 避難経路の確保	➢ Secure evacuation routes
➢ 部屋閉じ込め、逃げ遅れ確認・対応	➢ Confirmation and response to room confinement and delayed escape
➢ 一時避難場所への避難誘導	➢ Evacuation guidance to temporary evacuation sites
➢ 災害時に援護を必要とする人への目配り	➢ Attention to those who need assistance during a disaster
帰宅困難者対応、地域被災住民対応	**Response to people who have difficulty returning home, response to local residents affected by the disaster**
➢ 避難場所の確保	➢ Secure an evacuation site
➢ 備蓄品の配布	➢ Distribution of stockpiles

【スライド 19】



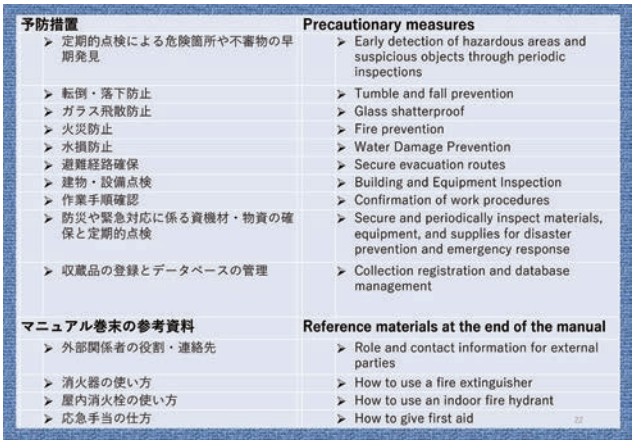
展示品及び収蔵品への対応	**Dealing with Exhibits and Collections**
➢ 被災状況の確認、記録、報告	➢ Confirmation, recording, and reporting of the damage
➢ 二次的災害に備えた対応	➢ Preparing for Secondary Disasters
• 保護	• Curing and protecting exhibits and collections
• 緊急避難	• Emergency evacuation
➢ 被災した展示品及び収蔵品への応急処置	➢ First aid measures for damaged exhibits and collections
➢ セキュリティの低下により起こりやすくなる盗難等への対応	➢ Responding to theft, which is more likely to occur due to reduced security
展示品及び収蔵品関係者への連絡	**Contacting people involved with the exhibits and the collection**
➢ 共催者、所蔵者、寄贈者、寄託者、作家等	➢ Exhibition co-sponsors, holders, donors, depositors, artists, etc.

【スライド 20】



復旧	**Restoration**
➢ 状況の改善による来館者滞留解除	➢ Lifting a visitor's temporary stay by improving conditions
➢ 再開館の判断・アナウンス・実施	➢ Decision, announcement, and implementation of reopening of the museum
情報発信	**Information transmission**

【スライド 21】



予防措置	**Precautionary measures**
➢ 定期的点検による危険箇所や不審物の早期発見	➢ Early detection of hazardous areas and suspicious objects through periodic inspections
➢ 転倒・落下防止	➢ Tumble and fall prevention
➢ ガラス飛散防止	➢ Glass shatterproof
➢ 火災防止	➢ Fire prevention
➢ 水損防止	➢ Water Damage Prevention
➢ 避難経路確保	➢ Secure evacuation routes
➢ 建物・設備点検	➢ Building and Equipment Inspection
➢ 作業手順確認	➢ Confirmation of work procedures
➢ 防災や緊急対応に係る資機材・物資の確保と定期的点検	➢ Secure and periodically inspect materials, equipment, and supplies for disaster prevention and emergency response
➢ 収蔵品の登録とデータベースの管理	➢ Collection registration and database management
マニュアル巻末の参考資料	**Reference materials at the end of the manual**
➢ 外部関係者の役割・連絡先	➢ Role and contact information for external parties
➢ 消火器の使い方	➢ How to use a fire extinguisher
➢ 屋内消火栓の使い方	➢ How to use an indoor fire hydrant
➢ 応急手当の仕方	➢ How to give first aid

【スライド 22】

よく整理された危機管理マニュアルは、職員、ボランティア、セキュリティスタッフ、施設管理会社のスタッフ、テナントスタッフ等すべてのミュージアム関係者に対する防災セキュリティ教育促進の基礎となりうる。このプロジェクトを通じてわたしたちは、優れたマニュアルに学び、その知見を防災セキュリティ教育に生かしたいと考えている。

最後に、ミュージアムセキュリティに関する今回のような国際交流の機会はとても重要であると思う。今後ともよろしくお願いしたい。



進化し続ける博物館：セキュリティ教育がどのように博物館所蔵品の展示、アクセス、保管における新たな方法をサポートできるか

Valentina SABUCCO　（イタリア／英国）
イングランド芸術評議会

私を講演者として招待してくださった組織委員会の皆様に心より感謝いたします。本日ここに来られて大変光栄です。私のプレゼンテーションは、博物館が時間の経過とともにどのように変化しているか、そしてこの進化する性質がセキュリティコンサルタントまたは専門家としてこの分野で行っている私たちの仕事にどのような影響を与えているかに焦点を当てます。私たちはこれまでに何度もこれを見てきたことを知っています。



私たちはこれまでに何度もこれを見てきました。私たちは皆それを心から知っています。ただし、下線を引いた特定の部分があり、それがこのプレゼンテーションに特に関連すると思われます。繰り返しになりますが、博物館が地域社会のメンバーと継続的に対話する必要性が強調されています。これにより、社会のメンバーは知識を楽しみ、反映し、共有し続けることができます。

博物館が新しいトレンドや革新的なアプローチを確立するためにどのように進化しているかを考えるとき、こうしたコミュニティとの関わりが特に重要になります。博物館はコミュニティのメンバーに連絡して、コミュニティの意見やニーズを理解し、効果的に対応できるようにします。たとえば、英国では博物館が社会と関わることがますます一般的になってきています。たとえば、会場の特定部分の再開発や新しい会場の建設を計画する場合、社会のメンバーを巻き込んで彼らの好みを理解し、積極的に参加してもらいます。





かつては、学芸員がどのような種類のオブジェクトを、どのように、どのくらいの期間展示するかを決定していました。現在、こうした決定に対して積極的な発言権を持っているのはコミュニティです。

地域コミュニティとの関わりは、調査、フォーカス・グループ、インタラクティブな活動、非公式なチャット、計画申請など、さまざまな方法を通じて行うことができます。たとえば、英国では、博物館の再開発や新しい建設の提案の段階で、提案が地方自治体に提出されると、人々がコメントやレビューを行うことができるようになります。通常、コミュニティによって提供される情報は、建物や敷地内のスペースのデザイン、レイアウト、使用に影響を与える可能性があります。その結果、建築家やプロジェクトチームは、コミュニティからのフィードバックに合わせて、代替の、時には革新的な建物を設計することがあります。

課題は、私の経験では、これらのプロジェクトではセキュリティが最初から常に考慮されているわけではないということです。場合によっては、補助的な役割を果たし、その後、おそらく建物が完成した後に検討されることもあります。その時点で、プロジェクトの開発全体を通してセキュリティ対策を組み込むのではなく、サイト訪問とセキュリティレビューを実施することがより費用対効果が高い場合に求められます。

これらは、私がこの役職にいる間に最近取り組んだいくつかのケーススタディです。私はこれらをケーススタディと呼んでいますが、例と呼ぶこともできます。この会場にはまだ完成していない要素が含まれています。これは、保管施設、コミュニティのための学習スペース、読書室、保存スタジオを備えた多目的建物です。このレイアウトでは、周囲に沿って大量のガラスが使用されており、コレクションを探索し、空間に参加するように人々を惹きつけることを目的としています。

コミュニティへの参加という観点から見ると、これらの要素はうまく機能し、その目的を果たします。ただし、セキュリティの観点からは、使用されるガラスの種類によっては問題が発生する可能性があります。一部のタイプは簡単に壊れる可能性があり、障壁がないと、たとえば車両が猛スピードで走行し、突き抜けてしまう可能性があります。建物の位置だけでなく、使用されている窓ガラスや警報器の種類を考慮することが重要になります。警察や救急サービスによる迅速な対応が重要な地域にある場合、考慮の欠如は問題となる可能性があります。これらの建物の素晴らしい外観にもかかわらず、孤立した場所にある場合があり、緊急サービスが妥当な時間内に到着することが困難であり、場合によっては15分以上、あるいは45分以上もかかることもあります。

これらは保管施設の2つの例です。2番目の写真では、下部に絵画が周囲に沿って吊り下げられており、全体がガラス張りになっており、コミュニティ地域の人々が中を覗いて、物品がどのように保管されているかを観察することができます。一番上のものは、ガラスの壁に長方形の水色の投影があり、ビデオとして機能します。ビデオが止まると、ガラスが開き、反対側にあるコレクションストアが現れます。このコンセプトはコミュニティを効果的に巻き込み、通常はアクセスできないエリアを探索して見る機会をコミュニティに提供します。ただし、セキュリティの観点からは、前述の理由により課題が生じます。

ガラス張りの使用は英国で普及しており、数年前からそうなっています。保管施設や保存スタジオに限定されず、ギャラリーでも採用されています。これは、敷地内に博物館を備えた考古学遺跡の別の例です。昨日のプレゼンテーションで述べたように、博物館には、溶かされてスクラップとして販売される可能性のある物品が保管されています。下の写真にあるように、平屋建てのギャラリーは周囲に沿って配置されており、ガラスパネルが唯一の境界となっています。ギャラリーにガラスが多用されていることについてプロジェクトマネージャーに話を聞いたところ、中に立つと絵になる印象があり、美しいレイアウトとセッティングになっているとのことでした。ただし、セキュリティの観点から見ると、会場が遠隔地にあるため、事故などが発生した場合に問題が発生する可能性があり、タイムリーな対応が重要になります。

コミュニティ参加の原則に基づいて変化しているのは、コレクションの保管と展示の方法だけではなく、コレクションの巡回方法も変化しています。たとえば、アート・エクスプローラーがテートと協力して企画した来年予定されているイベントは、ユニークなアプローチで巡回展を開催することを目的としていました。従来の巡回展示会では、展示物が会場から別の会場に移動することになりますが、この展示会では、展示物がカスタムメイドのトラックに数週間留まり、通常はそのような展示会にアクセスできないコミュニティ内の特定の都市を巡回することが特徴でした。目標は、人々が普段こうした体験を行わない地域に芸術や文化をもたらすことでした。このプロジェクトには学校とのワークショップが含まれており、地域でこれらの絵画を展示する機会を高く評価するコミュニティから非常に肯定的なフィードバックが得られました。成功したため、このプロジェクトは来年も繰り返される予定です。

セキュリティの観点からは、場所が分かること、中に何が入っているかを把握すること、安全性を確保することが考慮されます。さらに、特に夜間の運転中のドライバーにとって、安全上の懸念が生じます。メディアとの位置情報の共有とその制御には、別の一連の課題が生じます。このプロジェクトは興味深いものでしたが、いくつかの注目すべきセキュリティ上の課題がありました。

明確な答えはありませんが、チームを始めてから私とチームが取り組んできたことについて、いくつかの考えを共有できます。現在、さまざまなガイダンスリソースがオンラインでオープンアクセスで自由に提供されています。今年の初め



に行った調査では、これらのリソースの一部が過去1年間に1,000回以上ダウンロードされ、閲覧されており、博物館の専門家によって使用されていることがわかりました。ただし、これらのリソースの中には最新ではなく、標準への参照が欠けているものもあります。その対応として、私たちはこのコンテンツを見直し、新しいトレンドや博物館が満たそうと努めているニーズ、特にコミュニティとの関わりに関連するニーズに合わせて更新するコンサルタントを任命しました。

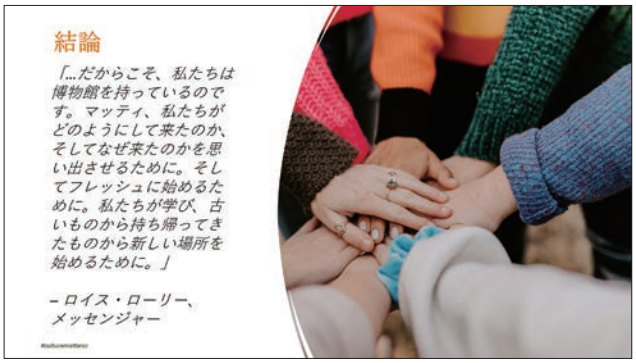
中心的な問題は、セキュリティの専門家として、収蔵品自体のセキュリティを損なうことなく、博物館の活動をどのようにサポートできるかということだと思います。



また、私たちは、国家コレクションから貸し出されている品目や英国政府の補償などの特定の保険でカバーされている品目の安全性に主に焦点を当てた、オンラインで、または対面でのトレーニングやウェビナーも提供しています。また、会場に連絡して助けを求めるオプションも提供しています。当プロジェクトチームでは、それがチームの権限内であるかどうかに応じて、常にカスタマイズされたアドバイスを提供できるわけではありませんが、一般のユーザー向けにチームに連絡するための一般的なセキュリティ・メールを用意しています。具体的な回答を提供できない場合は、サポートを提供できる他の組織や個人を紹介することができます。

さらに、私たちの能力の範囲内で、1対1のコンサルティングアドバイスを提供します。すべての博物館は独自であり、状況、管理チーム、課題、財源が異なります。そのため、私たちは、それぞれの博物館の特定の状況により適切なカスタマイズされたアドバイスを提供するよう努めています。

結論として、私たちはコミュニティ内で進化する優先事項とニーズによって急速に変化する時代に自分たちがいると感じています。博物館もまた、テクノロジーと新しい形式のエンターテイメントの急増の中で課題に直面しています。これらはこうした変化に対応し、人々が楽しみ、研究し、探索する機会を提供することが期待されています。リスクは博物館がこれらの傾向に適応できず、訪問者のエンゲージメントの低下につながる可能性があることにあります。豊かな物語を持った美しいコレクションは存在するかもしれませんが、観客はいません。



セキュリティの専門家として、私たちは博物館部門の同僚が地域生活における役割を変革し、維持しようと努めているのを支援する責任を負っています。ただし、このサポートはセキュリティを犠牲にして実現すべきではありません。私たちは客観性を保ち、不適切な行為を特定し、適切な保護を確保する必要があります。特に革新的なデザインの建物を扱う場合には、革新性が極めて重要となり、従来のものとは異なるかもしれませんが、特定の建物とその目的に沿ったセキュリティ対策が必要となります。

私たちの役割には、リスク、緩和戦略、および可能であれば予防策を博物館部門の同僚と共有することが含まれます。私たちの目標は進歩を妨げるのではなく、博物館を可能にし、建築家、学芸員、管理チームとの会話に私たちの専門知識を提供することであるべきです。

長年にわたって得られた知識と専門知識により、博物館

は課題を克服し、より多くの人々を参加させ、展示中、保管中、または移動中に適切なレベルの保護を維持できるようになります。これは、困難な時期に博物館が繁栄するために不可欠であると私は信じています。ご清聴ありがとうございました。私のプレゼンテーションは英国に焦点を当てましたが、他の国における同様の傾向や経験についてもぜひお聞きしたいと思っています。どうもありがとうございます。



予防・訓練・結果：この1年で私たちは何を学んだか、博物館はどのように変化したか、次に待ち受けるものは何か

Nikolaos DOKALIS　（ドイツ）
ハッソ・プラットナー財団

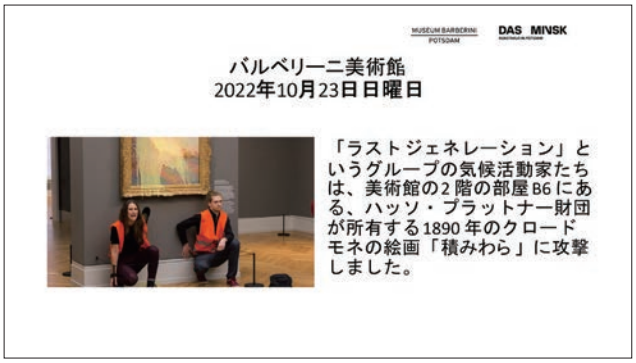


私の名前はニコラオス・ドカリスです。ドイツのポツダムにあるハッソ・プラットナー財団の美術館、バルベリーニ美術館とポツダムにあるアートハウス、DAS MINSK のセキュリティ責任者を務めています。





私が「環境活動家」というトピックについて話すことにしたのは、私たちのコレクションの最も有名な絵画（クロード・モネの「積みわら」、1890年）が昨年10月に環境活動家によって攻撃されたからだけでなく、それ以来、博物館での日常業務やプロセス、そして訪問者の期待が、どれほど変化したかを目の当たりにしたからです。



これらの極秘監視画像からわかるように、少なくとも5人が事件に関与しており、25歳程度の男性3名と女性2名の若者でした。

全員がオンラインでチケットを購入し、ほぼ1時間半前に少人数のグループで建物に入り、ロビーでしばらく時間を過ごし、おそらく手荷物の抜き打ち検査を含む入場手続きを監視していました。当時、展示室への持ち込みはA4以下のバッグが許可されていました。

何度も警備員に目に見えて妨害された後、彼らはなんとか計画を実行し、警備エリアの後ろに進み、絵画に液体状のマッシュポテトを投げ、攻撃をさまざまな角度から撮影しました。

攻撃の後、私たちはセキュリティ基準と対策を振り返り、芸術作品の保護を最適化し、新たな同様の攻撃に備える方法を模索しました（当時、15か国からの融資を受けてシュルレアリスム（超現実主義）に関する特別展も開催しました）。

当面のセキュリティ強化は次のとおりです。

- 服装規制の厳格化（ショールームではコートやバッグの持ち込みは禁止）
- リクエストに応じて透明なビニール袋も利用可能
- ショールーム内では液体物の持ち込みは禁止（乳児の栄養／医学的理由を含む）
- コレクションのすべての絵画をガラスで保護
- 社内のセキュリティスタッフまたは代理店による秘密の監視
- ショールームに人員を追加
- さまざまな脅威への対応とコミュニケーションのための追加訓練

これらとは別に、次のような技術的な部分もありました。

- 監視を強化する
- 手荷物スキャナーを設置する

または/および

- 全身スキャナーを設置する
- 訪問者の身体に隠されたあるあらゆる種類の物質や物体を検出する、歩いて通るセキュリティスキャナーを設置することも推奨されている

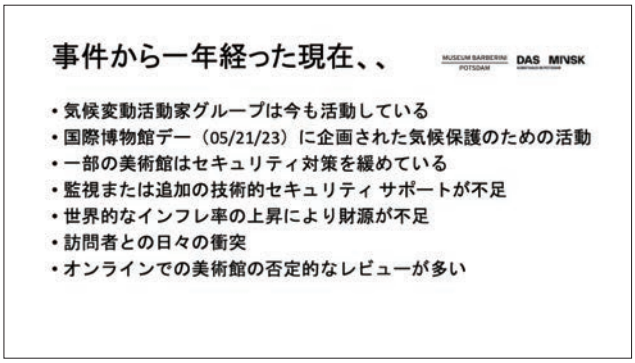


これらの追加のセキュリティ対策がもたらした、またもたらすことのできる結果とリスクは次のとおりです。

- 入り口の長蛇の列、待ち行列/時間管理
- より多くの人員が必要
- 追加の監視を設置するための追加コスト
- セキュリティスタッフを見つけて訓練するための追加のコストと時間の必要性
- 来館者からの否定的なレビュー
- 不信感が日々の争いを引き起こす
- 博物館と来館者の誠実な関係が試されている
- セキュリティ規則の強化は、リラックスした博物館訪問やエンターテイメントに悪影響を及ぼす

あれから一年が経った現在も依然として脅威は存在しています。

- 環境活動家グループは今でも活動している
- 国際博物館デーに企画された気候保護のための部分的な行動も起こされている（05/21/23）
- 一部の美術館はセキュリティ対策を緩めている
- 監視または追加の技術的セキュリティサポートが欠落している
- 世界的なインフレ率の上昇により財源が不足し
- 来館者との毎日の衝突
- オンラインでの美術館の否定的なレビューが多い



昨年10月の事件を振り返って、もし可能であるとしたら、いつモネの絵画への攻撃を回避できたのかを考えてみましょう。

前にもお話ししましたが、展示会に入る前に、グループはロビーに約15分間集まりました。その間、彼らは目立っていました。警備スタッフや来館者サービスは、彼らに話しかけたり、世間話をして、彼らが監視されていることを知らせる合図を与えることもできたでしょう。

その後展示室に行くと、警備員が彼らの周りを歩き回ったり、監視したり、絵の近くに立ったりするたびに、彼らは動揺し、緊張していました。



これらは私たちがすでに手に入れており、使用できるツールです。

- 既存のセキュリティスタッフに投資
- 警備員を増やす
- 来館者のプロファイリングによる芸術作品の保護
- （不審な）来館者と雑談する:彼らは見られているということを理解させる
- ローテーションを通じて警備員の配置を最適化する
- ボディーランゲージと自信による重要なコントロール、すなわち警備員に自信に満ちた存在感でショールームを支配させる

MUSEUM BARBERINI
POTSDAM

DAS MINSK
KUNSTHAUS IN POTSDAM

これは環境活動家たちとの私の経験、私の考えや疑問、仕事で日々取り組んでいるテーマや課題です。

ハッソー・プラットナー財団美術館の名において、貴重なお時間を割いてご清聴いただきまして誠にありがとうございます。











緊急時に人々と美術コレクションの安全を守る

Kim COVENT　（ベルギー）
ヘント地方警察

アジェンダ：

このプレゼンテーションでは、来館者、スタッフ、美術コレクションが外部の脅威に直面した際、美術館がどのように適切に緊急ロックダウンを実行できるかを探ります。私たちは、行動や判断を評価することによって、パニックに陥った、または非協力的な博物館訪問者に対処するための警備スタッフを訓練しています。この訓練では、より楽しくストーリー性を持って理解できるようにアニメの「The Simpsons Family」を例に挙げて説明します。

最後に、2022年の夏に一般来館者、博物館スタッフ、ボランティア、地元警察とともに実施したロックダウン訓練の成果を紹介します。時間が足りない場合は、これらの成果を私のプレゼンテーションでご覧ください。





定義：

ロックダウンは、建物内の人々を外部の脅威から守るために役立ちます。外部のドアはすべて一時的に閉鎖され、建物への出入りが禁止されています。

シナリオ：

- 地域の人々が強制的に建物に進入する目的で博物館に向かって移動しています。おそらくソーシャルメディアでの呼びかけによってでしょう。彼らが武装している可能性もあります。



- すでに美術館内にいて、悪意を持って他人に美術館への入場を呼びかけている人もいます。
- 建物の外には危険物質（気体、液体）があり、博物館から出るのは非常に危険なので、そこにいる全員が屋内に留まらなければなりません。
- 危険な状況が博物館の周囲を包み込み(戦闘、爆撃、自然災害など)、その場にいた全員が屋内に留まらなければなりません。

例：

ヨーロッパ諸国では一般的に、無差別発砲者や（学校）侵入者に遭遇することがないため、その文化圏でのロックダウンに関する知識や専門知識をまとめたものは存在しません。私たちは長年にわたり、いくつかの外部からの脅威の例を発見してきました。

- ブリュッセルのユダヤ博物館での無差別発砲者、2014年

- ブリュッセルのクンストベルクでの激しい抗議活動、2022年
- アムステルダムのミュージアム広場での新型コロナウイルス抗議活動、2021年から2022年
- 都市の路上での気候変動活動
- 博物館内での気候変動活動













懸念事項：

ヘント美術館は、来館者、スタッフ、美術コレクションに対する外部の脅威に対処するため、ヘントの地方警察と協力して緊急ロックダウン手順を策定しました。この手順は避難対策と似ています。しかし

- この手順は、避難対策とは異なり、ベルギーや海外の人々には知られていない
- ベルギーの法律は非常に制限的であり、意思に反して





人々を拘束することはできません

- ベルギーは機関（施設）が非常に高いリスク選好を示すことで知られています
- この緊急ロックダウン手順を成功裏に実行するには、職員訓練が重要な役割を果たします

追加の懸念事項：

緊急事態は、悪意を持った人々の気晴らしとして利用される可能性があります。

緊急メッセージ：

一般の人々には、広報システムを通して次の情報が提供されます。「来館者の皆様、美術館の外部での脅威のため、一時的に扉を閉めなければなりません。安全のため、警備員に従ってください。警察が向かっています。」

職員訓練：

この職員訓練では、より楽しくストーリー性を持って理解できるようにアニメの「The Simpsons Family」を例に挙げて説明します。シンプソンズは、父親のホーマー、母親のマージ、息子のバート、娘のリサ、そして赤ちゃんのマギーという非常に理解しやすく役に立つ5つの原型を持つ家族として広く知られています。

- ホーマー：非協力的で、不従順で、不注意だが、批判的ではありません。このタイプの原型を持つ人とのやり取りでは、緊急性を主張し境界線を設定する必要があります。
- マージ：協力的で、従順で、心配性ですが、批判的です。このタイプの原型を持つ人とのやり取りでは、その人を落ち着かせて慰め、情報を提供し、質問に答える必要があります。
- バート：非協力的で、不従順で、不注意で、批判的です。このタイプの原型を持つ人とのやり取りでは、緊急性を主張し、境界線を設定し、手順に従わない場合の結果を列挙する必要があります。
- リサ：協力的で、従順で、思いやりがありますが、非常に批判的です。このタイプの原型を持つ人とのやり取りでは、情報を提供し、質問に答え、緊急時に協力と支援を求める必要があります。
- マギー：協力的、従順、怖がり、批判的でなく、そして傷つきやすい性格です。このタイプの原型を持つ人とのやり取りでは、その傷つきやすい彼らを落ち着かせて慰め、必要に応じて支援する必要があります。

学んだ教訓：

- これらの原型はステレオタイプではありません。彼らは、あらゆるバックグラウンド、年齢、信念、民族性を持つ、どんな性別の人にもありえます。訓練者は通常、来館者が「ホーマー」または「リサ」になり得ることを十分に理解しています。
- これらのシンプソンズを使った原型は非常に理解しやすいです。200人以上の訓練を受けた中で、シンプソンズについて全く知識がないと公言したのはたった1人だけでした。
- これらの特性は、徹底的な評価をするための十分な時間がない緊急事態でのみ使用されます。これらは、さらなる行動分析には役立ちません。
- 私は今でも、このツールの科学的根拠を確認するために他の人たちと協力しています。

ロックダウン2022年7月13日:

次のスライドは、2022年の夏に定期来館者、博物館スタッフ、ボランティア、地元警察を対象に実施したロックダウン訓練の成果を示しています。

Thank you！



気候危機時のリスクへの対処−SPKタスクフォースのリスク管理

Stefan SIMON　（ドイツ／米国）
ラトーゲン研究所 ベルリン国立美術館

ベルリンで3年前に設立されたリスクマネジメントタスクフォースについて、少し違った角度からお話する機会を与えていただき、ありがとうございます。タスクフォースリスクマネジメントのアイディアは、国立美術館にとって新しいものではありません。10年前か11年前に、私の友人ユルゲン・ハラスと一緒にヨルダンで講義を行ったことを覚えていますが、博物館島へのオイル攻撃などの出来事がきっかけとなり、私たちは始動しました。始める前に、ICMSと特にVernonのアドバイスから多くの利益を得たことも言及しておきたいです。V&Aからのコメントを早い段階で共有してくれたVernonのおかげで、それをそのままコピー&ペーストしてドイツの戦略に使用でき、すでに先進的に見えました。

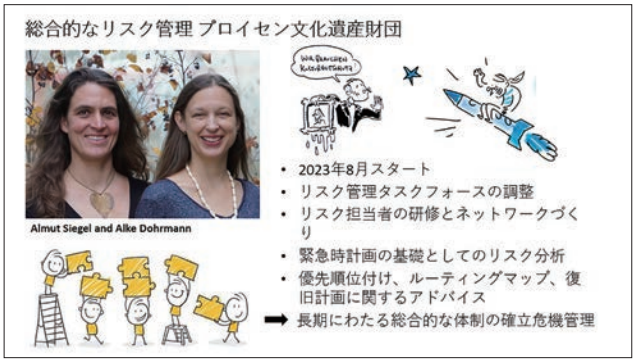


2020年10月3日、その事件はニューヨーク・タイムズを通じてワールドプレスに広まりました。これは「vandalism」（芸術の故意の破壊）です。「Anschlag」や「attack」という言葉には慎重です。79,000点以上のアイテムに液体が吹きかけられ、最初はその液体の正体がわかりませんでした。コロナロックダウン後の初めての営業日、実際には博物館島全体の建物、境界に位置するペルガモン、ペルガモン仮設館、新しい博物館などが影響を受け、私たちは忙しくなりました。その夜を私はとてもよく覚えています。もちろん、最初に警察と会ったのは、液体が博物館全体に広がっていたため、1日か2日後でした。ユルゲンと私のアドバイスにもかかわらず、財団のトップはこの情報を公にしないことを決定し、結局、メディアがそれを11月10日ごろ、約3週間後に自ら公表するまで公にしなかったのです。

同夜、ポツダム・サンスーシ宮殿の保存技術者から電話がかかってきました。ポツダムについては既にお聞きいただいていますね。彼らも非常に似たような出来事を経験しました。日付は誤っていて、実際は9月18日でした。誰かがツィッツィゲンホフに入り、第二次世界大戦後にポツダム条約が署名された部屋に侵入しました。私たちは優秀な保存技術者でもあるため、彼らから提供されたタオルを保存しました。同じ液体を分析しました。

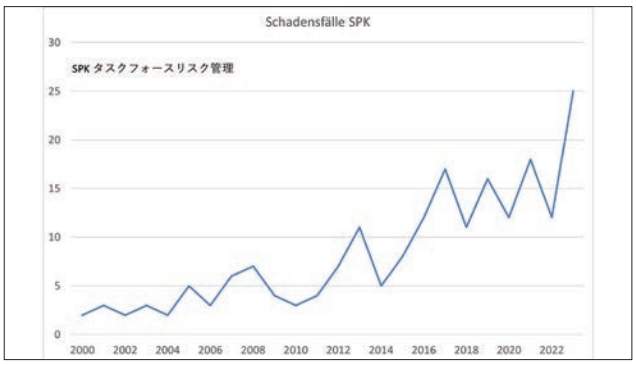
ドイツで3番目の事件もありましたが、これについては触れません。しかし、悪いことには何か良いことがついてくるものです。最終的には、財団の指導者を説得してタスクフォースを設立する手助けとなり、それ以降は私自身も関わることとなりました。

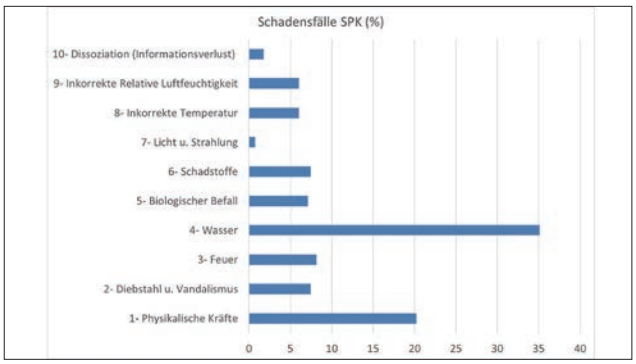
この夏、ようやく人手が集まりました。リスク管理タスクフォースを調整するために、Almut SiegelとAlke Dormannという2人の同僚を雇うことができました。彼らは、博物館のセキュリティガイドラインであるSILKと呼ばれるものに取り組んでいることでドイツではよく知られています。現在、彼らは私たちのコレクションのリスク担当官を訓練し、リスク分析を緊急計画の深い基礎にし、優先順位付けに関するアドバイスを提供し、消防隊用の地図を作成し、復旧計画を策定しようとしています。つまり、本当の考え方は、全体的なリスク管理を確立することであり、それが今日私が話すこと、つ

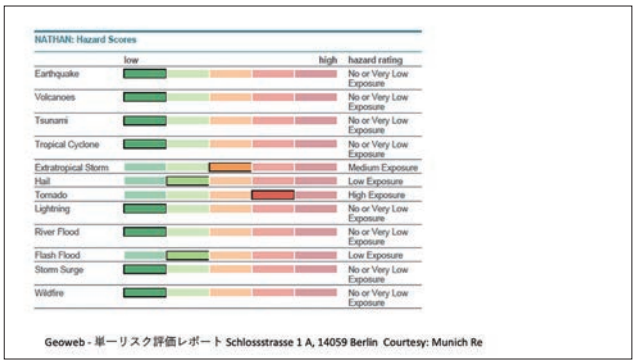




レンブラント・ハルメンソーン・ファン・レイン の作品:
Der Mennonitenprediger Cornelis Claesz Anslo (1592-1646) und seine Frau Aeltje Gerritsdr Schouten,
1641 Gemäldegalerie, 828L, Photo courtesy David Grubbs, Berlin, 23.06.2023







Geoweb - 単一リスク評価レポート Schlossstrasse 1 A, 14059 Berlin Courtesy: Munich Re

まり全体的とは何を意味するのかということです。

現在の写真。私はいつもRobert COMBSの一年を振り返るプレゼンテーションを楽しんでいます。これをモデルとして使用します。6月23日、ベルリン楽器博物館にて。

博物館に水が入ってきたため、緊急事態となりました。30分の降雨で40リットルの水が入りました。この写真は、Gemäldegalerie で撮影されたもので、世界の報道機関にも広まりました。それはわずか30分ほどの雷雨で、17の博物館のうち12近くが影響を受けました。

最も注目に値するのは、私たちが、ご想像のとおり、ウクライナから紙細工の作品を借用していた美術工芸博物館での展示会にも影響を与えたことです。したがって、私は、それが総合的なリスク管理について話すときの主なメッセージであると信じていますが、博物館にとって気候変動活動と気候変動のどちらが悪いのかをゆっくりと自問すべきだと思います。

なぜなら、国立博物館の被害を見ると、被害件数は急激に増加しています。今年、博物館での被害はわずか23、25回です。これにはもちろん3つの理由があります。どれが1番か2番かは指定しませんが、3つの理由です。1番目は、保存技術者がより適格に訓練されており、20年前よりも被害をより適切に記録されている可能性があります。2番目は、建物のメンテナンスが遅れていることです。建物は古いです。私の研究室では、例えば、この雨の際に閉まっている窓から雨が入ってきました。ラドクリフ研究所では閉まった窓から6リットルもの雨が入ってきました。

そして、もちろん、頻度と激しさの増加です。これについてもう少し詳しくお話しします。ドイツの悪天候は、おそらく世界中どこでも、ただテレビをつけてニュースを聞くだけで分かります。昨日のプレゼンテーションでも既に10の劣化の段階が示されていました。私たちはこれらの要因に被害件数を関連付けることができ、水が第一の要因であり、物理的な損傷と物理的な力が第二の要因であることは非常に明らかです。また、盗難と破壊行為もあり、すみません、このリストは今ドイツ語ですが、適切な翻訳を忘れてしまいました。盗難と破壊行為は約6〜7%を占めており、特にエネルギー危機と気候危機の観点から、私たちの美術館の気候調整にとっては大きな問題となっている不適切な相対湿度と温度はわずかな被害の一部しか占めていません。

面白いことに、巨大な保険会社であるミュンヘン再保険が、ベルリンの将来の気候変動シナリオの評価を行いました。ベルリンは都市として、日本のように地震の多い地域ではありません。洪水の危険があるわけでもなく、豪雨に関してもそれほど深刻ではありません。それに低地です。しかし、竜巻のリスクが赤い色で評価されているのには驚きまし

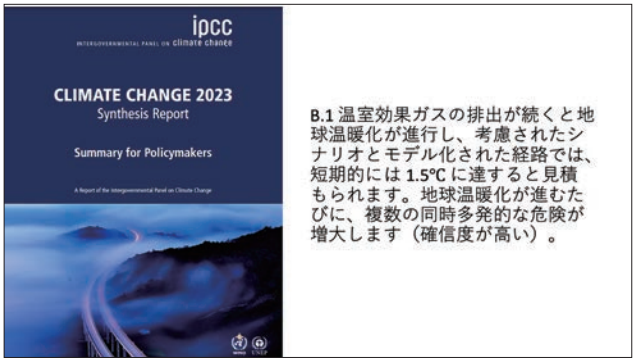
た。そして、この数日間私たちも聞いたように、訓練が重要であるとのことです。特に日本では……。現に、オープニングで、東京での1923年の地震について聞きました。その日の昼過ぎに起きた被害と火災についてです。実際、博物館の中で、竜巻のリスクが誰のレーダーにもなかったことに驚きました。私の上司、総局長にこれを見せると、「え？ 竜巻？」といつも言われます。それで私は彼らに言います、「はい、でもアメリカを見てください。オクラホマでは学童が教室からシェルターに移動するのに80秒しかありません。ベルリンでこれをやるのは無理です。誰もどこに行くべきか、どう行くべきかを知りません。」なので、これを念頭に置いてください。私たちはもちろん、博物館の壁を越えて活動しています。

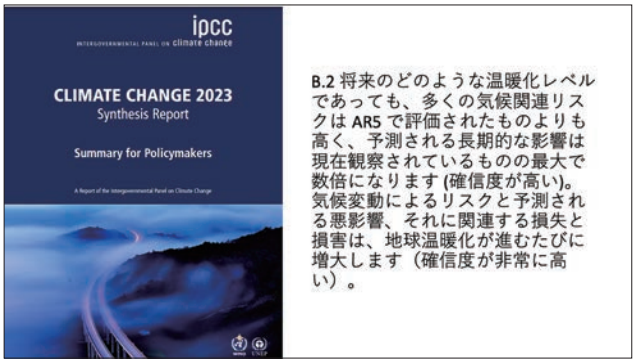
たとえば、私たちは4月に、今日ここにいる何人かの参加者、ポーリナやヴァーノンを含むメンバーがジョージアで開催されたイベントに参加し、共催しました。そのイベントは市民社会、オープンサイエンス、協力の付加価値についてで、ジョージア国立博物館で開催され、もともとはウクライナへの戦争、ロシアによるウクライナへの戦争に焦点を当てていました。2月6日にトルコで大地震が起こった後、他の世界の地域にも焦点を当てるようになりました。



Conference from 26 to 29 April 2023 at the Georgian National Museum:
"Collaboration In Times Of Crisis: Preserving Natural And Cultural Heritage"

これらのスライドは私の頭にはありませんでした。いつもつまらないと思っていました。しかし、これらを示すことにします。なぜなら、私は我々の意思決定者、政治家たちが少なくともIPCC評価報告書の要約を読むことを期待しているからです。今年発表された第六次評価報告書から、2つの文を引用します。第一に、持続的な温室効果ガスの排出は、近い将来には1.5℃に達するとの最良の見積もりをもたらすでしょう。世界的な温暖化が進むごとに、多くの同時発生する危険が強まるでしょう。そして、評価報告書は常にその文の信頼性の範囲を示し、この文には高い信頼性があります。





気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の報告書からのこれらの文を紹介した私の第2の講義では、世界的な温暖化の増加につれて気候変動からのリスクや予測される悪影響、それに関連する損失と被害がエスカレートするという記述には非常に高い信頼性があります。このパネルは30年以上前に設立されました。そして、パリ協定から8年が経過した今、この協定は世界中の198か国に署名されていますが、現実ではどうなっているのでしょうか？ 誰もそれらを読まないし、政治家たちも読みません。トークショーを聞き、人々が話している中で、気候危機が本当に人為的なものなのかと疑問に思う声が上がっています。

再び、Robert COMBSの素晴らしいプレゼンテーションの跡をたどると、今年8月26日に私が住んでいるバイエルンの近くの小さな村、ベネディクトボイエンで、10分間続いた雷雨と雹が窓やガラスを破壊しました。今、ベネディクトボイエンでは、戦後のような状態になっています。



ベネディクトボイエルン、
2023 年 8 月 26 日の雷雨の余波



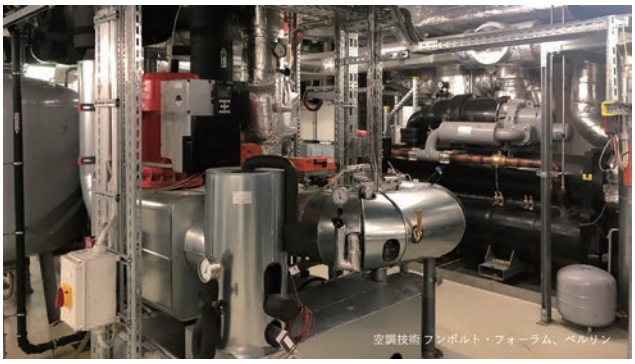
壁の仕上げ。この村には一つも損傷した屋根がありません。ミュンヘンの保険会社は、バイエルンでの10分間の雹が降った場合の被害額を約6億～7億ユーロと見積もっています。

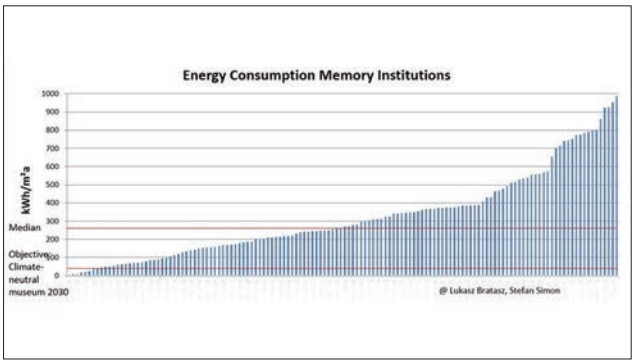
そうですね、世界中で多くの美術館が建設されていますね。この21世紀初頭、19世紀と20世紀を合わせたよりも多くの美術館が建設されています。中国では毎年、約700の美術館が建てられています。

美術館がなぜ気候危機の議論で非常に重要な利害関係者なのか、それはなぜでしょうか？ それは、美術館がその面積に対して多くのエネルギーを使用するためです。美術館は都市の中で最もエネルギーを消費するトップの利用者にランクされることがあります。時折、彼らは病院よりも多くのエネルギーを使用します。数年前にイェール大学で行われた研究では、美術館が病院と医学校を合わせたよりも多くのエネルギーを使用していることが分かり、これに驚かされました。この認識は、私たちのタスクフォースのリスク管理と研究室で行っている取り組みを変えるきっかけとなりました。



私たちはエネルギー消費を指標にしており、これを共有させていただけるだけです。すでに東京の国立博物館と連絡を取り、エネルギー指標を提供する予定です。もしエネルギー消費を共有していただければ、評価を受けることができます。どの程度の位置にいますか。中央値よりも下にいますか。それとも中央値よりも上にいますか。見ての通り、現在150の美術館がランク付けされています。左側のものはほとんど見えません。例えば、ポーランドとデンマークの新しい保管施設は、年間使用量が1平方メートルあたり10キロワット時未満です。それは驚くべきことです。同時に、まだ1平方メートルあたり年間200、300、400、500キロワット時を使用している美術館もあります。これはもはや受け入れがたいことです。なぜなら、本当に気候中立の美術館を望むのであれば（下の赤い線が示すように）、30～40キロワット時でなければならないからです。これは2030年までに公共セクターに適用される欧州連合の気候中立を考えると、受け入れられない数字です。おそらく2035年にも可能ではないでしょう。その後、1平方メートルあたり年間30～40キロワット時を超えるエネルギー消費の余地はありません。

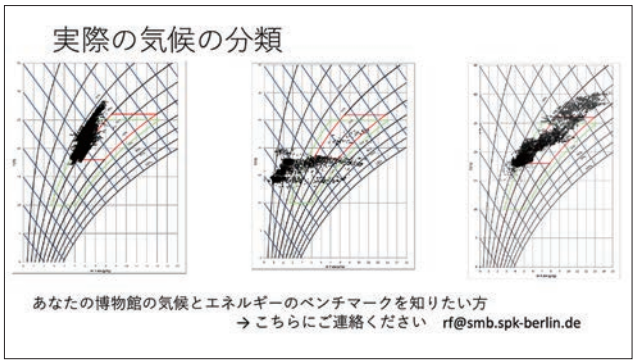




世界中の美術館に無償で提供しているものの一つは、実際の気候を分類することです。彼らは実際にどのような気候を持っているのか？ なぜなら、貸し出し契約には基準があり、非常に狭い湿度や温度の範囲が求められる基準もあります。その問いは、どの美術館が実際にそれを行っているのか、貸し手に尋ねるだけでなく、自分たちの施設にもそれを持っているのか、ということです。世界中で非常にわずかな美術館しかASHRAE AAクラスを有していません。おそらく書類上ではそうかもしれませんが、実際にはそうではありません。非常に、非常にわずかです。私たちは

透明性が必要です。JohnやAsher Smithが言ったように、私たちは正直であり、これを明確にする必要があります。

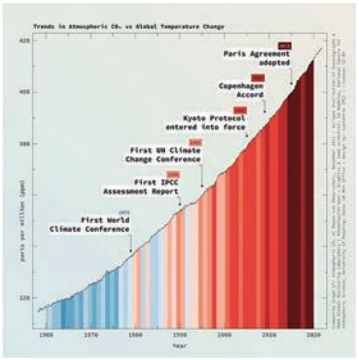
過去2～3年間の私たちのタスクフォースの進行を見てみると、美術館島での破壊行為、ウクライナへのロシアの戦争（アートを避難させる場所を決定する優先順位の決定）、壁に接着された気候活動家たち、その後のエネルギー緊急事態により20%のエネルギー節約が必要とされ、そして今年の夏の激しい気象により私たちの備蓄に大きな影響が出ました。これにより、リスク管理、リスク分析、およびリスク管理の取り組みをより一層強化する必要があることが理解されます。なぜなら、これらの出来事の連鎖は止まることがないからです。





これは悲しいことです。実際のところ、美術館は地球温暖化の主要な原因ではありません。すべてのCOP、すべての気候会議は、その後により多くの排出が生じる結果になっています。これらの努力にもかかわらず、温室効果ガスは減少しておらず、逆に増加しています。例えば、ドイツでは2021年には2020年以降でほぼ5%増加しました。これはどうして可能なのでしょうか？ アントニオ・グテーレスが指摘したように、これらの無責任で本当に犯罪的な行為は、真の気候犯罪者は、排出量を抑制するための指導力を発揮できない人々であることを示しています。

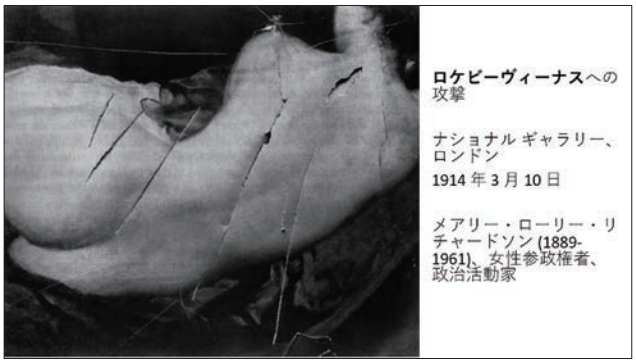
私たちのところに来るのは活動家ではありません。もち





ろん、このクラナッハの絵には瞬間接着剤の跡が残っています。

ここで見ていただけるように、これは1914年にロンドンのナショナル・ギャラリーで起こった出来事とはかなり異なります。そのとき、メアリー・リチャードソンは婦人参政権のための戦いで、ナイフでロークビー・ビーナスを切り裂き、最初に設置された保護ガラスを破壊し、それを断片に切り裂きました。これまでのところ、気候活動家たちは絵画を選択する際に慎重さを見せています。だからこそ、彼らが「絵画を攻撃する」とは言わないように気をつけています。彼らは絵画の上のグレーズやスクリーンを攻撃しています。もちろん、これはそう簡単ではありません。グレーズがかかった絵画でも問題や損傷が発生する可能性があります。

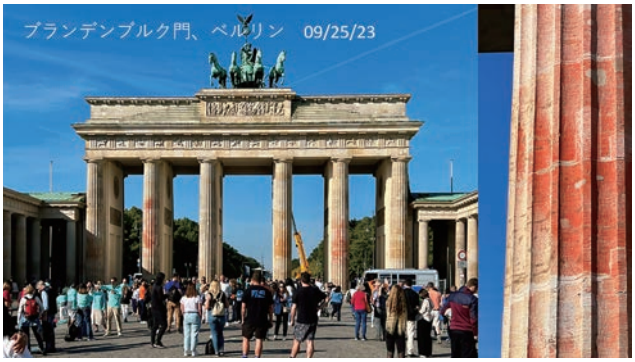


この瞬間に、私たちはロークビー・ビーナスのプレゼン

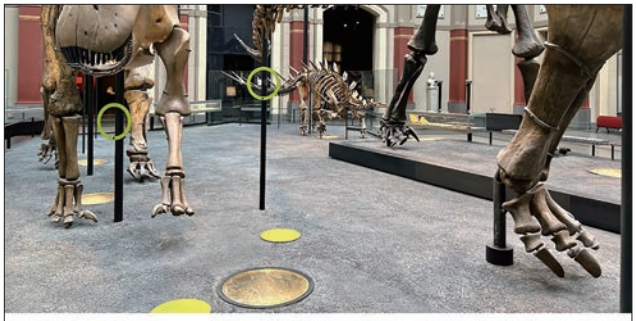
テーションを見てうれしく思っています。これは8月に私たちのギャラリーで起こったことです。その後、私は上司でに電話をかけ、「彼らと話す必要があります。最終的に議論に参加する必要があります」と伝えました。彼らはロンドンにいましたし、ドレスデンにいました。ドイツのミュンヘンにある2番目の美術館にもいました。

それは2022年8月のことでした。最初は何の返答も得られませんでしたが、彼女は偶然その土曜日にバヴァリーニにいました。彼女はその日の美術館で起きたことを直接経験しました。そして、その後、私はSMSで短いメッセージを受け取りました。「活動家たちと連絡を取れますか？ 彼らと一緒にコーヒーを飲みたいのです。」その時、ベルリンの国立美術館は他の全ての美術館が「どうやったら彼らと話ができるんだ?」と騒いでいるのを尻目に非公式に、その人たちをコーヒーに招待した最初の美術館だったのです。私はそれが価値があると思います。その後、私たちの美術館で他の攻撃は見られませんでした。何が起こるかは分からないことですね。これらの行動がエスカレートする巨大なリスクです。しかし、気候活動家との対話は重要だと思います。

もちろん、彼らも間違いを犯します。それは数週間前、ブランデンブルク門で起きました。オレンジ色は、まあ、底には落書き防止のレイアウトがあるので簡単に掃除できます。上部では、まだ掃除に苦労していることがわかります。活動家たちは水溶性塗料を使えば簡単にきれいになると思っていたようですが、砂岩は乾いていますからね。それほど簡単なことではありません。



一部の美術館は、接着剤の痕跡を展示物の一部として取り入れています。例えば、ベルリンの自然史博物館がそうです。ここでは、恐竜やフレームに接着された活動家たちの痕跡を、美術館は訪れる人々に気候危機についての情報提供として活用しています。これが実際に自然史博物館が行うことであり、非常にうまく機能している一例です。


ベルリン自然史博物館（フンボルト博物館）– 05/2023

月曜日に訪れた別の美術館、シュタインベルクの美術館は、ウィーンのレオポルド美術館で開発された対策に従っています。この対策では、1.5℃またはこの場合は3℃の気温上昇に比例して風景画を傾けることが含まれており、何かがこの世界で起こっていることを人々に気づかせるためのものです。



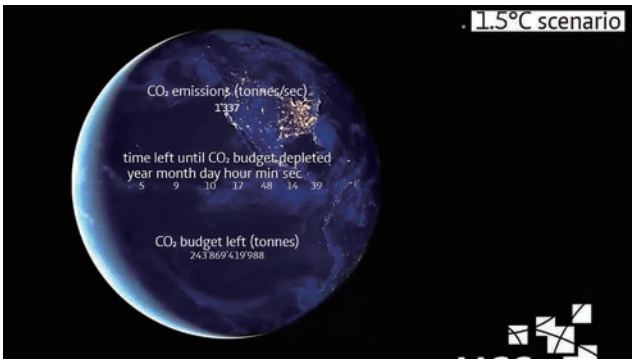
これが私が強く主張する理由であり、それに触れてくれてありがとう。ドイツの8つの美術館が活動家たちと協力しました。私たちのグループの中で、「ステファン、君は狼を鶏舎に入れている」と言う人もいました。はい、たぶんそれが私たちがしていることですが、私たちは彼らと話す必要があると考えています。7月末に研究室で行われた夏のパーティーでは、ほぼ千人の訪問者とともに、ラスト・ジェネレーションも招待しました。

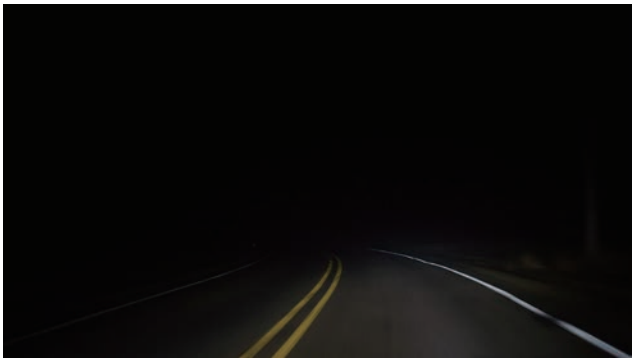
終わりに近づいていますが、おそらくこれをリンクとして見せることができるかもしれません。これは、1.5° Cのシナリオに対処するために、この惑星が残しているCO_2排出の予算です。すぐに理解できるでしょう、これはばかげています。これは絶対に達成されないでしょう。残りは5年、9か月、10日で、それからこの予算は使い果たされます。つまり、私たちは排出することができますが、私たちの子供たちや孫たちはできません。これは気候正義のテーマであり、この惑星の未来に関連するトピックです。だからこそ、私はリスク分析を





行うことに賛成しますが、同時に気候活動家と協力して議論し、働くことを提唱しています。私たちが幸せであれば、非常に幸せであれば、50年後、私たちの子供たちはこれらの人々が存在し、彼らが声を上げ、我々の政治家がこの惑星を非常に無責任に破壊の瀬戸際に導いた際に立ち上がったことを喜ぶでしょう。どうもありがとうございました。





ICMS年次総会　東京大会

交流会

浮世絵・摺師実演

世界遺産 日光の社寺「防災セキュリティ視察」

東京大会実行委員会の準備風景

大会準備資料ICOM - ICMS 東京大会2023運営サポート


International Committee for Museum Security
ICMS






ICOM-ICMS Conference 2023 in Tokyo
ICOM-ICMS 東京大会 2023
ICMS
Save the Dates:
September 23, 24, 25 2024




ICOM-ICMS Conference 2023 in Tokyo
ICOM-ICMS 東京大会 2023
ICMS
LOS ANGELES HOST LOCATIONS INCLUDE:
Getty
&
LACMA


ICMS



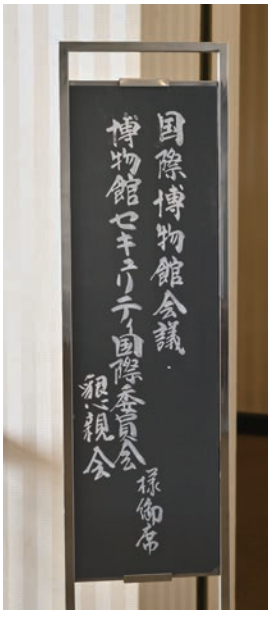

Seiyoken





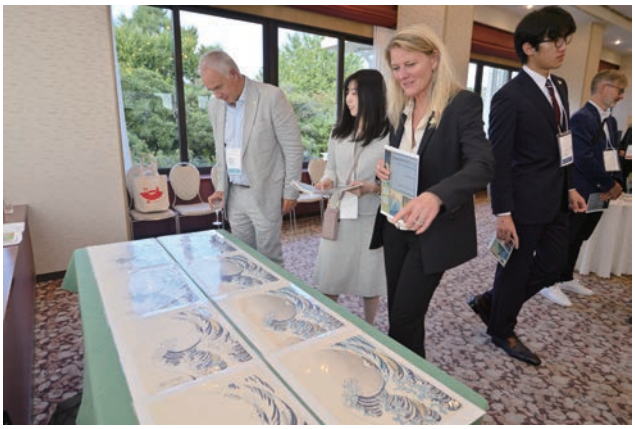





国際博物館会議
博物館セキュリティ国際委員会
理事会
採御席












Ukiyo-e
Woodblock Prints
ー浮世絵木版画ー


ICMS 2023 TOKYO
PIC-COLLAGE



世界遺産 日光の社寺「防災セキュリティ視察」

Krzysztof OSIEWICZ　（ポーランド）
ポーランド国立博物館機構 公共コレクション保存部門 代表

温かい歓迎と完璧な会議運営、そして日本文化について学ぶ機会を与えてくださり、ありがとうございました。

日光の世界遺産に関するPaulina女史のコメントに全面的に賛成いたします。

私の考えでは、世界遺産日光の建造物に対する最大の脅威は以下の通りです。

1.

建造物の周りの古い木々です。台風や地震が発生した場合、樹木が建物の上に倒れ、取り返しのつかない損傷を与える可能性があります。

2.

放火やその他の現象による火災の発生は、おそらくスタッフが発見し、消火するでしょう。しかし、内部に火災検知システムがあるとは思いませんでした。私は、寺院周辺の外壁に線状の熱感知器（ケーブル状）の設置をご検討することをご提案いたします。

3.

消火器には気づきましたが、それを見つけるのは私にとっても容易ではありませんでした（適切にマークされた消火器を2つだけ見つけることはできました）。この消火器は観光客には見えず、火災が起きても使うことができないと思います。

4.

来訪者、特に海外からの来訪者には、アラームポイントがどのようなものか、何のためにあるのか、アラームポイントを使用する必要がある場合はどうすればよいのか、説明を行うべきだと思います。

5.

CCTVシステムは連絡通路をカバーしていますが、すべての中庭がその範囲にあるわけではありません。私の考えでは、監視は建物内外のすべてのスペース、特に寺院の前の中庭をカバーすべきです。カメラは目立たないように取り付けることができ、それによって器物損壊の犯人を特定することができます。また、来訪者が不適切な行動をとった場合に、録画が証拠となります。ポーランドでは、美術館のカメラの録画は30日間保存されます。私の意見では（私が観光した時だけですが）、夜間や雨や霧の時の画質は満足できるものではありません。

Paulina女史(P100)が書いているように、複合施設のエリアは十分に表示されていません。私の目から見ると、個人旅行者にとっては不親切極まりないです。

6.

寺院の中庭（寺院の入り口や階段）に警備員のポストがあるにもかかわらず、そのようなスタッフがいませんでした。そのようなスタッフがいれば、危険やパニックに陥ったときに、参拝者を助け、避難経路を案内することができることでしょう。それ以外の点では、複合施設の入り口と門の警備は非常に良かったと評価いたします。





7.

観光の方向性を定め、それをよく示すことが有用でしょう。

私たちのコメントは、手続きや書類、警備センターについて十分な知識を持たない来館者としての立場を反映しています。そのため、間違いがあるかもしれません。

日本文化のほんの一部と出会い、学ぶ機会を与えてくださったことに改めて感謝いたします。また、今後ともよろしくお願いいたします。ご都合がよろしければ、いつでもポーランドにお越しください。

よろしくお願いいたします。





Valentina SABUCCO　（イタリア／英国）
イングランド芸術評議会

1.　背景

2023年10月13日、私はICOM-ICMSの年次総会後に企画された視察の一環として、日光東照宮宝物館を訪れました。日光東照宮への道中、ICMSの参加者全員は、日光東照宮の警備体制について意見を述べ、必要に応じて提言するよう求められました。

以下は、私が宝物館を訪問した際に感じたことであります。念のため付記しておきますが、会場の学芸員や運営責任者とセキュリティに関連する話をしたわけではないので、以下の評価は、ある程度のフィードバックにはなるものの、ミュージアムのセキュリティに関するより多くの情報が事前に、あるいは訪問中に参加者と共有されていれば、より包括的なものになったかもしれません。

2.　博物館の位置とレイアウト

日光東照宮宝物館は、ユネスコ世界遺産「日光の社寺」の敷地内にあります。

近代的な2階建ての独立した建物で、1階に正面玄関、受付、トイレ、売店、2階に展示スペースとメディアルームがあります。2階へは階段かエレベーターで上がります。

2階では、展示室に入る前に2基の神輿が展示され、物理的なバリアと「触るな」のサインで保護されています。展示スペースは、窓のないギャラリーでつながっており、徳川家康の日常生活の品々や、徳川幕府の武器や戦闘用具の全コレクションなど、さまざまな品がカテゴリー別に展示されています。

展示スペース内の見学者導線は、ある扉から入場し、別の扉から退出するように設計されており、見学者の動線と管理を容易にしています。

3.　脅威とリスクのレベル

展示室には武器やその他の武器庫が展示されているため、簡単に溶かされて転売される可能性があります。窃盗の可能性は考えられますが、宝物館の場所と、犯罪者がそこへたどり着くのに要する時間から、現在のところリスクは低いと見てとれます。また、この宝物館は世界遺産に指定されており、様々な神社仏閣の境界線上にあるため、盗難に遭う可能性のある物品をより容易に入手することができます。

来館者による偶発的または、意図的な破損も排除すべきではありません。展示品が展示ケースに収められているため、破損のリスクは軽減されています。しかし、公開展示されているものについては、監視が必要であります。

火災や放火（宝物館は樹木やその他の木造建築物に囲まれている）、あるいは広く自然災害による損害の可能性も排除すべきではありません。

4.　物理的構造

1階と2階の外周壁はガラスとコンクリートでできています。前者は侵入や破損に対して非常に脆弱です。使用されているガラスがどのようなものかは不明ですが、従来の安全ガラスであれば、1階レベルで適切な工具を使用して侵入が成功する可能性が非常に高いと評価します。開館時間





中は壁に埋め込まれている二重葉の木製ドアのようでした。それらは隠蔽されていたため、その堅牢性、ロック機構、および警戒しているかどうかを検証することはできませんでした。24時間警備員が常駐しているのでしょうか、あるいは「ロック・アンド・リーブ」なのかも不明でした。このため、展示スペースは夜間は常に厳重に施錠し、鍵を使用する場合は、スタッフが場外に持ち出すことなく、事務所内の金庫に入れておくことを推奨します。

5. アラーム

侵入者検知システムと火災システムは設置されているが、その詳細については不明であるため、コメントすることは難しいです。

6. 展示ケース

展示スペース内にはすべての展示品がケースに収められており、故意または過失にかかわらず、展示品が破損する潜在的リスクは限定されています。しかし、展示ケースの詳細が不明であるため、その頑丈さについてコメントすることはできかねます。

7. 巡回

訪問時、宝物館の2フロアを巡回しているスタッフが数名確認されました。神輿2基が展示されている展示スペースのすぐ外側に常駐のスタッフを配置し、バリアーをよじ登って故意または偶然に神輿を傷つけたり、例えば自撮りしたりすることがないようにすることが推奨されます。また、上記と同じ理由から、展示品が公開されているときは常に、ギャラリー内で継続的な監視を提供する必要があります。

8. 緊急時対策

緊急時計画が実施されているかどうか、また実施されている場合、その内容は不明です。しかし、よい習慣として、世界遺産全体ではなく、ミュージアム専用の計画が存在し、毎年見直されることが推奨されます。サルベージ計画も存在する必要があります。

緊急事態が発生した場合、誰が責任者であるか、誰に連絡すべきか、従うべき全体的な手順を知ることができるよう、宝物館の職員、場合によってはボランティアは、年に一度、その計画に関する訓練を受ける必要があります。

本報告書の日付2023年10月20日





Nicolle BITTENCOURT　（ブラジル）
早稲田大学 大学院生

ニコル・ビッテンコートによる日光旅行の報告。

ICOM-ICMS会議「地域に根差した防災・安全セキュリティネットワークの構築～連携が生む相乗効果の事例研究」では、日光において従来の会議の期待を超える体験が行われました。具体的には、華厳の滝と東照宮です。

バスは、特別なガイダンスの下で、参加者を選ばれた場所に連れて行きました。

日光東照宮は歴史的に重要な意味を持ち、その優れた建築で有名です。ユネスコの世界遺産にも登録されています。日光東照宮は、さまざまな建物が立ち並ぶ複合施設で、精巧な職人技と信じられないほどの芸術的な細部を見つけることができます。神社境内では、日本語と英語の2つのガイドオプションがありました。ガイドはその場所と歴史に精通しており、そこには多くの優秀なガイドがいるようでした。

セキュリティ対策について、東照宮は建物、収蔵品、訪問者の安全を確保するためにさまざまな措置を講じているようです。まず目につくのは警備員の存在で、誰かが階段への道をふさいでいるなど、起こりうる妨害行為を監視し、迅速に対処するよう訓練されているようです。この警備員は複合施設の至る所に戦略的に配置されているようで、訪問者が必要な場合に彼らを確認できるようになっています。

出入管理対策もあるようです。来場者は、建物またはその周辺にアクセスするために、指定された入り口または出口を通過する必要があります。

秋は日光の繁忙期であり、東照宮は秋の季節の最も有名なスポットのひとつです。建物内部には、群衆のコントロールに不可欠な内部監視カメラがさまざまな角度に設置されていました。訪問者としての私たちには、一般的な予防措置が講じられているように見えました。将来的には、使用されているセキュリティ対策をより深く理解するために、追加の領域を探索したり、スタッフと対話したりする機会があるとセキュリティ対策をより深く理解できるかもしれません。

Paulina FLORJANOWICZ　（ポーランド）
ポーランド国立博物館研究所長

ICMS2023東京大会のホスピタリティと完璧な運営に改めて感謝いたします。大会に参加できたことを光栄に思います。

クシシュトフと私は無事に帰国し、オフィスに戻りましたが、日光世界遺産のセキュリティ対策についての「宿題」を忘れてはいません。

1.　歴史的建造物、特に神社の中に「出口」や「非常口」の標識が見当たりませんでした。もし火事が起きたら、どこに行けばいいのか、どっちに逃げればいいのかわからなくなってしまいます。

2.　日本語が話せない私にとっては、ガイドなしでの観光は難しいと思います。私たちはガイドと一緒にいたので、どこに行くべきかの指示を得ることができました。彼らなしでは、各見学場所への明確な道筋がなく、方向感覚を失ってしまうと思います。

3.　日本語と英語の両方で、さまざまな標識、情報プレート、その他のラベルがあり、少し圧倒されてしまいます。セキュリティに関するものもあれば、歴史的事実(これらは実際には統一されています)に関するものもあれば、お土産の販売などに関するものもあります。敷地全体に1つのユニークな視覚的識別/企業デザインがあれば、訪問者は指定された標識が重要であるか、単なる情報または宣伝であるかをすぐに知ることができます。

以上、日本語を母国語としないミュージアムの来館者の立場から見た私の発言であり、お役に立てば幸いです。

よろしくお願いいたします。



Pavel JIRÁSEK （チェコ共和国）
ICOMチェコ共和国　理事

ユネスコ世界遺産である日光東照宮、東京富士美術館、高尾山への視察は、多くの新しい経験をもたらしました。TAKAO 599 MUSEUMでの消防訓練にICMSメンバーが参加したことは非常に刺激的でした。日本人の同僚たちによる素晴らしい組織運営、フレンドリーな雰囲気、そして素晴らしい食事が、会議全体の忘れられない経験をさらに充実したものにしてくれました。

東京国立博物館と東京富士美術館の経営陣、ボランティアや通訳の方々など、すべての主催者に感謝します。多くのことを学ぶことができました。ICOM ICMS会議全体を見事に運営してくれた杉浦智氏に特別な感謝を捧げます。

ユネスコ世界遺産・日光では、さまざまな脅威から美術品を守るレベルを大幅に向上させる技術的な保護システムに焦点を当てました。同時に、木造の歴史的建造物にとって最も深刻な脅威は火災の発生だと考えております。これは、電気設備の欠陥、運営者やサービス業者の不注意、あるいは落雷などの自然的な理由によっても起こりえます。放火については、別の章で考慮する必要があります。効果的な予防策は、火災報知システム、自動消火システム、あるいは赤外線カメラや煙検知機能に基づく最新のビデオ監視システムです。日光東照宮宝物館には、これらの装置は設置されていましたが、現物の展示物には設置されていませんでした。また、日本遺産・高尾山にもこうした技術システムがないことに気づきました。しかし、おそらくは完璧に隠されているため、教養のある見学者にも見えないのでしょう。

しかし、もし設置されていないのであれば、私はあえてそれを考え始めることを勧めます。設置のための美的要件と安全要件を最大限に満たす方法は必ず見つかるはずです。

ありがとうございます！

Hans-Jürgen HARRAS （ドイツ）
前ベルリン国立美術館　セキュリティ部長

私たちが 2023 年の ICMS 大会中に日光東照宮を訪れた際、非常に楽しい時間を過ごしました。そこに漂う平和な雰囲気が好きでした。神社は本当に印象的な場所です。あなたが特にセキュリティと安全に目を配るようにおっしゃったので、いくつかのコメントをお伝えします。

現場や重要なポイントを監視しているようないくつかのビデオカメラを見ましたが、どこでそのビデオを見ているかは分かりませんでした。

神社の木造建築では、煙感知器が設置されているかどうかを確認することができませんでした。もしあったとすれば、非常にうまく隠されています。

火災の場合に迅速に消火できるように、携帯用の消火器を備えることをお勧めします。

神社エリアの小道には階段がある。お年寄りや体の不自由な人が階段を利用しやすくするために、階段の両側に（おそらく中央にも）手すりを設置することをお勧めします。

神社の建物にいる警備員はとても注意深いですが、同時によく隠れていて礼儀正しいです。彼らが何もしなければ、私は気づかなかったでしょう。

総括すると、神社のセキュリティと安全は非常に高い水準で、すべてが非常にうまく機能していました。毎日多くの見学者に対応しなければなりませんが、その対応も非常に素晴らしかったです。

全てに感謝しております！

Ilgvars IMSA　（ラトビア）
ICOM ラトビア／文学・音楽博物館副館長

リガ、2023年10月22日
関係者各位

ICOM-ICMS東京大会の一環として、2023年10月13日、日本文化省の招きにより、UNESCO世界遺産である「日光の社寺」を訪れました。そこでは、セキュリティの程度を評価し、日常の来訪者の視点から評価し、可能であれば私たちの推奨事項を記述することを目的としました。

その敷地は1957年に制定された自然公園法で保護されています。上記の建物を含む50.8ヘクタールの敷地は、1950年の法律で史跡に指定され、保護されています。この法律では、敷地内の現況に対する改造案は制限されており、改造には国の許可が必要です。

注意を喚起させていただきたいのは、専門家グループには、複合施設で使用されているセキュリティのタイプ、範囲、技術的な解決策に関する詳細な情報が提供されていなかったことです。専門家グループは、複合施設の管理部門やセキュリティ部門の担当者と面談または協議を行っていませんでした。上記の専門家の結論は、文化愛好者として複合施設を訪れた際の個人的な観察に基づいています。

専門家グループは、施設やその中の美術品を嵐、台風、豪雨などの自然災害からどれだけ保護できるかを評価することはできませんが、地理的な位置から判断し、建物の複合体は洪水から十分に保護されていると結論付けることができます。なぜなら、当施設は山岳地帯に位置しているからです。当施設は森の中に位置しており、強風の影響により、古木が折れたり倒れたりすることで、個々の建物やインフラに損害を与える可能性があります。

森林火災、電源の漏電、落雷、偶発的・意図的な燃焼の場合、敷地内の木造建築物、構造物、物品に引火する危険性があると結論づけられます。同時に、専門家は、火災事故の影響を最小限に抑えるために、木造の建物や木造の集合住宅は、火災の広がりを抑えると特殊な燃焼防止材で保護されていることを推奨します。建物の敷地はアクセスが難しい場所にありますが、専門家は、博物館が高地に適した消防車両を使用する地元の消防隊と密接に連携しており、地元コミュニティとも緊密に協力していることを知っています。

昼間の日光の社寺では、警備員達は労働時間中に頼り甲斐ないといった印象は全く受けませんでした。敷地内には、十分な数のサービス要員、監督者、レジ係、土産物販売員がおり、必要であれば、迫り来る法律違反を排除し、物理的な警備を実施することができております。ただし、勤務時間終了後や暗い時間帯の警備は懸念要因です。というのも、敷地が適切に保護され、周囲を囲まれているという印象がなく、不正侵入があった場合、悪党や荒らしの被害が速やかに特定され、阻止されるのかと心配になりました。

繰り返しになりますが、技術的なセキュリティ解決策、つまり、設置されている人感センサーや温度センサー、防犯カメラ、その他の技術的な解決策についての情報はありませんでした。技術的な解決策はしっかりと練られている可能性はありますが、来訪者や破壊者となりうる者にとってはその解決策は目立っていません。

私はこの施設の管理者が、よく練られた不測の事態に対するセキュリティプランを持ってリスクを特定し、それぞれの状況に対する解決策を持っていることを確信しています。



Kim COVENT　（ベルギー）
ヘント地方警察

ICMSの皆さま

東京で開催されたICOM-ICMS東京大会2023は素晴らしい成功を収めました。レセプションも会場も素晴らしかったです。本当にありがとうございました。また、プログラム、講演者、視察も素晴らしいものでした。皆さんが結びつけてくださったネットワークは、私にとってかけがえのないものであり、このような方々に直接お会いできたことは贅沢なことでした。特別なイベントを開催してくださった東京の組織の皆様、そして私を日本に連れてきてくださったICMS理事会の皆様、本当にありがとうございました。

お返事が遅れたことをお詫びすることから始めたいと思います。もちろん、参加者にフィードバックやさらなる洞察を求めるのはとても合理的なことです。多くの回答が寄せられ、私の回答が何らかの付加価値を提供できることを願っています。課題は、私たちが訪れたさまざまな遺産における安全・セキュリティ対策／状況について、個人的なレビューを行うことでした。上野の東京国立博物館は私の概要には含めておりません。

華厳の滝、日光（栃木）

日光国立公園の息をのむような景観に囲まれた華厳の滝では、日本一高い自然湖である中禅寺湖から流れ出た水が、緑に囲まれた岩の滝壺に落差97メートルで流れ落ちていきます。華厳の滝を上から眺めるための無料の上部デッキと、真正面から眺めるための下部展望台があり、わずかな料金でエレベーターでアクセスできます。

安全上の問題：エレベーターで展望台に上がると、立ち往生してしまう場合があります。緊急事態が発生した場合、観光客は全員、外に出て山で運試しをするか、2基あるエレベーターを使って1階に戻るしかありません。これは安全上のリスクです。私たちの訪問時には、障害者用のスロープを見かけませんでしたが、他の来場者全員が利用する方法以外の方法が彼らに用意されているものだと推測しております。また、観光客用ホームには売店があるので、在庫や商品を補充するための別のサービスエレベーターがあるのかもしれません。ネットで読んだのですが、この場所はかつて自殺で有名だったそうです（20世紀初頭）。階段とホームの周囲に金属製の柵が設置されているのがそのためかどうかは知りませんが、もしそうだとしても、柵を越えようとする人を阻止することはできないでしょう。

セキュリティの問題：エレベーターや並ぶための狭い列はスリを誘うかもしれません。

日光東照宮

日光東照宮は、最も有名な武将、徳川家康を祀っています。その彫刻と華麗な装飾が施された建造物は、日光の社寺としてユネスコの世界遺産に登録されています。また、「見ざる、言わざる、聞かざる」の由来となった彫刻も残されています。

安全上の問題：特に、火災、洪水、地震、火山の噴火に関する日本の非常に印象的な安全対策について紹介していただいたので、すぐに安全上の問題があるとはあまり思いませんでした。靴を脱ぐことで敬意を払う必要性は理解できますが、緊急事態に備えて保護用の靴を履かずに人々が多少無防備な状態で歩き回るという結果は好ましくないように思いました。

セキュリティの問題：観光客の目に見える警備員もいなければ、カメラやその他のセキュリティ技術も見当たりませんでした。私が最も懸念するのは、a)未知の犯罪者による文化財への破壊行為、b)神社で伝統的な実演を行っている神職への窃盗や暴行です。

日光東照宮宝物館

東照宮はこぢんまりとした博物館で、日光東照宮の歴史を紹介する資料が充実しています。館内では2本の日本語の映画が上映されています。

安全上の問題・治安上の問題：特になし。

セキュリティ上の問題：私の訪問中に気づいたことはありません。ほとんどのものはしっかりと保護されていましたが、小さなものは破壊や盗難の恐れがありました。


ICOM-ICMS Conference 2023
in Tokyo
ICOM-ICMS 東京大会 2023
ICMS
日光東照宮宝物館
NIKKO TOSHOGU MUSEUM





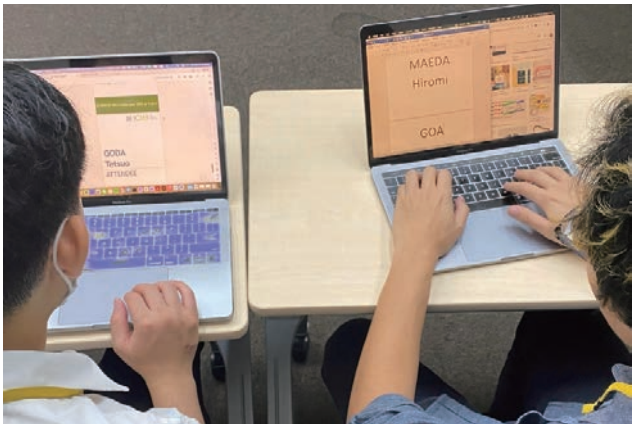




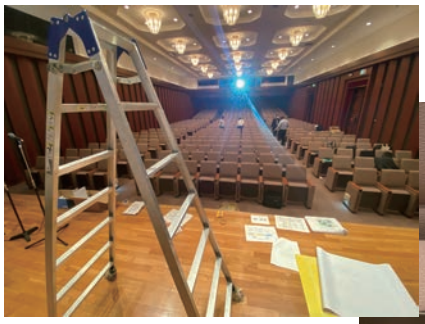

EBINA
Yuichi
ATTENDEE
COMBS
Robert
ATTENDEE
LABRADOR
Ana Maria Theresa
ATTENDEE
SABUCCO
Valentina
ATTENDEE
SIMON
Stefan
ATTENDEE
KIKAWADA
Sho
ATTENDEE
HARTMAN
L.J.
ATTENDEE
JIRÁSEK
Pavel
ATTENDEE
KINYANJUI
Joyce
ATTENDEE
COVENT
Kim
ATTENDEE
KURIHARA
Yuji
ATTENDEE
HANSEN
Anette
ATTENDEE
FLORJANOWICZ
Paulina
ATTENDEE
ZHENGYU
Li
ATTENDEE
DOKALIS
Nikolaos
ATTENDEE
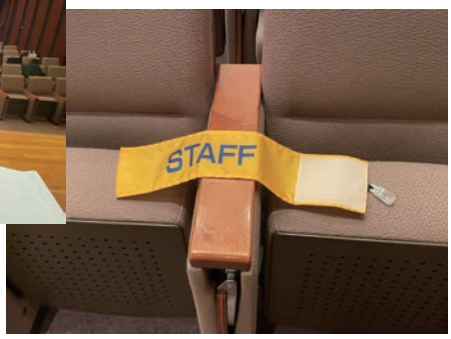

ICOM-ICMS Conference 2023 in Tokyo
Program
Building a Community-Based Disaster Prevention and Security Network:
Case Studies on Synergies Generated by Cooperation
ICMS
2023 Tokyo JAPAN
ICOM-ICMS Conference 2023 in Tokyo Program




MAEDA
Hiromi
GOA
GODA
Tetsuo
ATTENDEE






STAFF





ICOM - ICMS 東京大会2023運営サポート一覧

【ICOM-ICMS 東京大会2023 運営サポート】

浅野 敬大
アンドリュー・テー・ユ・ヤン
石村 凌平
今村 栄希
イム・ダイェ
海野 和夫
大塚 直美
久保 裕也
佐藤 正樹
佐藤 伸二郎
シーラ・チャン・オン・レー
髙橋 和之
高橋 かれん
竹之内 勝典
タニマル・タンヤポーン
円谷 貴美
西野 正恵
長谷川 尊司
バンノ ミユキ
ビクター桑原
松田 光雄
三谷 大河
宮川 透
安江 貴明
柳澤 想

（五十音順）

【八王子芸妓衆】

めぐみ
若葉
あやめ
小太郎
葉月
成華
てる葉

【協力会社・団体】

八王子市消防団
光村印刷株式会社
京王観光株式会社
日光警備保障株式会社
上野精養軒
合同会社沼辺木版
株式会社OICHOC
株式会社NHKグローバルメディアサービス

【防災セキュリティ視察地】

日光の社寺（世界遺産）
白川郷（世界遺産）
姫路城（世界遺産）
二条城（世界遺産）
高尾山（日本遺産）
金沢兼六園
金沢城
東京国立博物館
東京富士美術館
日光東照宮宝物館
京都市京セラ美術館
高尾 599 ミュージアム

発行者=博物館セキュリティ強化・連携推進事業実行委員会
発行年月日=2024年2月15日
© ICOM-ICMS東京大会2023実行委員会及び事務局

本報告書の無断転載・複製・引用禁止